14.4-575
1200700296214

愛媛縣勢要覽

昭和二年

始

凡例

一、本書は本縣の現勢を統計上より觀て如何なる狀態にあるか又如何に推移しつゝあるかを表示するを本旨とす。

一、本書は可及的最新の事實（主として大正十四年のもの）に據る、而して重要事項に就ては全國（道府縣）又は四國四縣の比較を列載し本縣の現勢地位を一層明かにするに努めたり。

一、本書は史蹟、名勝、天然記念物等其の主なるものを集錄したり。

昭和二年三月

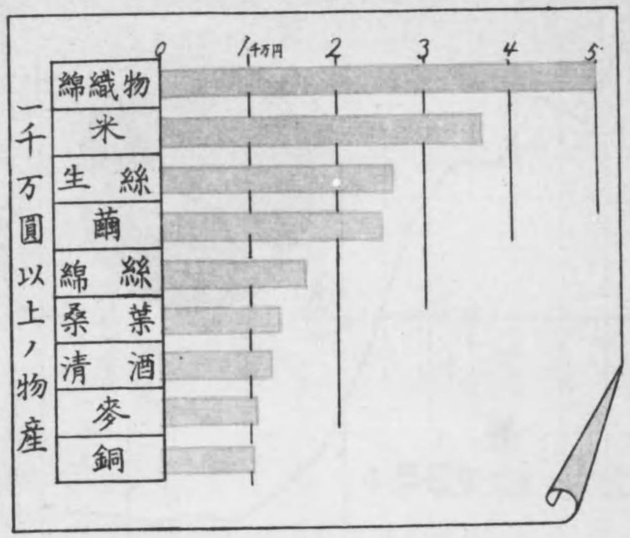
愛媛縣知事官房

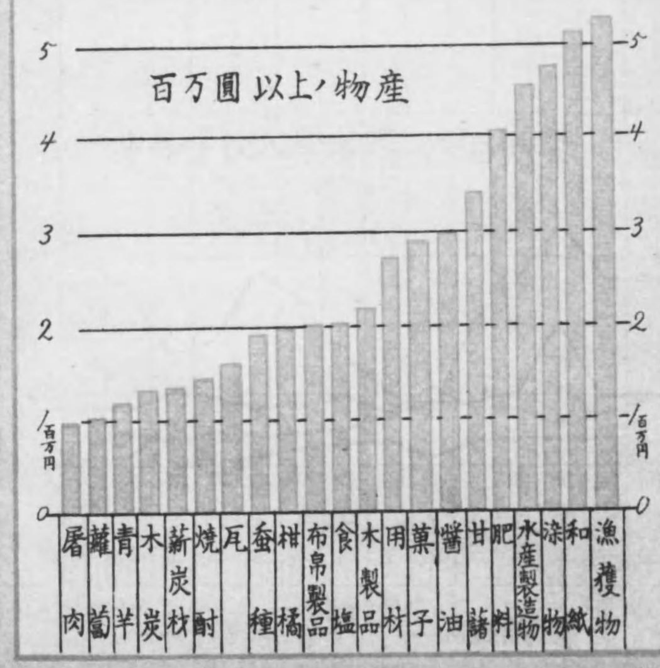
佐田岬
西
宇
和
郡
石之川
八幡浜
三瓶
宇和
郡
和
日振島
戸島
吉田
宇和島
岩松
和
郡
南宇和郡
御荘
長浜
宇
縣
廣見川

愛媛縣管内圖

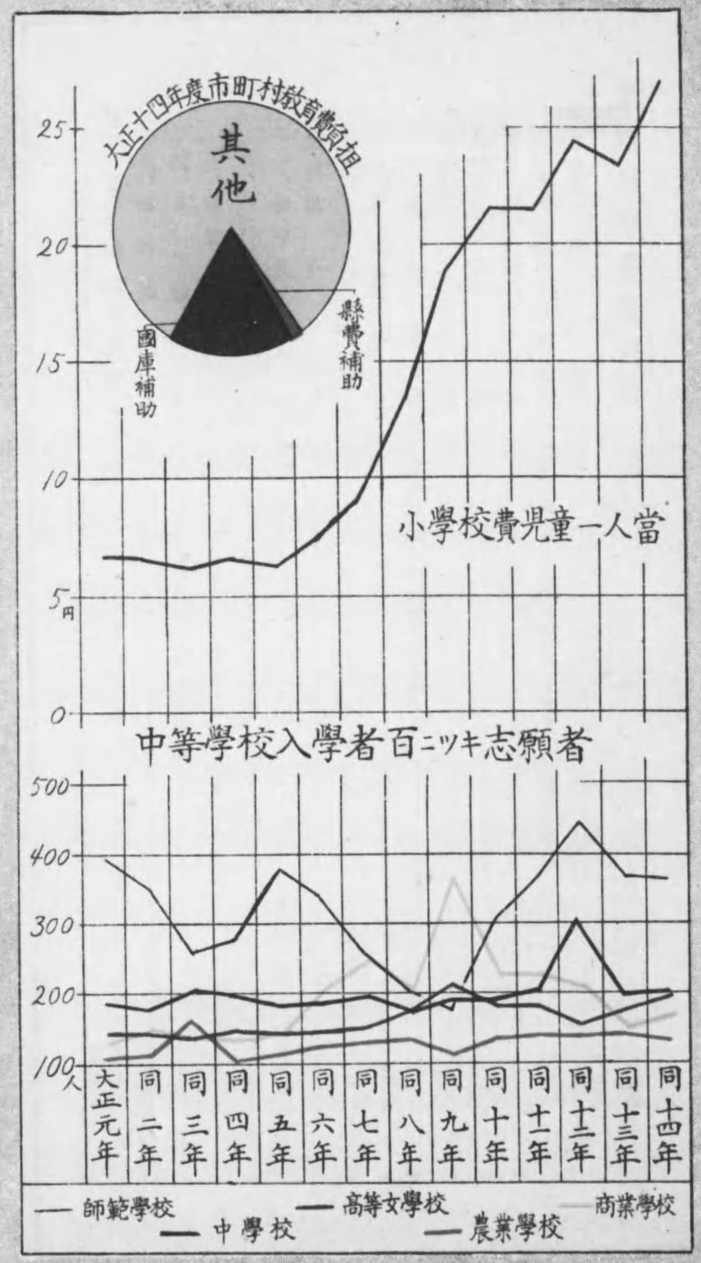
佐田岬
西宇和郡
南宇和郡
北宇和郡
東宇和郡
喜多郡
伊豫郡
穴浮郡
上浮穴郡
知縣
温泉郡
桑周郡
越智郡
新居郡
高縣郡
香川縣
徳島縣
宇和島
吉田
大洲
松山
今治
西條
新居浜
三瓶
宇和
野村
内子
中山
上灘
石手寺
出石寺
八幡浜
長浜
面河川
久万
岩屋寺
高縣
上今
銅山川
仙龍寺
大三島
伯方島
大島
生名島
佐島
剣島
弓削島
岩城島
怒和島
中島
二神島
安居島
青島
日振島
戸島
大浦
御城
荘辺
廣見川
川内
川之江
丹原
壬生川
伊予三島
石鎚神社
大山祇神社
三津浜
浜
堀江
郡界
縣界
山地
河川
縣道
國道
鐵道及停車場
電車軌道
市
町
縣廳
市役所
支廳
山頂
温泉
神社
寺院
港
歩兵聯隊
凡例

愛媛縣 (大正十四年)


一千万圓以上ノ物産
綿織物
米
生絲
繭
綿絲
桑葉
清酒
麥
銅
0
1千万円
2
3
4
5


百万圓以上ノ物産
5
4
3
2
1百万円
0
屠肉
罐詰
青芋
木炭
薪炭材
焼酎
瓦
蚕種
柑橘
布帛製品
食塩
木製品
用材
菓子
醤油
甘藷
肥料
水産製造物
涼物
和紙
漁獲物

愛　媛　縣


大正十四年度市町村教育費負担
其他
縣費補助
國庫補助
小學校費児童一人當
25
20
15
10
5円
0
中等學校入學者百ニツキ志願者
500
400
300
200
100人
大正元年
同二年
同三年
同四年
同五年
同六年
同七年
同八年
同九年
同十年
同十一年
同十二年
同十三年
同十四年
師範學校
中學校
高等女學校
農業學校
商業學校

愛媛縣勢要覽目次

第一章　總說……一
管轄—地勢—山嶽—河川—島嶼—地質—氣候—教育—交通—名邑—物產
第一節　沿革……四
第二節　區劃……五
第三節　土地……五
一、總覽……五
二、耕地整理……八
三、土性……九
第四節　戶口……一〇
一、世帶及人口……一〇
二、戶口增減の趨勢……一一
三、職業別戶數……一三
四、人口動態　出產及死亡—出生對死亡—婚姻及離婚……一五
五、海外移住……一〇
第二章　神社及宗教……二一
一、神社及神職……二一

二、寺院佛堂及住職……二二
三、教會講義所說教所……二二
第三章　教　育……二二
第一節　初等教育……二二
一、學齡兒童……二三
二、小學校—兒童及學級—教員……二六
第二節　中等教育……二六
一、中學校……二六
二、高等女學校……二六
三、農業學校……二八
四、商業學校……二九
五、商船學校……二九
六、工業學校……二九
七、實業補習學校……二九
八、師範學校……三〇
第三節　高等教育……三一
一、高等學校……三一
二、實業專門學校……三一

第四節　其の他の教育……三二
一、幼稚園……三二
二、盲啞學校……三三
三、各種學校……三三
第四章　衛　生……三三
一、醫師及齒科醫師……三三
二、產婆及看護婦……三三
三、傳染病……三四
四、肺結核……三四
五、牛乳及山羊乳……三五
第五章　產　業……三八
第一節　農業……三八
一、農家戶數……三八
二、主要物產　米—麥—雜穀菽—蔬菜—果實—特用作物—蠶—家畜及家禽……三八
第二節　林業……四五
一、面積及林相……四五
二、林業戶數……四五
三、開墾及造林……四五

四、林野産物……四六
五、移出……四六
第三節　水産業……四七
一、水産業者……四七
二、漁船……四八
三、漁獲物……四八
四、遠洋漁業及漁民移住……四九
五、水産養殖……四九
六、水産製造物……五〇
七、製壜……五一
第四節　鑛業……五一
一、鑛區……五一
二、鑛産物……五二
第五節　工業……五二
一、工業戸數……五三
二、工場……五三
三、主要物産　織物—蠶絲—清酒—綿絲—和紙—肥料—捺染物—漆器及陶磁器—木蠟……五三
四、電氣事業……六〇

第六節　會社及金融……六〇
一、會社……六〇
二、金融　銀行—信用組合—無盡—質屋—郵便貯金……六一
第七節　産業諸團体……六六
第六章　交通及通信……六七
一、道路諸車……六七
二、鐵道軌道……六七
三、海運……六七
四、通信……六九
第七章　社會事業……六九
第一款　救濟事業……七〇
第一節　行政廳の救濟……七〇
救恤—罹災救助—行旅病人死亡人の救護取扱—養育に係る棄兒—軍事援護—軍方面委員
第二節　自治團体の救濟……七三
第三節　私設團体の救濟……七三
第二款　福利事業……七五
職業紹介—公設市場—公營質庫—住宅組合—公營住宅……七四
第三款　教化事業……七四

露光量違いの為重複撮影

感化事業—盲啞教育—釋放人保護事業—勞働者教育—圖書館—青年訓練所—男女青年團少年團—民力涵養消費節約生活改善—地方改善事業—社會事業聯絡機關……七九
第四款　兒童保護事業……八〇
孤貧兒老病者保護事業—託兒事業—姙産婦保護事業
第八章　財　政……八一
一、國　稅……八二
二、縣　費……八五
三、市　費……八七
四、町　村　費……八七
名所舊蹟天然記念物

愛媛縣勢要覽

露光量違いの為重複撮影

愛媛縣勢要覽

感化事業　自啞院　釋放人保護事業　勞働者教育　圖書館　青年訓練所　男女青年團　少年團
民力涵養運動　節約生活改善　地方改善事業　社會事業聯絡機關　……七九
第四款　兒童保護事業
孤貧兒老病者保護事業　託兒事業　妊産婦保護事業
第八章　財　政　……八〇
一、國　稅　……八〇
二、縣　費　……八〇
三、市　費　……八〇
四、町　村　費　……八〇
名所舊蹟天然記念物　……八〇

管轄　本縣は南海道の西北部に位し伊豫の一國を管轄し東西四十二里、南北三十五里、面積三百六十九方里にして全國中第二十六位に在り、全國平均五百二十六方里に達せずして三重縣に匹敵し、東經百三十三度四十四分乃至百三十二度北緯三十四度十九分乃至三十二度四十八分に位す。

地勢　地形狹長にして東北より南北に長く延長六十余里、幅員六、七里乃至二十里の間を出入す。南方は山嶽蜿蜒として土佐に界し其の支脈は縣内に連亘し峯巒起伏して平坦地極めて少く山地八、平地二の比なり。海岸線延長三百十里岬灣の出入頗る多く就中佐田岬は遠く豐後海に突出し其の長さ十二里に及ぶ。

山嶽　石槌山は海拔六千五百三十七尺四國第一の高山なり、其の他六千尺以上の山嶽に二ノ森、瓶ヶ森、笹ヶ峯、筒城山あり多く土佐との國境に聳立す。

河川　河川中最大なるものは肱川にして其流程二十余里下流十二里の間は舟楫を通し、物資運輸の便あるは縣下本川あるのみなり、其の他重信川、加茂川、蒼社川、中山

川等あるも僅に灌漑の用を爲すに過ぎざれ共一般河川は急流に富み近時水力發電に利用せらるゝ向き多きを加ふ。

島嶼 沿海大小の島嶼に富み其の數二百余に達す、大なるものに大三島、大島伯方島、中島、興居島等あり。

地質 南部石槌山脈は結晶片岩帶より成り東方宇摩郡銅山川の溪谷より西方佐田岬に至る北部瀬戸内海斜面は白堊紀層、第三紀層、新生層、花崗岩地處々に連り概ね壤土質にして地味肥沃なり。

氣候 氣象は地方に依り寒温乾濕の差著しく松山地方は平均温度攝氏十四度七にして最低零下四度五、最高三十四度二を示す一般に石槌山系は寒冷甚しきも宇和地方は亞熱帶の感あり。（西宇和郡三崎半島は亞熱帶の北限地なり）雨量は各府縣中瀬戸内海地方は少雨、宇和地方は多雨の部に屬す。而して東豫地方は降雨量東平附近千八百粍なるも一般に九百粍内外にして少雨の部に在り、中豫地方は千百粍内外、南豫地方は千三百粍内外にして縣下多雨の部に屬す。

教育 教育に就ては其の機關の普及設備の完備に努め教員の優遇を計る等鋭意之が普及改善を怠らざるなり。

普通教育は一般に普及せられ小學校四百七十八校あり就學歩合九割九分七厘に達す。本縣公立小學校教員俸給月額平均（七月一日現在）五十五圓八十五錢全國平均五十五圓八十錢よりも多くして全國中其の高きこと第十四位に在り、教員中本科正教員は七割七分を占め代用教員は一割四分に過ぎざるなり。

中等教育も漸次普及せられ中等程度の學校四十校在り入學志願者百に付入學者五十三人の成績を示す。專門學校程度以上のものに官立松山高等學校、私立松山高等商業學校の二校あり。

社會教育方面を見るに青年處女にして補習教育を受くる者一万七千七百人あり近く青年訓練所三百七十九箇所縣下に設置せられたり、青年處女少年の各團体も普及し又不良兒童教育、盲唖教育の爲め夫々縣立自彊學園、私立盲唖學校各一校あり其の他圖書館十ヶ所設置ありて社會教育も漸次發展の途に在り。

交通　地勢に影響せられ海運は善く發達を遂げたるも陸上未だ充分なる交通機關を有せず國有鐵道は七十八哩三分の延長に過ぎずして松山より香川縣に通ずるのみ。私設鐵道は松山市附近三十三哩一分、大洲町附近十六哩、宇和島市附近十五哩九分、他は主要地連絡に自動車の便を俟つのみ國道一線二十四里、縣道百六十二線五百十二里なり。

名邑　松山市に亞きて宇和島、今治の二市あり人口一万以上のものに西條、三津濱、八幡濱の三町あり。

物産　物産の主なるものの中綿織物五千百万圓、米三千七百万圓、生糸二千六百万圓、繭二千四百万圓其の他一千万圓以上の産額あるは綿糸、桑葉、清酒、麥、銅なり。凡そ二百万圓以上の産額あるは魚獲物、和紙、染物、水産製造物、肥料、甘藷、醬油、菓子、用材、木製品、食鹽、布帛製品、柑橘、蠶種、瓦等なり。

第一節　沿革

明治四年舊幕領を廢して倉敷縣を置く、仝年又松山、今治、小松、西條、宇和島、吉田、大洲、新谷の各藩を廢して夫々松山、今治、小松、西條、宇和島、吉田、大洲、新谷の各縣を置きたるも亦倉敷、松山、今治、小松、西條の五縣を廢して松山縣に、宇和島、吉田、大洲、新谷の四縣を廢して宇和島縣となす。明治五年松山縣を石鐵縣に、宇和島縣を神山縣に改めしめ同六年松山、石鐵の兩縣を廢して愛媛縣となす。こゝに至りて伊豫の國を管轄するに至る明治九年讃岐を併管せしも同二十一年分離して今日に至る。

第二節　區劃

縣内を三市十二郡三十三町二百四十三村に分つ。中行政區劃として宇和支廳置かれ其の管轄區域内に二郡四町三十五村あり。

今治市及越智、周桑、新居、宇摩の四郡を東豫と稱し、松山市及伊豫、温泉、上浮穴の三郡を中豫又は北豫と謂ひ、宇和島市及東、西、南、北宇和並喜多の五郡を南豫と唱ふ。

第三節　土地

一、總覽

(一) 國有、民有地＝國有地四万二千二百五十八町歩（四月一日現在）民有地三十六万六千七百二十八町歩（民有地は大正十五年一月一日現在なり）にして本縣總面積五十七万四千六百四十六町歩に對比するに

國有地七分四厘、民有地六割三分八厘に該る。國有、民有地を合して總面積より二割八分八厘少きは河川、湖沼及道路敷地等を含まず山林面積の實測によらずして臺帳面積に依りしなり。

民有地の中有租地は三十三万九千六十三町歩を算し九割二分に該る其の土地臺帳面に依る地目別反別次の如し。

總數	田	畑	宅地	鹽田	池沼	山林	原野	雜種地
三三九、〇六三町	四八、三九九町	六三、三三町	六、一三〇町	三八町	一七〇町	三三〇、一三町	六七五町	一五七町

(二) 林野面積＝林野面積二十九万二千九十五町歩(大正十三年末現在)にして總面積の五割一分を占む。中立木地八割八分、無立木地一割二分の割合にして之を國有、民有の區別に分てば國有林四万六百九十二町歩(一割四分)民有林二十五万一千四百三町歩(八割六分)なり。

(三) 耕地反別＝耕地反別十一万百八十二町歩(年末現在)にして民有々租地の三割二分五厘に該り、全國平均十二万九千八十五町歩に達せず岐阜縣に亞ぎて全國第二十五位に在り。

田畑に別てば田四万八千三百八十七町歩(四割三分九厘)畑六万一千七百九十四町歩(五割六分一厘)にして前年に比し總數に於て九百二十四町歩(八毛)を田に於ては二十五町歩(一毛)畑に於ては八百九十九町歩(一厘五毛)減少せるなり。最近十ヶ年間に於ける趨勢に於て本縣は田畑共に年々不規則乍ら減少の傾向を示せり。而して全國の趨勢を見るに田は年々規則的增加の傾向を示し畑は大正十年を最島とし爾來漸減の傾向に在り。

本縣の田、畑は共に全國平均田六万六千町歩、畑六万三千八十五町歩より少く全國中田第三十三位畑第十五位に位して畑の地位高し。

耕地反別を自作地、小作地に別ては自作地六万二千二百八十五町歩(五割六分五厘)小作地四万七千八百九十七町歩(四割三分五厘)にして最近十ヶ年間の趨勢を見るに自作地は漸增して大正七年最高に達せしも其后漸減し仝十一年增加し仝十二年減少せしも爾來增加の傾向を示す。小作地は遞減せしに大正八年增加し仝九年には最高を示せるも仝十年に減少し爾來遞增せしも仝十四年に至り頓に減少す。全國の趨勢を按ずるに近年に至り自作地增加の趨勢に變じ小作地は減少の傾向に在りて本縣も亦大体此型の如し。之を田畑別に觀るに田は自作地二万七百八十六町歩(四割三分)小作地二万七千六百一町歩(五割七分)

にして自作田少し、全國に於て田に對する自作地の割合は四割九分にして本縣の割合低きを見る。而して畑は自作地四万一千四百九十八町歩（六割七分）小作地二万二百九十六町歩（三割三分）にして自作地遙に多し、全國に於て畑に對する自作地の割合は六割を占むるも本縣の割高きを見る。

總面積に對する耕地面積の割合は一割九分全國平均一割六分よりも高く四國四縣中本縣は香川縣の二割七分に亞きて多し、高知縣一割七分、德島縣一割三分の順位に在り。

耕地の分布狀況を見るに温泉、伊豫二郡及東豫四郡は水田多く且つ熟田に富み米作盛に行はれ其の平野の主なるものは道後平野（温泉、伊豫兩郡）最も廣く道前平野（新居、周桑越智三郡）三間平野（北宇和郡）之に亞ぐ。縣内を概觀するに林野、丘陵、傾斜地等殆ど極度に開墾せられ沿海地方の如きは丘頂樹影を見ざるものあり南豫五郡及上浮穴郡は畑多く薯作、養蠶旺に行はる。而して山林、原野、湖海等を開墾整理して耕地を擴張し得る見込面積は約一万一千町歩之を豫定の地目に分ては田は二千七百町歩畑は八千三百町歩なり。

二、耕地整理　明治三十三年耕地整理法施行以來大正十四年迄に發起設立施行を認可せるものは地區數二百十八面積一万三千七百四町歩にして之が整理費五百八十八万八千三百八十八圓に達す。中工事を完了せるもの地區數百二十三面積五千七百八十七町歩にして面積に於て四割二分の工事完了なり。今之を田と畑に付整理前と整理後の面積を比較するに田に於て整理前一万二百五十九町歩整理後一万一千四百二十一町歩にして千百六十二町歩（一割一分）の增加を示せるに反し畑に於ては整理前千二百八十町歩整理後八百七十八町にして四百二町歩（三割一分）の減少を示す。而して大正十四年末迄に於ける本縣地區數は全國中福井縣と共に第三十一位にあり四國四縣にては高知の三百三十四に亞きて多く香川百五十四德島百一の順位なり。整理後の面積に於ては本縣は全國中第二十六位にして四國四縣にては第一位を占め高知八千九百五十一町歩香川五千七百三十一町歩德島三千六百十五町歩之に亞ぐなり。

三、土　性　大要次の如くにして全耕地の六割五分は高燥地三割五分は低濕地にして一割五分は旱害を七分は水害を被り易し。

土性	百分比	土性	地方
粘土	一五	結晶宇岩系植土	宇摩、新居、喜多、西宇和郡の大部分、上浮穴郡の西部
植土若くは壌質植土	四八	花崗岩系砂質壌土若くは壌土	周桑、越智、温泉郡大部分
砂土	二八	砂岩質	温泉郡の東南部伊豫郡の大部分
腐植土	九	植土	西宇和郡の南部、東、北、南宇和郡の大部分

第四節　戸口

一、世帶及人口　大正十四年國勢調査（十月一日現在）に依る本縣の世帶數は二十三万四千六百七十八、人口百九万六千三百六十六にして第一回國勢調査（大正九年十月一日現在）に比し世帶數五千三百十、人口四万九千六百四十六の增加を示し全國中世帶數は第二十一位人口は第二十四位四國四縣に於ては各第一位なり。

總人口を男女別に見る時は男五十四万二千二百七十一女五十五万四千九十五にして女の多きこと一万一千八百二十四、女百に付男九十七人九分の割合となる。女百に付男の割合は全國百一人、德島九十九人八分、香川百一人、高知九十八人八分に比して低し。

普通世帶一に對する人口は全國四人九分本縣四人六分にして第三十五位にあり同位のものを擧ぐれば沖繩、高知、和歌山、島根の如し。

人口密度は全國中第十六位を占め一方里當二千九百六十七人にして全國の平均二千四百十七人よりも高く四國四縣に於ては香川の五千八百五十三人に亞ぎて高し今大正九年國勢調査の密度に比すれば一方里に於て百三十四人の增加を示せり。

地域並に戸口概括表

		大正十四年國勢調査					大正九年國勢調査		
		所轄町數	所轄村數	面積（方里）	世帶數	人口	一世帶人口	一方里人口	世帶數	人口
東予	今治市	—	—	〇・五	八、一五八	三七、七一三	四・六	七五、四一六	六、三七一	三〇、二九六
	宇摩郡	三	三	三三・三	一四、七三三	七〇、二五三	四・七	二、一七五	一四、四八七	六八、二七七
	新居郡	三	一六	二五・〇	一八、一九三	八七、八二三	四・八	三、五一三	一七、三六四	八一、七〇四
	周桑郡	三	一四	一九・三	九、六八八	四八、六八五	五・〇	二、五二三	九、六二六	四七、九一二
	越智郡	三	三三	二八・七	二六、六八〇	一二三、六五五	四・五	四、二八	二八、〇四七	一二三、七八六
	計	三	八五	一〇五・八	七七、四五一	三六七、一二九	四・七	三、四七〇	七五、八九五	三五一、九七五
中豫	松山市	—	—	〇・三	一三、二七〇	五八、二九二	四・三	一九四、三〇七	一一、九〇六	五一、八三七
豫	温泉郡	三	三九	四〇・七	三三、九五〇	一五九、一九一	四・八	三、九二一	三一、五八四	一四八、八四六

又ハ北豫 伊豫郡	四	二	二一・八	一三、八〇〇	六四、七〇七	四・六	二、九六八	一三、五五四	六二、四三〇						
上浮穴郡	一	一三	五一・八	八、五七四	三八、二三七	四・二	七六八	九、一二九	三八、一一〇						
計	八	六五	二四・六	六八、五九四	三三〇、四二七	四・六	二、七六六	六六、一七三	三〇一、二二三						
宇和島市	一	一	二・一	七、七二三	八三、二五八	四・五	一八、三四九	七、二九六	三二、二九四						
南 喜多郡	四	二六	三五・〇	一八、三七八	九七、四四八	四・五	二、三七八	一八、一九九	八〇、八八五						
西宇和郡	三	一九	一六・四	一二、二八七	五六、八六八	四・三	五、九四一	二、一七三	九四、七八三						
東宇和郡	二	一九	二九・六	一三、一四五	一〇〇、三〇六	四・九	一、九二一	一三、三〇九	五五、二六八						
北宇和郡	二	三〇	五〇・一	二〇、二六四	三二、三九六	四・七	二、〇〇二	二〇、四二七	九七、六四三						
南宇和郡	一四	五	一五・九	六、八三六	四〇八、八一〇	四・六	二、〇三七	六、九九六	三三、六七〇						
豫 計	一三	九	一四九・一	八八、六三三	一、〇九六、三六六	四・六	二、九六七	八七、三〇〇	三九三、三六八						
合 計	三三	二四七	三六九・五	二三四、六六八	一、〇九六、三六六	四・八	二、五七三	一四〇、六九六	六七〇、二二二						
徳島縣	三三	一〇七	二六八・一	一四三、六八三	六八九、八一四	四・七	一四五、二五二	六七七、八五二							
香川縣	二〇	一五四	一一九・七	一四六、九九八	七〇〇、三〇八	四・六	一、四九六	一四四、九九三	六七〇、八九五						
高知縣	二四	一七一	四九五・六	一四七、九二四	六八七、四七八	四・九	二、四一七	二三四、一八〇	一、一九〇、一〇三						
道府縣平均	三三	三二	五三一・八	二五五、三一〇	一、二七〇、九九六										

二、戸口增減の趨勢　明治二十一年末より大正十四年末に至る三十七ヶ年間に於て本縣の戸數は明治二十一年末の十八万五千百九に對し二割六分八厘を增加せり又現住人口は（大正十一年末限り廢止）大正十一年末に至る三十四ヶ年間に二割五分六厘を增したり、而して大正十四年國勢調査人口に比較すれば二割〇分九厘の增加に當る、其の主なる原因は出生死亡の差增による自然增加にして（移住來往の社會的移動に原由して本縣人口の自然增加の割合減少す）其の增加の梗概次の如し。

戸口增減趨勢

	戸數 實數	戸數 指數 本縣	戸數 指數 全國	人口 實數	人口 指數 本縣	人口 指數 全國
大正十四年十月一日現在	二三四、六七八	一二六		一、〇九六、三六六	一二〇	一五〇
同　九年十月一日現在	二三九、三六八	一二四	一五三	一、〇四六、七二〇	一二五	一四一
同　七年　末　現　在	二〇四、八七七	一一	一四三	一、二二四、七三六	一二四	一四五
明治四十一年末　現　在	一九六、八〇一	一〇六	一三四	一、〇五四、九二〇	一一六	一三八
同　三十一年末　現　在	一九〇、九九七	一〇三	一九	九九五、四四一	一一〇	一一三
同　二十一年末　現　在	一八五、一〇九	一〇〇	一〇五	九〇六、四二四	一〇〇	一〇〇

備考　大正十四年、同九年ノ戸數ハ世帶數ニヨル

三、職業別戸數　大正十四年末現在現住戸數二十一万七百九十五戸に對し有職業のもの九

割七分、無職業のもの三分に當る而して有職業の中農業最も多く總戸數の五割一分五厘を占め商業の一割六分三厘、工業の八分五厘之に亞く、又兼業戸數六万二百四十三戸中農業最多にして三割四分四厘を占め商業の二割三分、水産業の一割二分八厘、工業の一割四厘等之に亞く。

職業毎に大正七年と累年比較するに農業に於ては近年に至りて專業のもの減少し兼業のもの激増の傾向にあり畜産業及林業は專業兼業共に増加しつゝあり水産業及商業交通業は專業のもの増加し兼業のもの減少して工業及鑛業は專業兼業共に激減の傾向なり、其の増減狀況次の如し。

職業別戸數増減趨勢

（大正七年末を百とす）

		農業	林業	畜産業	水産業	鑛業	工業	商業	交通業	公務及自由業	其の他の職業	無職業	計
專業	大正十四年末	九八・〇	二二四・五	二三〇・六	二五・九	六二・五	七七・五	一二三・二	一二二・四	九八・〇	一三〇・三	一〇二・八	
	同 十三年末	九六・五	二二一・八	二三六・七	一〇七・七	五九・六	八五・四	一一三・九	一一四・二	一一六・三	一〇七・三	一〇一・四	
	同 十二年末	九七・六	二四一・五	八二・二	二五・三	五四・三	八五・七	一一三・七	一一二・二	一〇七・一	一五〇・八	九五・六	一〇二・二
	同 十一年末	一〇一・三	一七七・〇	八九・八	二六・三	四五・六	八七・四	一一〇・一	一〇四・〇	一〇一・二	一一一・三	九二・一	一〇一・三
兼業	同 十年末	一〇〇・四	一三三・五	五三・一	一〇五・八	六四・五	九〇・二	一〇七・六	一〇一・一	九七・九	一一二・一	八八・五	一〇〇・二
	同 九年末	一〇〇・〇	一二三・三	七五・五	九九・五	六七・九	九一・九	一〇一・三	九九・二	一〇四・二	一二五・九	八〇・九	九九・七
	同 八年末	一〇〇・一	一〇四・〇	九三・九	九七・〇	八二・三	九九・八	一〇三・七	九五・七	一〇二・三	九四・四	八二・一	九九・六
	同 七年末	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	—	一〇〇・〇
	同 十四年末	一三〇・一	一三〇・九	二三二・一	一〇三・九	四二・八	六三・七	九九・五	八九・一	一二三・九	一二三・八	—	一〇一・三
	同 十三年末	一三四・二	一四四・二	二四六・五	九一・二	四六・三	五七・九	一〇一・二	九〇・二	一四二・六	一〇六・二	—	一〇三・二
	同 十二年末	一四三・二	一三一・〇	三九二・八	八八・一	二五・三	六五・八	九三・三	一一三・七	九七・〇	—	一〇四・八	
	同 十一年末	九二・〇	九九・九	二八・三	一一〇・〇	六〇・四	八九・四	一一〇・二	一一二・一	一一九・五	一〇〇・五	—	九九・四
	同 十年末	九四・四	一〇三・一	二九・四	一一六・一	五九・五	八六・三	一〇五・〇	一一六・一	一一二・一	九九・三	—	九八・八
	同 九年末	九八・三	九二・七	七八・四	一〇二・九	七三・九	八八・〇	一〇六・〇	一一〇・九	九六・三	八七・四	—	九七・五
	同 八年末	九八・三	一〇三・九	八四・八	一〇七・一	七九・八	一〇四・〇	一〇六・七	一〇九・八	一〇七・六	一〇九・〇	—	一〇三・七
	同 七年末	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	—	一〇〇・〇
大正十四年（實數）	專業	一〇八、七四六	八五八	一一三	一〇、一一九	一、七五九	一七、八二〇	三四、三四八	四、四六六	一〇、九八七	一五、二三五	六、三五四	二一〇、七九五
	兼業	二〇、七六八	二、八三四	八三八	七、七三二	二六三	六、二七四	一三、八八八	一、〇八八	一、五九三	四、九六五	—	六〇、二四三
大正七年（實數）	專業	二一〇、九四三	四〇〇	四九	八、七九二	二、八二四	三二、九五一	三〇、九六〇	三、六五〇	一一、二〇八	八、二四二	四、八七八	二〇四、八八七
	兼業	一五、九五九	二、一六五	三六一	七、八三二	六二三	一一、六八〇	一三、九四九	一、三二〇	一、二八五	四、三六〇	—	五九、四二四

四、人口動態

（一）出產及死亡＝大正十四年本縣現在人の出產は人口千に付三十六人九分七厘にして全國平均三十七人に比し三厘少く、出生は三十五人一分七厘にして全國平均三十四人九分二厘に比し二分五厘多し、死產に於ては一人八分にして全國平均二人八厘に比し二分八厘少く全國中少きこと第十一位にあり。

死亡は十九人三分三厘にして全國平均二十人二分七厘に比し九分四厘少し而して之を前年に比すれば出生に於ては一人二分一厘死產は七厘死亡は二人五分六厘の增加となる。

出產及死亡

	出產			死亡			出產		死亡
	出生	死產	計	出生	死產	計	出生	死產	計（人口千ニ付）
大正十四年	三八、五六〇	一、九七六	四〇、三三六	二二、一九八	三五●一七	一●八〇	三六●九七	一●八〇	一九●三三
同十三年	三六、六二一	二、〇一八	三八、六三九	二三、六〇一	三三●九六	一●八七	三五●八三	一●八七	二一●八九
同十二年	三九、九三一	二、〇六四	四一、九九五	二二、一三〇	三七●二九	一●九三	三九●三二	一●九三	二〇●六七
同十一年	三七、一八二	二、〇二九	三九、二二一	二二、〇二一	三五●〇三	一●九一	三六●九四	一●九一	二一●六八
同十年	三七、八四六	二、〇八一	三九、九二七	二二、七五〇	三五●九〇	一●九七	三七●八七	一●九七	二一●五〇
自大正五年至大正九年五ヶ年平均	三五、七七九	二、〇二四	三八、〇一三	二四、一四七	三二●三四	二●〇二	三四●三六	二●〇二	二二●四〇

	德島縣	香川縣	高知縣	全國
大正十四年	二四、二二五	一、六二一	二五、八三六	一五、〇五一
同十三年	二四、四八五	一、二六五	二五、七五〇	二三、八六四
同十二年	二三、七一五	一、三八五	二四、一〇〇	一四、二三八
同十一年	二四、四〇三	二、二一〇	二四、四九四	一、二一〇、七〇六
自大正六年至大正十年五ヶ年平均	二四、二二五	一、六二一	二五、八三六	一五、〇五一
自大正元年至大正五年五ヶ年平均	二五、五六八	一、三六一	二五、〇四六	二〇、九八〇

備考　統計年鑑（現在地調）に依る

（二）出生對死亡＝現在人の出生對死亡の人口自然增加は最近十ヶ年間の平均に依れば一万七千三百四十三人にして大正十四年に於ては一万七千三百六十二人に上り人口千に付十五人八分四厘の增加に當る。

人口自然增加の趨勢

	出生	死亡	出生死亡の差增	人口千に付出生死亡の差增
大正十四年	三八、五六〇	二二、一九八	一七、三六二	一五●八四
同十三年	三六、六二一	二三、六〇一	一三、〇二〇	一二●〇七
同十二年	三九、九三一	二二、一三〇	一七、八〇一	一六●六二
同十一年	三七、一八二	二二、〇二一	一四、一六一	一三●三五
自大正六年至大正十年五ヶ年平均	三六、三〇〇	二五、〇四六	一一、二五四	一〇●三四
自大正元年至大正五年五ヶ年平均	三五、五六八	二〇、九八〇	一四、五八八	一三●一六

大正十四年	德島縣	二四、三二五	九、一六四	一五、〇五一	一三・二八
	香川縣	二四、四八五	一〇、六二一	一三、八六四	一五・一六
	高知縣	三三、七二五	八、四七七	一四、三三八	一二・三三
全國		二、〇八六、〇九一	八七五、五九七	一、三一〇、四九四	一四・六五

(三) 婚姻及離婚

(イ) 婚　姻＝大正十四年中に於て行はれたる本縣現在人の婚姻は九千九百十二組一日平均二十七組、人口千に付九組の婚姻ある割合となり全國平均八・壱組に比して稍高し、内普通婚姻九割三分五厘を占め入夫婚姻二分六厘婿養子婚姻三分九厘に當る、婚姻屆出は三月最多く六月七月の少きこと前年と同樣なり。

婚姻者の年齢を先つ夫に就て見るに二十四歳最多く千六十人あり二十五歳、二十三歳二十六歳等之に亞き、二十四歳を基準として年齢高くなるに從ひ順次減少し低くなるに從ひても亦漸減す。次に妻に於ては二十歳最多く千三百三人あり二十一歳、十九歳、二十二歳、十八歳の順に多く年齢の長するに從ひ順次減少を示せること夫と同傾向なり、六十歳以上にして婚姻せしものは夫百十八人妻三十八人あり、若きものは妻十五歳の五十八人、十五歳未滿の一人、夫は十七歳のもの二十四人、十七歳未滿のもの一人等なり。

(ロ) 離　婚＝大正十四年中に於て行はれたる本縣現在人の離婚は千三百六十七件にして一日平均三・八件人口千に付一・二件なり、離婚の種類は妻が夫の家を去るもの千百九十六件にして八割七分五厘を占め、夫が妻の家を去るもの九分一厘、離婚後双方婚家にあるもの三分四厘弱に當る、右離婚は殆んど協議上の離婚にして裁判上の離婚は二件あるのみ

離婚屆出は三月に最多く四月、五月、二月の順に多く七月に於て最少し。

夫婦關係繼續期間別に見る時は一年以上二年未滿最多く一割七分、一年未滿一割五分三年未滿一割二分等之に亞き五年以内に離婚する者は六割一分に當り二十年以上經過したるものの離別は七十四件ありて五分四厘に相當す、四國四縣の狀況を比較すれは次の如し。

婚姻及離婚四國四縣の比較

	婚姻 大正十四年 婚姻實數	人口千に付 大正十四年	同十三年	離婚 大正十四年 離婚實數	人口千に付 大正十四年	同十三年
愛媛縣	九、九一三	九・〇四	九・〇九	一、三六七	一・二五	一・二七

總島縣	六、四八一	九・四〇	九・三一	六六九	〇・九七	〇・八六	
香川縣	六、四九七	九・二八	九・二一	六四五	〇・九二	〇・九七	
高知縣	六、二四五	九・〇八	九・一八	七八九	一・一五	一・一三	
全國	五三、四三八	八・七三	八・六八	五一、六八七	〇・八七	〇・八八	

備考　日本帝國人口動態統計記述に依る

五、海外移住　本縣人にして海外々國に在留する者の總數は大正十四年末に於て二千二百三十四人にして中男千六百八人女六百二十六人なり。前年末に比較するに二百十七人（一割）の增加を示し之を男女別に分ては男は百五十五人女は六十二人の增加をなせり、仝十四年末に於て本縣人の在留國別を見るに北米合衆國に在る者千六人にして四割五分を占め伯剌西爾の四百七十二人の二割一分之に亞く其の狀況次の如し。

總數	二、二三四		秘露	六六	亞爾然丁	三五	ボルネオ　八
北米合衆國	一、〇〇六		支那	一五二	蘭領東印度	一	露西亞　四
布哇	三二		比律賓	三〇	歐洲諸國	七	知利　六
加奈陀	一〇七		英領海峽植民地及馬來諸邦	二〇	英領香港	一	暮利比亞　一
伯剌西爾	四七二						南洋諸島佛領印度支那　二
濠洲	七二		墨西哥	五	英領印度	一六	

第二章　神社及宗教

一、神社及神職　國幣大社大山祇神社は大山祇の神を祭祀す、大三島に鎭座し國寶數多所藏す、縣社三十五、鄕社百一、村社七百三、無格社五百六あり概ね維持方法確立して崇敬の實擧る、神職の數は國幣社に宮司禰宜各一人主典二人、縣社以下四百七人なり。

二、寺院佛堂及住職　大正十四年末に於ける寺院數は千九十三に及び空海は隣縣香川の生れにて眞言宗の弘通上特殊の因緣ありしものゝ如く斯宗最も盛にして臨濟宗之に亞く。

	天臺	眞言	淨土	臨濟	曹洞	黃蘗	眞宗	日連	時宗	計
寺院	九三	三五四	七四	二五〇	一七九	一四	九五	三	二	一、〇九三
住職	六八	二六八	六一	一九二	一五四	一〇	八三	二七	一	八六四

境外佛堂は地藏堂四十四觀音堂十八其他六十あり

三、教會講義所說教所　神道に屬するもの二百九十一、內天理教過半を占め金光教、黑住教之に亞く、佛道に屬するもの三十五、神佛道以外に基督教に屬するもの二十五あり。

第三章　教育

第一節　初等教育

一、學齡兒童　學齡兒童數の增加割合は殆と人口增加に正比例し就學歩合は遂年向上して大正十四年度末に於ては九・六を示し五年前に比し〇・二六增加せり、而かも此の性別は男九・六七女九・六六にして略々均等なり。縣には　皇室の御下賜金を基礎とせる兒童就學奬勵基金ありて市町村に於ける貧民子弟の就學奬勵費に對し補助を爲す卽ち大正十三年度市町村實支出額一万四千三百七圓に對し一万三百三十二圓を交付せり、就學歩合等左の如し。

	學齡兒童數	同上の內 就學	同上の內 不就學	就學歩合	全國の就學歩合
大正十四年度末	二〇八、八四七	一八一、五七七	六二三	九九・六六	?
同　十三年度末	二〇五、四〇三	一七九、六〇〇	七二一	九九・六〇	?
同　十二年度末	二〇六、二八五	一七九、一八八	八三四	九九・五四	九九・二三
同　十一年度末	二〇四、二三六	一七七、〇五〇	八六六	九九・五一	九九・三〇
同　十年度末	二〇二、一六〇	一七五、二四七	一、〇三六	九九・三八	九九・一七

隣縣との就學歩合比較

德島縣	九九・一六	香川縣	九九・二八	高知縣（大正十二年度）	九九・四六
本縣	九九・五四				

二、小學校　大正十四年度末に於ける市町村數二百七十九に對し小學校數四百七十六にして道路開鑿等交通の便に伴ひ校數を減し設備の擴充を期する趨嚮にあり殊に尋常校は漸次高等科を併置して五年前との校數比較左の如し。

	尋常小學校 公立	尋常小學校 私立	尋常高等小學校 私立	高等小學校 公立	計
大正十四年度末	一四七	一	三三五	二	四七五
同　十年度末	二〇〇	一	二九〇	三	四九四

イ、兒童及學級＝大正十五年三月一日現在の兒童數及學級數は左の如くにして總教員一人に付兒童は四〇・九人に當る。

	兒童數 男	兒童數 女	兒童數 計	學級數	一學級平均兒童數
尋常科	七七、九二六	七五、八八九	一五三、八一七	三、三七二	四五・六二
高等科	一四、三八六	八、二七三	三、六五九（大正十一年度末）	五九二	三八・二八

總教員一人に對する兒童數

全國	四六・二	德島縣	四五・五	香川縣	四三・五
高知縣	四一・〇	本縣	四四・三		

兒童出席歩合は大正十四年度に於て九五・六を示し向上の域に在りと雖連年全國平均に劣

る、兒童缺席を季節別に觀るときは繁農季最も多し、五ヶ年間出席歩合左の如し。

	大正十四年度	大正十三年度	大正十二年度	大正十一年度	大正十年度
尋常科	九五・五〇	九四・七一	九四・八六	九四・一三	九三・一二
高等科	九六・八〇	九六・五三	九六・二六	九六・四〇	九五・七三
平均	九五・六六	九四・九四	九五・〇四	九四・四一	九三・四一
全國平均	?	?	九五・四〇	九五・三二	九四・九五

隣縣との兒童出席歩合比較（大正十一年度）（統計年鑑に依る）

	德島縣	香川縣	高知縣	本縣
尋常科	九二・一〇	九六・三六	九五・二七	九四・一三
高等科	九六・八八	九六・〇二	九四・九八	九六・四〇
平均	九二・二四	九六・三二	九五・二四	九四・四一

ロ、教員＝大正十五年三月末日現在の教員數は本科正教員三千二百九十二人專科正教員二百七十三人准教員百六十三人代用教員五百九十一人にして學級百に對し本科正教員は八二・六人に當る、又五年間の趨勢を示せは左の如し。

學級百に對し本科正教員數（各年三月末調）

大正十五年	八二・六	同十四年	七八・二	同十三年	七七・八	同十二年	七七・二	同十一年	七四・一

教員平均月俸は大正十四年七月一日現在五十五圓八十五錢にして全國平均に比し正教員に於て稍々低額なれとも補助教員を通すれば五錢高し即ち左の如し。

本縣市町村立小學校教員俸給月額平均（特年七月一日現在）

	本科正教員	專科正教員	准教員	代用教員	總平均
大正十四年	六一・七三	四三・八三	四三・七七	三七・六五	五五・八五
同十三年	六二・一九	四三・〇三	四二・七三	三七・一二	五五・七三
同十二年	六二・二三	四一・一二	四二・七八	三五・六〇	五五・二八
同十一年	六一・八一	四〇・七六	四二・〇二	三四・九五	五四・四八
同十年	六〇・八七	四〇・〇四	四〇・九九	三四・三六	五三・六六

隣縣及全國との教員給比較（大正十四年七月一日現在）

	本科正教員	專科正教員	准教員	代用教員	總平均
德島縣	五七・六九	四一・一一	三九・九一	三二・六九	五二・四〇
香川縣	五三・七二	三八・三〇	三四・九五	三三・一二	四八・八七
高知縣	五三・九六	四〇・一七	三八・一一	二九・九〇	五〇・〇五
本縣	六一・七三	四三・八四	三七・七七	三七・六五	五五・八五
全國	六二・三六	四四・四六	三七・九二	三四・九七	五五・八〇

本表は文部省普通學務局調査に依る

第二節　中等教育

一、中學校　大正十五年三月一日現在校數は縣立六、町立一、私立一にして生徒定員五千六百五十人に對し生徒五千四十二人あり、大正十四年度第一學年入學者は一千百七十四人にして入學志願者百に對し四十八人二分九厘に當れり。

縣立

	松山	宇和島	西條	今治	大洲	三島	吉田	北豫	計
學級數	三	一五	一五	一九	一〇	六	五	一九	一一
生徒數	一、〇五六	六八四	六七六	八二五	三九七	二九二	二三〇	八九二	三、〇四二
教員數	三四	二五	二三	二六	一六	一二	一〇	二三	一八五
經費（大正十四年度決算）	七三、五四二円	四八、五八五円	四九、七八三円	八九、〇七八円	三八、五九〇円	三二、〇六七円	二一〇、一五〇円	六七、五八〇円	五〇八、三七五円

右の外に市町村學校組合立越智中學校あり大正十五年四月開校す

二、高等女學校　大正十五年三月一日現在校數は高等女學校縣立十、私立三、實科高等女學校町立一、私立二にして生徒六千百五十九人あり、大正十四年度第一學年入學者は千九百七十六人にして入學志願者百に對し六十七人に當れり。

高等女學校

縣立

	松山城北	今治周桑	西條	宇摩	大洲	八幡濱	東宇和	宇和島	計
學級	二〇	九	一六	八	八	八	四	一〇	九九
生徒	九四七	四四二	八〇八	三七七	三九六	三九五	三六〇	三七四	一九七	五〇〇	四、七九六
教員	二八	一七	二四	一四	一三	一四	一三	一三	九	一七	一六二
經費（大正十四年度決算）	五五、七〇五円	三三、七九九円	四二、六九九円	二五、八三一円	二四、九一五円	二四、九〇九円	二四、三九一円	二五、三七八円	一八、三八一円	三一、一五六円	三〇六、一四四円

私立

	濟美	山下	第二山下	計
學級	一三	四	四	二〇	*一
生徒	五八四	一九八	一六二	九四四	*一六
教員	一七	*一六	一〇	八	三五
經費（大正十四年度決算）	二八、七八二円	二一、五六〇円	一四、六六八円	六五、〇一〇円

表中*印は實科を示す

實科高等女學校

	町立	私立	計
學級	新居濱 四	今治崇德 六	一〇 補一

生徒	一毛	補一九	三八	三四	四九	補一九							
教員	六		九	五	二〇								
經費（大正十四年度決算）	二、〇四六円		一五、三九四円	二七、六三一円	四三、〇四一円								

表中　補は補習科を示す

三、農業學校　大正十五年三月一日現在校數七何れも縣立にして生徒千百七十九人あり、大正十四年度第一學年入學者は五百二十八人にして入學志願者百に付三・四の入學率を示し之を中學校に比し二五・一五商業學校に比し一六高し。

	甲種程度				乙種程度					計	
學級	松山	宇和	西條	計	宇摩	新居	南宇和	伊豫（甲乙兩種アリ）			
生徒	五	三	三		三	三	六	四	別一	二七	別一
	二〇八	一四五	一五八		一三四	一五四	一九〇	一四六	別四四	一、三三五	別四四
教員	三	六	八		八	七	八	八		五七	
經費（大正十四年度決算）	四〇、九七九円	二七、八三円	二八、五六三円		一八、九〇九円	一八、〇五五円	三三、一〇八円	一九、四六二		一七六、八九九円	

表中　別は別科を示す

四、商業學校　大正十五年三月一日現在校數は縣立二、市立一あり何れも甲種程度にして生徒千六百七十六人あり、大正十四年度第一學年入學者四百九人にして入學志願者百人に付五十七人四分四厘の割合なり。

	縣立			市立		計
學級	松山	八幡濱		宇和島		
生徒	三	一〇		五		三七
	一、〇三四	四五三		一八九		一、六七六
教員	三	一七		一		六一
經費（大正十四年度決算）	六六、六四七円	三七、八九四円		四八、九六九円（內臨時費一三、九六六円）		一三三、三三〇円

五、商船學校　縣立弓削商船學校には學級本科三練習科一ありて生徒は本科九十人練習科八十四人なり、大正十四年度本科第一學年入學者は三十五人にして志願者百人に付七十四人四分七厘の割合なり。

六、工業學校　二校ありて大正十四年度中の狀況左の如し。

	十四年三月一日現在			第一學年入學者	入學志願者百人に付入學者
	學級	生徒	教員		
市立松山工業學校（甲）	三	一五六	一四	六九	三八・三
村立砥部工業學校（乙）	二	一四	四	一〇	一〇〇・〇

七、實業補習學校　實業補習學校の大部は小學校に併設し男子部は殆んど夜間教授なるも

女子部は專任教員の設置多く概して晝間教授なり、學校費大正十四年度支出額は四万七百五十圓に達す、實業科目別校數等左の如し。

學校數	農業	商業	工業	水産	其他	計
生徒數 男	二九一	四	一	一三	四四	三三三
生徒數 女	一〇、七五	一三九	四六	一、九四四	一三、三六八	
專任教員	三、三六三	三	一	七三	六七〇	四、一三八
	八〇	一		二	一三	一〇六

八、師範學校　男生徒のみの學校一女生徒のみの學校一あり、入學志願者頓に增加して大正十四年度に於ては本科一部第一學年入學志願者百人に付入學者男二十六人二分六厘女二十九人六分三厘を示し他の中等學校の夫れに比し格段の差あり、大正十五年三月一日現在の狀況左の如し。

	師範學校			女子師範學校		
	學級數	生徒數 定員	生徒數 現員	學級數	生徒數 定員	生徒數 現員
第一部	一三	六〇〇	四九六	五	二〇〇	一九八
第二部	二	八〇	七六	二	八〇	七六

右の外乙種講習科に男百三十人、女四十人、裁縫講習科に二十三人の生徒あり

第三節　高等教育

一、高等學校　松山高等學校は大正八年四月の開校にして大正十五年三月一日現在の教員數は三十一人、生徒數は四百九十五人にして仝年度に於て卒業者百六十五人あり。

二、實業專門學校　松山高等商業學校は大正十二年四月の創立に係り大正十五年三月一日現在の教員は十九人生徒は百八十五人なり、十四年度第一學年入學者は八十三人にして志願者百人に對し四十七人一分六厘に相當す、仝年度初めて卒業者四十三人を出し經費支出額は三万五千三百二十圓に達す。

第四節　其の他の教育

一、幼稚園　大正十五年三月一日現在の園數は公立三、私立九ありて幼兒男四百四十六人女四百二十人を收容せり。

二、盲啞學校　愛媛縣教育會に於て明治四十年愛媛盲啞學校を設立し漸次設備整ひ其の成績見るべきものあり、大正十五年三月一日現在盲生三十二人聾啞生四十二人を收容せり。

三、各種學校　各種學校の多くは家事、裁縫を主とし地方的子女教育を爲すものにして、大正十五年三月一日現在校數十七生徒千八百三十人あり。

第四章　衛生

一、醫師及齒科醫師　大正十四年末現在醫師は七百人にして醫師一人に對する人口は千五百五十九人の割合なり、人口對醫師の割合を全國及隣縣に比較するに大正十二年末に於て全國平均人口一万に付醫師七人三分六厘、德島縣六人五分、香川縣五人九分四厘、高知縣七人三分五厘、本縣六人四分四厘（內務省調査）にして全國平均に比し醫師の數稍少なし其の分布狀況を觀るに都市に集中して農村極めて薄く開業醫なき村落さへあり、而かも交通機關の發達に伴ひ收容又は往診によりて僻地に於ける缺陷を緩和し得ると雖も是等可能性を缺く地あり、齒科醫師は近時著しく增加して大正十四年末百六十九人あり。

醫師

	大學、專門學校卒業		試驗及第		俸職履歷		從來開業		限地開業		計		醫師一人に對する人口
大正十四年末	四三	女三	二一〇	女六	一		五六		二		六九一	女九	一、五五九
同　十三年末	三八七	女三	二二五	女六	三		六三		二		六七〇	女九	一、五八八

同　十二年末	三八八	女三	二三九	女三	三	五一	三	六八四	女五	一、五五四					

齒科醫師

	指定學校卒業		試驗及第		計	
大正十四年末	五五		一一	女三	一六六	女三
同　十三年末	四四		一〇〇	女一	一四四	女一
同　十二年末	四七		一〇一		一四九	

二、產婆及看護婦　大正十四年末現在產婆四百五十三人看護婦五百八十一人にして產婆の地方分布狀況は醫師に比して薄く保健上憾みなきを得す、登錄又は免許資格別による產婆數左の如し。

	指定學校又は講習所卒業	試驗及第	計	從來開業	限地免許	計
大正十四年末	一	四〇一	四〇二	一六	二五	四三
同　十三年末	八	三九九	三九七	一九	三一	四七
同　十二年末	九	三七	三九九	三三	三〇	三九九

三、傳染病　本縣は概して衛生思想乏しく、上水下水の設備整はず地勢の關係上河水を飲用する地方あり又溫帶地方に屬し氣候溫暖にして且つ雨量多きため年々消化器傳染病の流

行を見る、大正十四年の傳染病者は千百三十人にして人口一万當十人に達し外に疑似症二百八十九人を發生す、患者の中（疑似症を除く）死亡者は二百八十六人に及べり、而して仝年末現在傳染病院一、隔離病舍四百八十一あり、累年患者數左の如し。

	虎列刺	赤痢	腸窒扶斯	パラチブス	猩紅熱	痘瘡	實布垤利亞	流行性腦・脊髓膜炎	計
大正十四年	四八	一八六＊六七	六五〇＊二七	三	一四	一	三七	二＊五	一、四一九
同 十三年	—	一七五＊七三	五四一＊一九五	一七	三	一	二八	七 嗜三六三	一、三三九 嗜三六三
同 十二年	—	三三七＊八一	四二六＊一七三	一七	一〇	二九	一六三	三	一、三三九
同 十一年	—	二〇三＊一三三	四四八＊二六三	二九	五	二四	一五二	一四	一、二七〇
同 十年	—	二六＊一八〇	五一九＊二七九	二〇	一〇	五	一六九	一三	一、四二一

＊印は疑似症　嗜印は嗜眠性腦膜炎を示す

四、肺結核　統計局發表死因統計に徴するに大正十四年に於ける本縣現在人の肺結核死亡者は男七百十九人、女九百十七人、計千六百三十六人にして死亡者千人に付七十七人に及び全國平均六十七人に比し高率を示せり、又之を隣縣に比較するに徳島は七十八人、香川は六十三人、高知は五十四人にして徳島に亞くの高位に在り。

五、牛乳及山羊乳　牛乳は之を調理又は飲料として用ふるもの極めて少く、大部分は病者又は哺乳用として使用するに過ぎざるを以て搾乳量亦僅少なり、大正十四年に於ける搾取量等左の如し。

	搾取場	頭數	搾取高	販賣高
牛乳	六六	三九九	二、一五三石	二、一〇六石
山羊乳	三五	三〇四	一六三	一四二

第五章　産業

本縣の産業は歐洲戰亂時に於ける我が財界の好況に伴ひ頓に振興し量に於て價額に於て前古比なく大正八年の生産物價額は三億一千二百万圓に達せしも翌九年より下垂し大正十年に入り二億一千三百万圓となり再び增加の趨勢を呈するに至れり、由來當地方は地の利を得ざるに胚胎するか大企業の勃興なく財界の不況に蒞みても比較的影響を蒙ること尠く却て生産量の增加せるものありて大正十四年の生産物價額は二億八千七百万圓を算するに至れり。

生産物價額

	總數	農産	林産	畜産	水産	鑛産	工産	人口	一人當
	円		円	円	円	円	円		円
大正十四年	二八六、七六五、二三七	一〇四、七三二、五九八	六、一二〇、一七一	三、〇三一、八二一	一三、〇三一、六七九	一三、四〇六、五一三	一四七、四三三、四四六	二六二	円
同 十三年	二六〇、七九〇、一一六	九三、七三四、六七三	七、〇八五、三九七	二、八八四、九四二	一〇、九九九、四〇〇	一二、三〇五、七〇〇	一三三、八二〇、〇〇四	二四一	
同 十二年	二四四、八一九、一九七	八三、一四九、一一三	八、三七八、二九五	二、八〇九、五一七	一一、六四五、九一二	一三、五四八、九二七	一二五、二八七、四三三	二三八	
同 十一年	二三四、三一三、五六二	八〇、八一九、一二七	六、三〇九、九八六	二、九九八、九三三	一二、五二九、一三三	一〇、三二一、一三一	一二一、三四五、一六一	二〇五	
同 十年	二一三、一二七、〇七二	七五、八五一、五七八	七、四三八、八五一	二、四八九、六〇三	一二、五八二、六三三	一〇、九五八、〇五四	一〇三、八〇六、三四三	一八九	
同 九年	二六一、九七四、八九一	一〇一、四四五、四七〇	六、七九三、三八三	二、六二五、五三〇	一五、四五八、八一五	一〇、四一六、六三〇	一二五、一三五、〇六二	二三四	
同 八年	三一三、一五四、二七四	一一七、二九五、一三三	一〇、四〇一、六八八	二、五〇〇、二四三	一一、二八七、九七五	一二、七九九、一九八	一五七、八七〇、〇三七	二七四	
同 七年	二〇〇、四〇九、五七四	七六、九四九、〇三八	五、四九一、五三九	一、七二四、四七〇	八、三六八、九七三	一三、八九八、五一八	九三、九七七、〇四六	一七八	
同 六年	一五四、三一〇、四八六	五四、六二〇、八一三	四、三〇八、三五四	一、三〇〇、九九九	六、二四五、九六七	一七、七五七、四二六	七〇、〇七六、九六七	一三七	
同 五年	一一、〇三〇、二五五	三七、七三〇、六六一	一、四三九、三四二	九四〇、九一〇	五、三七一、五八三	一七、一一六、〇〇三	四八、四三一、七九六	九八	

隣縣との生産物價額比較

（大正十三年）

	總數	農産	林産	畜産	總數	農産	林産	畜産
	德島縣				香川縣			
	円				円			
	一一三、一三一、二一一	三九、七五九、二六九	四、六四四、三五五	二、七三九、八三三	一三〇、三六六、〇三六	五四、六一三、七一七	三六、八八四、三四三	一、四二三、五一三
	高知縣				本縣			
	円				円			
	九九、七三二、七九九	三六、八八四、三四三	一二、九九六、一八一	二、〇四五、五四八	二六〇、七八〇、一一六	九三、七三四、六七三	七、〇八五、三九七	二、八八四、九四二

年産額百万圓以上の物産（大正十四年）

産額		産額		産額	
円		円		円	
三六、六三三、六三〇	米	九七六、四六七	染物	四、八五九、三二〇	米
一〇、九五三、〇五四	麥	九、四三四、一三六	瓦	一、六四二、一八七	麥
三、四九四、五八八	甘藷	一、八六四、五四七	和紙	五、一九四、三七六	甘藷
一、〇八五、四九〇	蘿蔔	二、一四三、七〇七	肥料	四、一三三、三四七	蘿蔔
一、三〇一、〇七三	青芋	一〇、〇三三、五三一	清酒	二、三三三、一〇一	青芋
二、〇三六、六四九	柑橘	三六、一二八、一七六	絲	一、四一五、七三八	柑橘
一、一六七、八四一	（再揚）柑	一六、八八〇、〇〇八	綿織物	二、九九七、七六四	柑
三、九二一、一七五	桑葉	五〇、六八八、二三三	醬油	二、九一三、四八四	桑葉
二四、二〇七、六五九	繭	八、〇二三、八三一	廣巾（再揚）綾地生綿布	二、二五九、六七四	繭
一、九三七、七四九	種	四、八三〇、〇九三	其他生綿布	木製品	種
二、七五四、一六〇	蠶用材	一二、六五九、八一三	フランネル	二、〇九八、六一七	蠶用材
一、三四六、八三四	薪炭材	七、六九三、七一三	綿及色無地	布帛製品	薪炭材
一、三二九、二四六	木炭	一、一〇八、三七五	小巾（再揚）生綿布	一、〇四一、三六三	木炭
四、二八八、三〇一	魚類	七、五四九、八三二	絣綿布	肉	魚類
		三、四九三、八九九	タオル		

水産	一三、三八六、一六〇	一六、二三一、五七三	一〇、九五九、四〇〇		
鑛産	九、四三四、一三六	一、一〇五、五〇〇	一二、四〇五、七〇〇		
工産	五二九、三九〇	三九〇、七〇	一三三、八二〇、〇〇四		
	五六、〇〇四、三二八	三一、一七四、五八四			

農業は縣下普く行はれ主要産業にして大正十四年の總産額一億四百七十三万圓に達す、古來農業と云へば直に米麥作を意味したる程單調なりしが近年養蠶、果樹の栽培等旺に行はれて内容漸く多岐に入れり。

一、農家戸數　農家戸數は逐年減少の傾向を示し大正十四年末專業戸數八万一千八百六十にして之を十年前に比すれば五千二百九十を減せり、然して兼業戸數を合したる農家の戸數は現在戸數の六割八厘を占む、内自作三割六分、小作二割七分、自作兼小作三割七分に當る。

二、主要物産

(イ)　米＝米は綿織物に亞く重要物産にして松山附近及今治附近の平野に多く産す、大正十四年の收穫高九十七万九千六百四十六石にして其の直前五ヶ年平均九十九万九千三百六十石に比し稍少し、一反歩收穫高は二石一斗二合にして全國第十二位に在り。（各府縣との比較は第二次農林省統計表に依る以下産業に關するもの皆同し）　大正四年より米穀檢査を實施して阪神地方の市場に於ける伊豫米の聲價漸く高し。

大正十四年

	作付反別	收穫高	價額
水稻	四六、三一町	九七七、三一石	三六、五七八、二七九円
陸稻	二六六	二、三三五	八五、三五一
計	四六、五九七	九七九、六四六	三六、六三〇、六三〇
一反歩收穫高		二・一〇三	

累年收穫高

	大正十三年	同十二年	同十一年	同十年	自大正五年至同九年五ヶ年平均	自明治四十四年至大正四年五ヶ年平均
水稻	九四一、四二一石	九五八、八三一石	一、〇三五、八〇五石	九六一、四〇二石	一、〇三一、九三石	九六二、三六二石
陸稻	八五、三五一	一、六六八	二、六三九	三、四一九	五、一八八	五、二二一
計	九四〇、五五一	九五〇、五三一	一、〇三八、四四四	九六四、八二二	一、〇三八、一八一	九六七、五八三
一反歩收穫高	二・〇〇三	二・〇〇三九	二・一九五	二・〇〇〇	二・一七九	二・〇〇八

隣縣との米收穫高比較　（大正十四年）

	德島縣	香川縣	高知縣	本縣
收穫高	五六七、二五三石	八九九、五四八石	六九六、六〇六石	九七九、六四六石
一反歩平均	一・九三	二・三九	一・八一四	二・一〇三

(ロ)　麥＝麥も亦重要物産に屬し大正十四年の作付反別四万六百五十二町歩、收穫高六十二万七千四十五石（前五ヶ年平均五十万七百九十三石）にして裸麥は八割九分を占む、裸麥一反歩收穫高は田一石七斗二升二合、畑一石三斗三升に當る。

大正十四年

	作付反別	收穫高	價額
大麥	六六四町	九、四六九石	一二、四二五石

累年收穫高

	大正十三年	同十二年	同十一年	同十年	自大正五年至同九年五ヶ年平均	自明治四十四年至大正四年五ヶ年平均
大麥	八、五二八石	七、九三二石	一〇、〇五四石	九、四五一石	一五、〇九八石	一三、五四一

小麦	四、四七四	五九、〇九四	一、一〇三、八三六	四八、〇五〇	四五、五八三	四九、九一七	四六、二八三	六九、一二三	四〇、六一七		
裸麦	三三、五二三	五六八、四七三	九、七三五、六九五	四一九、七七五	三九三、三七八	四六〇、九九一	四三九、三八一	五三九、七四七	四三〇、七四八		
燕麦	一	九	一〇八	—	—	—	—	—	—		
計	四〇、六三二	六二七、〇四五	一〇、九三三、〇五四	四七六、二三三	四四六、八九三	五二〇、九六二	四九五、一一五	六二三、九六八	四八四、九〇六		
一反歩收穫高	一・五四二石				一・〇七〇石	一・二〇〇石	一・〇七六石	一・三二〇石	一・二〇三石		

隣縣との麥收穫高比較

（大正十四年）

德島縣	香川縣	高知縣	本縣								
五三三、九三二石	七八六、九九三石	二六、七四七石	六二七、〇三六石								

（八）雜穀菽及薯類＝雜穀菽薯類は共に食糧土地利用の上より重要なる關係を有す、甘藷は一部縣民の食料に供せらるゝの外芋燒酎、澱粉を製造し又阪神地方に移出するもの少からず全國多產の班に列し大正十四年の產額は第八位にあり主なるもの左の如し。

	大正十四年				同十三年		同十二年	
	作付反別	收穫高	價額					
大豆	三、四四八町	三〇、六五五石	五七七、六七六円		二八、六九二石	五六、三七五貫	二七、三六七石	四八、九一〇
小豆	一、四四四	八、一一〇	二一七、三七五		七、七二三	四六四、六五〇	三〇、九三七、一三七貫	九九二、九二一
粟	八九七	九、一一〇	二〇八、七〇九		八、六六六	九、四八六		
玉蜀黍	五二、八〇一	八一三、三三五	五二、四六三		三二、五四七	四八、九一〇		
甘藷	一、九四七	三九一、一〇八	三、四九四、五八八		二〇、八六八	三一、七八五、〇九二貫		
馬鈴薯	四八〇	一、〇一九、〇二六	一九四、九九一		一、一八六、五一九	九九二、九二一		

（二）蔬菜＝主なる蔬菜は次の如し。

	大正十四年			同十三年	同十二年
	作付反別	收穫高	價額		
筍	八一八町	六三七、二二九貫	二〇六、九六二円	六一七、四二八貫	五六九、三七五貫
胡瓜	一七〇	六〇九、八四二	一二七、五六二	五四一、二七五	四六四、六五〇
南瓜	二四一	九五三、八五九	一七三、八六〇	八二四、六六〇	七六二、七三三
西瓜	二三一	一、一〇三、八二八	二六二、三三〇	一、一三〇、九三五	七二四、六六二
茄子	三一六	一、三三三、四三四	二三二、七三五	一、一八八、二三三	一、〇八〇、〇三九
大根	一、八五二	（生）二、七四七、六四〇（切干）九九三、四三四	一、〇八五、四九〇	二、七四六、〇七四	二、四三八、五五九
牛蒡	三一九	九九三、八一〇	三五四、三五六	九二四、二六九	九九七、四七一
芋	一、一七〇	五、六一七、九三六	一、一〇一、〇七三	五、〇五二、七〇一	五、〇三二、八〇九
韮	八三	三八一、六八九	一六〇、五六九	三三七、七七三	一六一、七〇七
葱頭	三三八	一、三一〇、五七八	二一二、六三一	一、二二二、七八五	一、五一六、〇三〇
蓮根	五三	二九五、六八七	一〇六、六一七	二八七、七八二	二九七、八八二
蕪菁	三一八	一、〇八八、二三〇	一三三、〇四四	一、〇四九、六五七	一、一五、三三七

（ホ）果實＝果樹の栽培は近時旺に行はれ數年前に比し梨の如きは價額暴落したりと雖も大正十四年に於ける生産總價額三百三十三万圓に達し全國に於ける地位は靜岡、和歌山、青森神奈川の四縣に亞き殊に日本梨は第二位に在り、梨は松山附近、柑橘は宇和島附近を主産地とす。

	大正十四年		大正十三年		大正十二年	
	收穫高	價額	收穫高	價額	收穫高	價額
梨	二、七九四、四三四貫	六九七、二五三円	二、二七一、九四七貫	七四六、〇五一円	二、五九一、三三五貫	九五一、四二一円
蜜柑	三、三六四、〇九七	一、一六七、八四一	二、七六七、四五四	九九五、六七三	二、八四六、二四三	九五〇、六七〇
夏橙	三、一四一、九二五	六五〇、〇六〇	二、六〇二、一四五	五〇九、七三一	一、五九二、三二三	三六三、五二三
其の他	—	八二三、一七〇	—	八八三、五五三	—	七〇七、八九九

（ヘ）特用作物＝工藝用農産物中主要なるもの左の如くにして何れも全國に於て有數の地位を占む。

	大正十四年		同十三年		同十二年	
	作付反別	收穫高	價額	收穫高	價額	
除蟲菊	八〇三町	一八一、四三七貫	五〇七、一七三円	一二三、五九〇貫	六四、九七八貫	
櫨		一、三七七	一、一〇五、七八一	三三四、四七五	九七一、二四七	九八五、三三六
楮		九三六	二二五、二三二	一六九、九三三	二四四三、二九	二七九、四六二
三椏		三、一三五	七八九、一一八	五三五、四〇四	八三六、三二二	九六四、三九一
葉煙草		四〇五	三三九、四〇六	七六九、一二五	二三〇、四五四	一八八、九二六

（ト）繭＝繭は本縣に於て綿織物米に亞く重要物産にして農産物中二割三分を占め南豫地方に飼育最旺なり、大正十四年の産額二百四十五万貫、價額二千四百二十一万圓に達し繭質優良なり、産額の全國に於ける地位は第十二位を占め關西第一位に在り、累年の趨勢次の如し。

大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	自大正五年至同九年平均五ケ年平均	自明治四十四年至大正四年五ケ年平均
桑園反別	一〇、一七四町	九、二六九町	八、八八四町	八、六七三町	八、六九五町	五、六三四町
桑收穫高	三三、五七二、五七九貫	二九、五三五、四六四貫	二六、七四四、五二七貫	二五、九一一、五四八貫	二五、三三、一四六貫	二〇、五五四、〇二貫
蠶戸數	四六、二二六戸	四三、一〇二戸	四一、九九八戸	三八、五六九戸	三八、九三五戸	三五、五六八戸
掃立枚數	四六九、〇二一枚	四三、五二四枚	三八三、七七八枚	三七六、九六二枚	一〇三、七三九枚	九六、一二八枚
收蘇 春蠶	一、一〇八、九六二貫	九三四、四五九貫	八九三、八六三貫	八五二、八七三貫	七五、七四一貫	六六、六三三貫
蘇 夏蠶	一、三四一、二七五	一、〇六六、二二七	八九七、一九一	七五七、四二四	七八、四一五	六七、六七八
量 計	二、四五〇、二三七	二、〇〇〇、六九六	一、七六一、〇五四	一、六一〇、二九六	一五四、一五六	一三四、三二一

一戸當掃立枚數	一〇・一五枚		九・八〇枚		九・一四枚		六・七七枚		二・六六枚		二・七〇枚		一・一七枚
一戸當收繭量	五三・〇一七貫		四六・三一〇貫		四一・九三一貫		四一・七五一貫		三・九五九石		三・七七六石		一・四〇四石
桑園一反歩當收繭量	二四・〇八三		二一・五八五		一九・八二一		一八・五六七		一・七七三		一・七七〇		一・三九〇

隣縣との繭產額比較

德島縣	一、四七七、六二八貫	香川縣	一、九六六、六八一貫	高知縣（大正十四年）	一、三〇三、四〇三貫	本縣	二、四五〇、二三七貫										

（チ）家畜及家禽＝家畜及家禽の主なるものを牛、馬、豚、鷄、鶩とし牛馬は遂年減少の傾向を辿れとも緬羊、山羊の飼養擡頭せんとし大正十四年末緬羊百三十八頭、山羊五百七十一頭なり。牛は概して早熟、早肥の性を有し柔順なれば農耕、運搬等の力役に適し又肉質優良なるを以て伊豫牛の名高く東京、阪神地方に多數移出して食用に歡迎せらる、馬は荷馬車輓曳用多く、鷄は概ね副業として飼育せられ一ヶ年產卵數二千五百六十五万個、價額九十八万七千圓に達す。

	牛	馬	豚	鷄	鶩
大正十四年末	四八、八二五頭	七、七二四頭	二、一九八頭	五〇三、四九五羽	六、〇八六羽
同　十三年末	四九、一五三	七、七五五	二、三九三	四七二、九〇〇	六、一六二
同　十二年末	五〇、四四八	八、二二	二、二三〇	四三四、三九六	五、九八九

屠畜は大正十四年に於て牛七千五十頭、馬百八十五頭、豚四百七十九頭其の肉量二十五万四千百貫、價額百四万一千三百六十圓にして人口一人當二百三十二匁に當る。

第二節　林業

本縣の林野總面積は二十九万二千八百十四町歩にして立木地は八割八歩なり、近年交通運輸の便開くるに從ひ國有林を除くの外は濫伐を加へられ其の立木蓄積は著しく減少したるも林業思想の普及と共に漸次恢復に向へり。

一、面積及林相　林野面積の内國有四万一千四百十一町歩、公有五万一千八百五十町歩、社寺有三千百八十七町歩、私有十九万六千三百六十六町歩（大正十三年末）にして森林地帶は温、暖、寒の三帶に跨り樹種多樣なり、民有林中松、杉、扁柏、樅等の針葉樹林は四割五分、栗、樟、櫟等の濶葉樹林は二割二分、其の混淆は三割二分、竹林は一分に當る。

二、林業戸數　大正十四年末の林業戸數三千六百九十二、内專業二割三分、兼業七割七分の比なり。

三、開墾及造林　大正十四年の民有林野開墾は百十四町歩にして其の中田となれるもの十

四町歩、畑となれるもの六十四町歩、宅地となれるもの十二町歩あり。

民有野林に於ける人工造林は旺に行はれ新植の趨勢次の如し。

	針葉樹 面積	針葉樹 數量	濶葉樹 面積	濶葉樹 數量	竹林 面積	竹林 數量
	一、七二八町	六、〇三二、五九八本	一三七	四三四、四五〇本	五二	七四、二四八本
大正十四年	一、八三八	六、五三九、三四五	九九	三五八、七四五	六〇	六二、八六六
同 十三年	二、一〇三	七、〇一九、八〇六	一〇一	三四七、二八〇	四八	六五、五二七
同 十二年						

四、林野産物

大正十四年林産物價額は六百十二万圓を算し主要なるもの左の如し。

		大正十四年 數量	大正十四年 價額	同十三年	同十二年
用材	材	二、三六七、四四八石	二、七五四、一六〇円	一、〇八六、六二五石	一、三三九、六一六石
薪炭材	材	四六六、五二四棚	一、三四六、八三四	三九五、七六六棚	三三七、〇七一棚
竹材	材	九七、七三〇束	一四三、一八三	一三五、四一七束	一〇四、九七九束
木炭	炭	五、七五三、八六八貫	一、三三九、二四六	五、八八二、三八七貫	五、四一一、一三八貫

五、移出

大正十四年の移出總額三百二十三万五千圓にして用材二百四万七千圓最多を占め、木炭、板材之に亞き移出先は阪神地方を主とし廣島地方之に亞く。

		大正十四年 數量	大正十四年 價額	同十三年	同十二年
用材	材	三三〇、三二五尺〆	二、〇四七、三二円	二〇三、九四一尺〆	二四九、八五五尺〆
板材	材	一三九、八八七坪	三三七、〇〇四	一〇九、一四七坪	二〇三、〇五四坪
薪材	材	一四四、五八四棚	一九九、八四二	一三、〇六五棚	二一、六八四棚
木炭	炭	二、二一一、五七二貫	六五一、〇七〇	一、八四〇、二四五貫	二、一七二、三六五貫

第三節　水産業

三面海に瀕し沿岸屈曲に富み、延長三百十里に亙れる海岸線は全國第五位を占む、三崎半島は外海と瀬戸内海とを劃し、魚族の分布、漁業の狀態異り隨つて漁業の種類も亦多種多樣なりと雖も其の重要なるものは鰮、鰹、鯵、鯛漁業とす、概して外海は魚族豊富なるに比し内海漁業は漸次集約に向ひつゝあり、然れども東部一帶の淺海は魚介、藻類の養殖適地として將來發展の要素あり。

一、水産業者　大正十四年末現在從業者は業主一万七千七百人、被用者二万五千七百人にして漁撈は業主に於て八割一分、被用者に於て八割に當る。

	大正十四年末		同 十三年末		同 十二年末		同 十一年末	
	業主	被用者	業主	被用者	業主	被用者	業主	被用者
本業	七、七四二	二、四六一	七、六〇三	二、七九七	八、三七七	二、六〇四	八、〇三〇	二、三九九
副業	一〇、〇〇〇	一四、二九八	九、三三一	一三、九九一	九、〇五三	一三、七五八	九、四五二	一三、七九三
計	一七、七四二	三五、七五九	一六、八三四	三五、三六八	一七、四二〇	三五、三六二	一七、四八二	三五、一六一

二、漁船　大正十四年末現在隻數動力を有するもの百九十三、動力を有せざるもの一万六千五百七十あり、動力を有するものは五年前は僅かに七十五にして著しき増加なり、船數を全國に比較せば北海道、長崎の次に位す。

三、漁獲物　大正十四年中漁獲物價額は四百八十三万圓に達し全國第十九位にあり、之を漁船に配すれば一隻に付僅々二百八十八圓を出てず、漁獲物價額中魚類は八割九分を占む内地沿岸漁獲物累年の主なるもの次の如くにして逐年減少の趨向を呈せり

	大正十四年			同十三年		同十二年		自大正七年至同十一年五ヶ年平均
	數量	價額		數量	價額	數量	價額	數量
鰯	三、〇四六、一八貫	一、二四七、四五一円		一、七九五、七二六貫	二、四九六、〇一九貫	一、〇七一、四三二貫	四、〇七一、四三二貫	
鰹	一、六九、六六六	一八九、五三四		二〇一、二〇八	一六八、八九二			六四二、四一三
鯖								七五一、四〇一
鯛								二五四、〇三〇
鯖								六一、七三二
鰤								一四九、〇七七
鰮								一八一、三二二
鱈								一四九、二二五
鯛								二六六、九三三
鯨								一〇二、一四四
鰮								二〇九、八八八
鯨								七五一、四〇一
鯨								二五四、〇三〇
鯨								六一、七三二
鯨								一四九、〇七七
鯨								一八一、三二二
鯨								一四九、二二五
鯨								二六六、九三三
鯨								一〇二、一四四
鯨								二〇九、八八八
鯨								七五一、四〇一
鯨								二五四、〇三〇
鯨								六一、七三二
鯨								一四九、〇七七
鯨								一八一、三二二
鯨								一四九、二二五
鯨								二六六、九三三
鯨								一〇二、一四四
鯨								二〇九、八八八

十五、漁業　（大正十四年）

鯨	一〇八、八九七	六四、〇六七	一二三、九九〇	一四九、二二五	七五一、四〇一		
鯛	二九三、六二四	九七六、四六七	二三〇、九〇一	二六六、九三三	二五四、〇三〇		
鰤	九五、七九六	三三九、七八	八九、九四四	一〇二、一四四	六一、七三二		
鯨	一六九、七八〇	一八六、五〇一	一三二、四四四	一〇九、四四七	一四九、〇七七		
鰮	二七八、一九四	一四七、五八二	二三七、八一九	二〇九、八八八	一八一、三二二		

隣縣との沿岸漁獲物價額比較

德島縣	三、四〇九、六四一円	香川縣	三、〇五六、〇七三円	高知縣	一〇、五三三、七四〇円	本縣	四、八三二、七六五円

四、遠洋漁業及漁民移住　大正十四年に於ける内地沖合遠洋漁業は漁船數六十八（噸數八百四十噸）乗組員千百三十九人、漁獲高四十六万三千圓、又樺太、朝鮮、臺灣等に出漁せるもの船數百六十五（噸數二百八十二噸）漁獲高四十八万五千圓に及ぶ。

移住漁業者は百戸を超ゑ慶尚南道泗川郡三千浦面、全羅南道莞島郡莞島面等に於て從業し成績良好なり。

五、水産養殖　大正十四年末現在に於ける水産養殖場數は四百九十四、其の面積は百六十万六千坪にして年中に於ける收穫高は五万圓なり、養殖の主なるものを鯉、鰒、紫菜とす、養殖の業遲々として振はざれども東豫一帶の干潟淺海は介藻類、南豫地方は眞珠介の適地

たるべく其の他河川、池沼の孵化放流等に依る増殖の途頗る廣し。

六、水産製造物　大正十四年の産額四百五十四万圓にして全國第十二位にあり、主要なるもの次の如くにして鰹節は近時製法進歩し名聲高し。

	大正十四年 數量	大正十四年 價額	同十三年 數量	同十三年 價額	同十二年 數量	同十二年 價額	自大正七年至同十一年五ヶ年平均 數量	自大正七年至同十一年五ヶ年平均 價額
煮干鰯	四九四、〇九三貫	八四五、七五五円	四五八、一〇四貫	五七八、一〇三円			二九五、三八五貫	六四〇、九二一
蒲鉾及竹輪	七〇〇、三三〇	一、八六四、五四七	六三三、六九〇	六二九、八九〇				
鰹節	三五、九〇五	三三一、八〇五	三〇、八三一	三一、六二一				七一、七八四

隣縣との水産製造物産額比較（大正十四年）

德島縣	一、四〇二、〇三二円	香川縣	九七〇、八五四円	高知縣	三、〇四五、五〇七円	本縣	四、五四三、二五四円	

七、製鹽　食鹽は東豫の一部に產す、大正十四年の製造人員百十四人、從業者二千五十人、塩田反別三百二十四町歩にして收納高、賠償金左の如し。

	大正十四年 收納高	大正十四年 賠償金	同十三年 收納高	同十三年 賠償金	同十二年 收納高	同十二年 賠償金	自大正七年至同十一年五ヶ年平均 收納高	自大正七年至同十一年五ヶ年平均 賠償金
食塩	六九、三三六、四〇〇斤	二、一四三、七〇七円	六四、六七六、七三〇斤	四六、一六六、四五〇斤			五四、一五〇、七四三斤	

第四節　鑛業

一、鑛區　本縣內鑛山中著名なるものは別子銅山にして創業以來二百三十餘年を閱し產額今尙衰へず、其他大小の鑛山點在す、大正十四年七月一日現在鑛區數三百六內採掘鑛區數稼業十二、休業百十六總坪數四千二百十七万坪にして從業人員は四千五百人なり。

大なる鑛區は住友、大阪アルカリ、久原、三菱、矢野等の經營にして銅鑛、銅硫化鐵鑛、金銀銅硫化鐵鑛を主とす。

大正十四年十月一日現在	鑛區數	坪數（千坪）	大正十三年 同 鑛區數	大正十三年 同 坪數（千坪）	大正十二年 同 鑛區數	大正十二年 同 坪數（千坪）
採掘鑛區	三六	四三、一七四	一三三	四二、〇三〇	一三三	四二、四三
試掘鑛區	一七六	七〇、六六〇	二〇八	八三、一一〇	二三三	九二、五三〇
計	二〇六	一二三、八四四	三三九	一二五、一三〇	三三五	一三四、九四二

二、鑛產物　採掘したる鑛物は概ね縣內に於て製錬せられ加工場としては住友四阪島製錬所、同新居濱電氣分銅所あり、大正十四年の鑛產物販賣價額一千三百八万圓、石材及有用土石の產額三十三万圓にして內銅は一千三万圓の多額に上り全國屈指の位置に在り。

	産出高	販賣高	價額	同十三年産出高	自大正八年至同十二年五ヶ年平均産出高
金	二六、〇三五 匁	二三、五九五 匁	六六八、三八六 円	二二、一八六 匁	九八、七二八 匁
銀	二、九三五、六五〇	二、四五九、四二二	五二、一三四	三、二八、六二七	二、〇七八、九二五
銅	二六、一三九、二七一 斤	二一、九四二、六九五 斤	二〇、〇三三、五三二	二〇、七二五、七四二 斤	二〇、〇八〇、一八七 斤
銅鑛	二三、三九四、五六〇 貫	二三、五二四、〇五八 貫	六二四、四五八	五、七五八、七三六 貫	三四、六六一、五一七 貫
硫化鐵鑛	一八、二五三、三二四	七、六九二、〇四三	二〇、七五〇	七、二四九、四七〇	二、一三五、一八六
金銀銅硫化鐵	二、四〇八、二三八	二、四〇八、二三八	九六二、六五八	—	一、二三三、九九五
石材	大正十四年産額		同十三年	同十二年	
有用土石	一七五、四八一 円		二六九、五一七 円	二五六、二二四 円	
	一五一、四〇六		一〇八、八五二	二二八、一九二	

第五節　工業

大正十四年の工産物價額は一億四千七百四十五万圓を算し、農産物を超ゆること四千二百七十万圓にして總生産額の五割一分に當る、その中百万圓以上の類別を示せば綿織物、生絲、綿絲、清酒、和紙、染物、肥料、醬油、木製品、布帛製品、瓦、菓子の十二種に上り殊に綿織物は工産中三割四分を占む。

一、工業戸數　大正十四年末の工業戸數は二万四千九十四、中專業七割四分、兼業二割六分の比なり。

二、工場　常時職工五人以上使用の工場數は大正十四年末現在一千八十三にして五年前に比し倍加し其の職工數は三万四千四百六人なり、内紡織工場最も旺にして食料品工場は五年間に四倍し之に亞く。

		紡織	機械器具	化學	食料品	製材及木製品	印刷製本	瓦斯電氣	其他	計
工場數	無動力	四六	六	二六	三九	一	一	—	三三	三二
	有動力	三八二	二六	八〇	一九一	三三	一九	二	二〇	七四一
職工數	男	四、二八〇	四七	一、五〇〇	二、九九二	一八五	三七四	二四	五五四	一〇、三五六
	女	三、八四四	—	一、一四七	八二六	一	八	—	二四	二四、〇六〇

三、主要物産

(イ) 織物＝大正十四年織物産額は五千百三十二万圓に達し内絹織物及絹綿交織物十八万圓麻及其交織物四十五万圓、綿織物五千六十九万圓にして綿織物は九割八分に當る。

綿織物中絣綿布は伊豫絣として其名聲普く概ね家内工業に屬し松山附近の婦女の手に依

り製織最も旺に二百四十五万反價額七百五十五万圓に上り本邦絣綿布生産量の五分の一を占め大正十三年價額に於ては次位に在るも數量は首位たり、フランネルは三千五百二十万碼一千二百七十万圓、綾地生綿布は二千九百十九万碼八百二万圓、縞及色無地（廣巾物）は二千七百十八万碼七百六十九万圓、タオル二百六十八万反三百四十九万圓何れも主産地を今治とす。

織物産額の全國に於ける地位（大正十三年）は栃木縣、和歌山縣に亞き岐阜縣、埼玉縣の上にあり て第十二位なり。

大正十四年廣巾綿織物中輸出向二千七十三万圓にして綿織物産額の四割一分を占む。綿織物の趨勢次の如し。

	大正十四年	同十三年	同十二年	自大正七年至同十一年五ケ年平均
機業戸數	三三、一七六	三三、五二六	三三、八五一	三三、九一四
機台數 力織機	二、九七一	二、八七六	一〇、五〇一	九、五四六
機台數 手織機	二八、六九七	二九、一八〇	二九、三三〇	二六、三八四
職工數	三二、二二一	三三、七一六	三二、九七二	三六、〇八〇

	數量	價額	數量	價額	全國に於ける地位	數量	價額	數量	價額
廣幅物									
綾地生綿布	二二八、一八六、八三六碼	二三、三七九、九六七円	二九、一九三、五五九	二五、一二八、六三九、三三三	三	二五、八七四、九〇〇	九四、六九七、六一七碼	六、七九八、六一三	二四、六八二、五九七円
其他生綿布	二九、一九三、五五九	八、〇〇三、八三一	一七、八三二、二八〇	四、八三〇、〇九三	一二	一四、九七八、四六〇	三、八八八、八〇三	?	?
フランネル	一七、八三二、二八〇	四、八三〇、〇九三	三五、二〇二、八七八	二、六五九、八二三	二	三一、五二四、七五一	一〇、三七四、四三七	?	?
縞及色無地	三五、二〇二、八七八	二、六五九、八二三	二七、一八二、六〇四	七、六九三、三二〇	三	一七、〇四三、八二四	三、八四六、一六七	?	?
小幅物									
生綿布			一三、三四八、二六六反	一、七二九、四五九反	五	一二、三六八、三九三	五、一八二、八三六	?	一三、〇八〇、九〇〇円
絣綿布	一、〇八一、五一八反	一、二〇八、三七五	一、二〇八、三七五	一、八三一、三八五	六	一、三五二、九三四	一、一四二、七三七	?	?
タオル	二、四五一、一六八	七、五四九、八三二	二、二四九、八五五	六、九五六、八六七	二	二、九二一、三九二	八、五〇七、一三二	二、一四七、〇六四	九、〇〇五、三五四
統計樣式の改正に依り五ケ年平均を掲出し難きものあり	二、六七九、一八四	三、四九三、八九九	一、七〇三、九〇四	二、三六八、九九三	三	一、五八四、二七〇	二、〇三五、〇五三	?	一、一七三、四五九

隣縣との綿織物産額比較

（大正十三年）

德島縣	一六、〇九五、二〇四円	高知縣	五三、〇四五円
香川縣	二、一三八、八六一円	本縣	四三、六一〇、一四八円

（ロ）蠶絲＝大正十四年の生産額は生絲二十一万三千六百貫、屑物十五万八千九百貫總價額二千六百九十八万八千圓を算し遂年著しき增加の趨勢を呈せり、大正十三年に於ける産額を全國に比較するに岐阜縣、山形縣に亞き滋賀縣、兵庫縣の上位に在りて第九位とす、然れ

とも其の品質の卓越せる本邦第一を以て目せられ所謂伊豫絲の稱あり、南豫一圓に多く產す。

	大正十四年	同十三年	同十二年
製造戸數	三三五	三三〇	三二九
釜數	八、三四六	七、八九六貫	八、一八二貫
數量	二八三、七六一貫	二四九、八二九	二三四、一三七
價額	二六、九六八、六七〇円	三三、七〇八、九七三円	三三、三六〇、〇六二円
職工數	九、五四八	八、八四五	八、六二二

隣縣との蠶絲類產額比較（大正十四年）

德島縣	二二、一六六、二〇九円	香川縣	二、一〇五、五四四円	高知縣	一二、三九、九七三円
本縣	二六、九六八、六七〇円	?			

（八）清酒＝大正十四酒造年度の製造場數三百五十二、製造高十四万四百五十石、此の價額一千二百三十三万二千圓にして温泉、喜多、西宇和、北宇和の各郡主產地なり、製品の移出先は大阪、廣島、高知及九州方面にして優良品は灘酒代用として大阪に仕向けらる、全國多產の班に列し第十二位に在り。

	大正十四酒造年度	同十三酒造年度	同十二酒造年度
製造場數	三五二	三五四	三五七
製造高	一四〇、四五〇石	一四〇、三七五石	一五二、六九三石

（自大正七酒造年度至同十一酒造年度五ヶ年平均）

稅務署の調査に依る　大正十一酒造年度以降の製造高は課稅石數にしてそれ以前のものは査定石數なり

隣縣との酒類產額比較（大正十四酒造年度雜酒・水產工業統計に依る）

德島縣	六五、七三二石	香川縣	五八、二六四石	高知縣	七三、〇九八石
本縣	一五三、二〇八石	?			

（二）綿絲＝大正十四年の綿絲製造は會社數五、製造高二十万八千八百梱、價額千六百八十八万圓にして大正十三年の生產價額を全國に比較すれば岐阜縣、廣島縣に亞ぎて第十一位に在り。

	大正十四年	同十三年	同十二年
工場數	五	五	五
職工數	四、八九四	四、九一五	五、一五一
製造高	二〇八、八六八梱	二、二二、三二〇貫	二、三〇一、三九二貫
價額	一六、八八〇、〇〇八円	一五、七二五、七三三円	一七、八一九、二二二円

（自大正七年至同十一年五ヶ年平均）

隣縣との綿絲紡績比較（大正十四年）

徳島縣	七、九八一、七二五円	香川縣	一、五八五、二三九円	高知縣
本縣	一五、七二六、七二一			

（ホ）和紙＝大正十四年の製造戸數千三百六十四、職工男二千五百七十五人、女三千百十二人、産額五百十九万四千圓に達し全國に於ける地位は大正十三年高知縣の九百十万圓に亞きて第二位に在り。

	大正十四年	同十三年	同十二年	
戸數	一、三六四	一、六二六	一、七八八	自大正七年至同十一年五ケ年平均
職工	五、六八七	六、一七六	六、五〇二	二、五〇七
生産價額	五、一九四、三七六円	四、九三四、一四五	四、八四〇、〇一三	八、〇七六

主要製品類別

美濃紙			半紙			泰書及杉原	漉返	其の他
數量	價額		數量	價額				
七九、五三一	五三七、六〇二円		四六一、八二一	一、八二七、四六二円		二六九、五七〇円	一、〇〇九、三〇二円	一、五三〇、四二〇円

大正十三年中の産額隣縣との比較は徳島縣五十八万圓、香川縣百八十九万圓、高知縣は前掲の如し

（ヘ）肥料＝大正十四年の製造戸數は百四、産額四百十三万三千圓内鑛物質一千七百五万貫百九十七万圓、配合肥料五百七十八万貫、百八十四万圓を主なるものとし住友肥料工場の製品は其の大部を占む、大正九年より同十三年に至る五ヶ年平均産額三百二十七万圓にして漸增の域に在り大正十三年全國第十二位とす。

（ト）捺染物＝大正十四年中染物染賃は四百八十六万圓あり、その内捺染物は機械製小幅二百七十三万九千反、四百三十万七千圓にして松山、西條附近に旺なり、大正十三年に於ては靜岡縣に亞き全國第七位に在り。

（チ）漆器及陶磁器＝大正十四年に於て漆器産額は七十二万七千圓、櫻井を主産地とし中國九州の各地に移出す、陶磁器産額は五十九万三千圓、砥部燒最も顯はれ各地に歡迎せらる兩種製産額の全國に於ける地位（大正十三年）は漆器第十二位、陶磁器第十六位なり。

大正十四年		製造戸數	職工數	産額	同十三年		同十二年		同十一年	
漆器		七三	四七七	七二七、三八〇円		七九、〇七五円		六八七、〇〇〇円		六九、〇二〇円
陶磁器		二六	三六四	五九三、五五〇		五五五、一四八		五六三、一二二		三九、三二八

（リ）木蠟＝大正十四年の製造戸數四十二、職工百二十一人、數量三十万三千九百貫、價額八十四万八千圓にして製品は阪神地方の商賈の手を經て海外に輸出せらる、大正十三年全

國に於ける生産地位は熊本、福島、兵庫の各縣に亞き第四位を占む。

四、電氣事業　電氣事業は近年旺盛にして水力に依るもの多く大正十四年會社數十、總發電力三万百キロワット、電線路の亘長二千五百哩に及ぶ、而して光力又は動力の供給せられざるは島嶼、山間等極めて僻陬の村落僅少あるのみにして取付灯數は七十七万四千八百灯（十燭光として）一戸當三灯三分を算す、其他電熱機に六百キロワット、電動機取付馬力一万三千九百馬力に上る。

第六節　會社及金融

一、會社　會社（銀行業を除く）は大正十四年末に於て五百七十二、其の資本金八千四百二十五万圓にして之を組織別に分ては株式會社最多にして三百十九（五割五分）合資會社合名會社之に亞く、更に會社を事業の目的に依り分てば其の數に於ては工業最も多く二百六十二資本金三千二十七万圓なり、商業二百三十八資本金千三百三十四万圓、運輸業三十三資本金三千六百五十五万圓、農業二十六資本金百九十万圓、水産業三十三万圓、鑛業八資本金百九十万圓、水産業五資本金二十四万圓の順位なるも其の資本金の高に於ては運輸業四割三分を占めて最も多く工業の四割一分之に亞くなり。

大正十四年末

	社數	資本金	同 十三年末 社數	資本金	拂込濟額	同 十二年末 社數	資本金	拂込濟額
合名	九九	四、四七六千円	一〇〇	四、四九七千円	三、九三四千円	九二	四、〇三〇千円	三、九九八千円
合資	一五二	二、三六八	一二五	一、九五三	一、九二二	一二三	一、九二二	一、七八七
株式	三一九	七、三一六	三四五	七、三一九	四、〇三八	三四八	七、三一九	四、〇三八
株式合資	一	一〇〇 五	二	二〇 一	二〇 七	一	二〇 七	二〇 七
相互	一		一	七	七	一	七	八
計	五七二	八四、二五六	五七二	七九、八八七	五〇、六五四	五五四	七九、三七〇	四九、八三八

大正十三年末に於ける會社を資本階級別に分てば一—五万圓のもの百八十、一〇—五〇万圓のもの百六十一、五—一〇万圓のもの九十二ありて一—五〇万圓のものにて會社數の七割五分を占む、而して百万圓以上のものは八なり。

二、金融　金融機關は大正十四年末に於て銀行三十六、無盡營業四、信用組合二百七十四質屋營業三百三十一、郵便局百七十六、其の他金貸業者ありて地方金融の圓滑を計りつゝあり。

隣縣の會社に關する比較（十二年末會社統計表に依る）

	社數	資本金
德島縣	二四一	三四、四八五千円
香川縣	二八六	四六、七二〇
愛媛縣	五六〇	七八、七〇三
高知縣	三〇六	四五、五八七

（一）銀行＝大正十四年末現在の銀行數三十六資本金四千五百四十八万圓中拂込資本金三千五百五十二万圓にして一銀行平均資本金百十八万圓に當る、普通銀行三十四にして農行及貯畜銀行は各一とす。

隣縣の銀行に關する比較

	大正十四年末	同十三年末	同十二年末		行數	資本金（大正十三年末）千円
行數	三六	三七	三七	徳島縣	七	九、四〇〇
資本金 千円	四五、四八五	四五、五四五	四五、五四五	香川縣	一三	一九、五三〇
拂込資本金	三五、五四三	三五、三八五	三四、七七三	愛媛縣	三七	四五、五四五
積立金	一〇、二〇六	九、三二一	八、六六七	高知縣	四	一三、五五〇

本縣に本店を有する銀行の大正十四年度中の營業狀態を觀るに預り金高四億五千三十九万圓に達し一銀行當千百九十万圓とす、又貸付高は二億九千五百八十七万圓一銀行當七百九十九万圓に達す。農工及普通銀行三十七の割引手形の割引高は一億一千六百八十二万圓に及び普通銀行三十四に於ける荷爲替手形取組高二千七百七十万圓にして送金手形振出高は一億六千二百三十一万圓、受込高は一億八百九万圓にして代金取立手形の振出高は一億一千二十四万圓、受込高は九千八百三十五万圓に達するものなり。

	諸預り金 千円	貸出金 千円	割引手形 千円	荷付爲替手形 千円
大正十四年末	一〇三、四四九	一二三、五二四	一六、一五六	一、三九七
同 十三年末	九一、七七五	一〇九、五四一	一七、七六六	九七一
同 十二年末	八六、三六四	一〇八、四四五	一三、九五五	八八二

（二）信用組合＝信用事業を行ふ產業組合の大正十四年末數は二百七十二を算す中調査組合數二百五十二に對する組合員數七万三千五百七十三人にして其の組合員の職業別を見るに農業五万八千五百十二人にして七割を占む、商業七千二百七十七之に亞ぐ又出資口數は二十万二千七百三十四にして其の所有口數の職業別を見るに農業最も多く十五万千二百十三口にして七割五分を占め商業二万八千三百三十二口にて之に亞ぐなり。出資總額三百十七万七千三十八圓中拂込濟出資額二百二十六万四百五十三圓に達し積立金百二十四万二千三百六圓、年末現在に於ける借入金百八十七万五千百七十八圓貯金千七百十万八千八百圓貸付金千五百万九千三百二十五圓手形割引三万三千四百二十三圓なり、而して四國四縣の狀況（大正十三年末現在）次の如し。

	組合數	調査組合數	組合員數	出資總額	積立金	貯金
德島縣	一五九	一五三	三六、〇八二	一、八六三、八四七円	三二四、六五一円	四、七六九、七三五円
香川縣	一九九	一七八	六九、七八〇	二、七五、八九六	九一三、九八九	一五、八三二、八五四
愛媛縣	二九七	二三六	七〇、八三九	二、六六四、三三四	九二九、四八九	一二、四〇八、六六一
高知縣	二〇〇	一五三	五三、二二〇	二、四四〇、六〇四	五九二、九九五	八、三三一、七八〇

(三) 無盡＝大正十四年末現在營業者は新居郡、宇摩郡、今治市、松山市に各一ヶ所あり、何れも中産階級以下の金融機關にして其の組數は六百十四に達し一營業者に付組數百五十三に該り總口數一万九千五百八十にして一組の平均口數は約三十二に相當す、給付金契約高四百九十二万八千八百圓掛金契約高五百五十九万二千八百三圓なり。

(四) 質屋＝店數大正十四年末に於て三百三十一戸本年取扱の口數は三十八万五千三百二十四、金額百七十万二千五十七圓にして一店平均取扱口數千百六十四に當り一口當平均額は四圓四十二錢に過ぎざるなり。一ヶ年間受戻高口數二十一万二千其の金額百三万九千圓に達し年内流質高口數二万七千金額九万七千圓に及ぶ。

(五) 郵便貯金＝大正十四年度の狀況を見るに本年度中預入高四百二十八万圓拂戻高四百三十八万圓なり、而して年度末に於ける郵便貯金預入人員三十三万七千四人其の預金高六百七十一万五千八十四圓に達し一人平均額は十九圓九十三錢に相當するなり。

第七節　産業諸團体

産業共勵に關する諸團体の數は二百十七にして水産業に關するもの百六十、農業に關するもの三十六、工業に關するもの十七、林業に關するもの三ありて夫々目的に向つて活動せり、又産業組合の大正十四年末に於ける組合總數二百九十七その聯合會九ありて發達顯著なり。

大正十五年度豫算

		團体數	事業費	其の他	計
農業	縣農會	一	五八、七一〇円	九、七〇一円	六八、四一一円
	郡市農會	一五	一二、四八九	五〇、八八一	一六二、三七〇
	果物同業組合	二	三、五五三	九、二七六	二、八二九
	柑橘同	一	四、一七九	二、一六六	六、三四五
	蠶種同	一	九九〇	三、五九七	四、五八七
	養蠶同	二	六、四五〇	一、九〇六	八、三五六
	除蟲菊同	一	一、九五五	二、二一〇	四、一六五
畜産組合及聯合會		一二	七九、八六二	五七、八五〇	一三七、七一二

林業	材木同業組合	一	五五五	八七五	一、四三〇
	木炭同	三	二〇、三三一	一〇、七六六	三〇、九八八
	元結水引同	一	九五〇	六一〇	一、五二〇
工業	肥料同	一	五、一七七	三、四二〇	八、五七七
	織物同	四	四、九一六	十四、六九九	二四、六四四
	製紙同	五	一五、八六〇	八、八八八	一四、七四六
	漆器同	一	五、四五六	一、九五〇	七、四〇六
	製糸同	一	八一九	七、七四八	八、五六七
	油搾同	一	八〇六	八〇九	一、六二五
	陶磁器同	一	四九四	五〇六	一、〇〇〇
	織物同業組合聯合會	一	二、三二〇	一、七八五	四、一九五
	紙同	一	一、五五〇	三五〇	一、九〇〇
水産業	鮮水産會	一	一六、六〇〇	二、六〇〇	一九、二〇〇
	漁業組合	一四一	?	?	?
	同聯合會	六	?	?	?
	郡市水産會	三	?	?	?

第六章　交通及通信

本縣は山嶽重疊して道路開鑿上の障碍夥しく陸運の發達極めて遲く國有鐵道の如きも香川縣より來りて昭和二年四月漸く松山に通したるのみ、私設鐵道の敷設も乏しく唯海運の發達と電信電話等通信機關の稍普及せるは喜ぶべし。

一、道路及諸車　國道一線二十四里、府縣道百六十二線五百十二里にして全國に於ける延長の道府縣順位は國道第三十七位、府縣道第十八位なり、概ね坦々として車馬を通するに便なり、市道四十二里、町村道二千六百八十六里に達す。（大正十三年五月内務省調査）

大正十五年三月末に於ける諸車の數は左の通にして一部の地方に於ては自轉車の通交滋く鐵道未成の地域には自動車の定期來往旺なり。

乘用	馬車	七六	自動車	二〇六	自轉車	五六、六九九	自動自轉車	一一七	人力車 一、一七一
荷積用	馬車	二、三二	自動車	三五	牛車	一、一七九	荷車	三〇、一四三	猫車 三、七六一　其ノ他 二、三三五

二、鐵道軌道　國有鐵道讃豫線縣内の走行哩七十八哩三分なり、私設伊豫鐵道は我國に於ける輕便鐵道の嚆矢にして明治二十一年の開通なり、松山を中心に放射狀に二十七哩と別に六哩の軌道を經營す、宇和島鐵道十五哩、愛媛鐵道十六哩ありて何れも地方交通を益すること大なり。

三、海運　海岸線の延長に富み岬灣の出入多く豊後水道及瀬戸内海の要部を占め、其の背後には多大の生産力を有し古來沿岸航路能く開け我國海運史上夙に其名を顯せり、殊に

今治港は新開港場として最も般賑に高濱、三津濱、長濱、八幡濱、宇和島の五港之に亞ぐ、主要なる定期航路及縣内寄港地左の如し

大阪、門司、若松線	上下便毎日	甲便（往復奇數日）川之江、三島、今治、北條、高濱寄港 乙便（往復偶數日）新居濱、西條、壬生川、今治、高濱、三津濱寄港
大阪、四國線	上下便毎日	今治、高濱、長濱、川之石、八幡濱、吉田、宇和島、深浦寄港
大阪、細島線	上下便毎日	今治、高濱、長濱寄港
大阪、別府線	上下便毎日	高濱寄港＝（毎週火曜日缺航）
大阪、鹿兒島線	上下便隔日	高濱寄港
別府、宇和島線	上下便毎日	川之石、八幡濱、三瓶、吉田、宇和島寄港
尾道、三津濱線	上下便毎日三回	三津濱、高濱、北條、菊間寄港
宇品、三津濱線	上下便毎日二回	三津濱、高濱寄港

主要港灣移入移出貨物噸數及價額

	大正十四年				同十三年			
	移入		移出		移入		移出	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
	噸	円	噸	円	噸	円	噸	円
今治	一九〇、五五一	三〇、八四七、三二六	一〇〇、九五三	二九、三〇六、五〇九	一七二、五五六	二四、四〇六、七四六	八二、九〇八	二五、六〇九、四五八
高濱	一〇三、三八九	一七、一九九、五八七	八五、九六五	一四、〇四七、〇四四	一〇一、八八一	一五、九八二、八八〇	八五、〇四八	一二、六九一、四七九
三津濱	二〇八、三四〇	三三、六一三、八五〇	一八七、四六五	二七、三一四、七七〇	一五六、二四五	一八、〇一八、二五〇	一一六、〇九五	一五、三八〇、一四〇
宇和島	一八八、〇七四	一五、五七二、一一五	五三、七二四	一八、五五七、六九三	一五三、一七五	一五、一一四、〇七五	一〇四、一四四	一八、九四二、四二一
八幡濱	二三〇、六三一	二九、八〇七、六六一	一四四、四四八	一七、四二七、三六九	二二二、三〇七	二八、八四五、九九一	一四二、六五八	一八、四〇六、三三一
長濱	四一、九八一	一三、七八三、五六八	一六九、二〇九	一〇、九五四、八一六	三六、二五六	一二、七三二、四六八	一六九、四六〇	一〇、六一六、六六〇

四、通信

大正十五年三月末現在郵便局百七十六、電信取扱局所百二十八、電話取扱局所九十四、公衆電話十一、電話加入者五千四百六十にして通信上殆んど遺憾なきに似たり、電話は縣内は勿論大阪、神戸、岡山、尾之道、廣島、吳、下關、門司、德島、高松、多度津の都邑に通す、大正十四年度に於ける郵便電信の發受數左の如し。

	引受	配達
通常郵便	六一、三八八、八一七	七二、八六二、八九四
小包郵便	六七一、三三三	八七七、五四七

	發信	着信
電報	一、〇五一、九一〇	一、一五六、九七二

電話加入者中町村數二百七十六に對し町村役場に電話を架設せるは百七なり。

第七章　社會事業

本縣に於ては社會事業に付慈惠救濟及特殊兒童の保護教育等に關し夙に施設せし所あり

しが世界大戰以來 思想上、社會上の激變を來たし社會問題に對し一般の注意を惹くに至りしに依り民力涵養、地方改善、社會教育方面等に力を盡せり而して大正十年四月始めて縣に社會課を設け郡市又之に倣ひて課係等（仝十五年六月郡廢後は宇和支廳に該課を置く）を置き玆に本縣社會事業の新時代を割するに至り、亞きて翌大正十一年三月愛媛縣社會事業協會又仝十二年七月愛媛縣善鄰會なる事業團体生し事務所を縣社會課內に置き玆に漸く施設機關整ひ斯事業に一新機軸をなすに至り社會的施設年と共に進歩しつゝあり。

第一款　救濟事業

第一節　行政廳の救濟

一、救恤　明治七年太政官達第百六十三號恤救規則により窮民及棄兒の救助養育せしは大正十四年中三百二十三人なり中國費に依る者十七人、地方費に依る者三百六人にして總費用一万一千七百一圓を要し地方費は實に九割四分に該る。救助養育を受くる原因別に見るに老衰最多數にして百一人、疾病百人、貧困五十六人、癈疾三十四人、幼弱二十九人、白痴三人の順位なり。

		大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年
國費	人員	一七	一八	二二	二三	二六
	救助費	七、五五円	六、六七円	五、四四円	七、四三円	七、一七円
地方費	人員	三〇六	一七七	二七六	二四〇	二四三
	救助費	一〇、九三六円	八、七五五円	一、三六八円	七、三八円	六、四〇三円

二、罹災救助　本縣に於ける罹災救助基金法に依る積立金は大正十四年度末に於て百九十余万圓に達す、仝十四年度には該金の支出なし。

三、行旅病人死亡人の救護取扱　明治三十二年三月法律第九十三號行旅病人及行旅死亡人取扱法に依り大正十四年中救護人員百三十八人其救護費用二千六十五圓なり、中行旅病人七十一人費用千四百九十九圓にして行旅死亡人は六十七人費用五百七十圓なり、而して住所不詳者は行旅病人に於て八分、行旅死亡人に於て三割九分の割合を示す。

四、養育に係る棄兒　大正十四年度に於て該當なし。

五、軍事掩護　大正十四年度に於て軍事掩護の爲支出したる金額七千四百十七圓掩護人員三百二十四人なり。

六、縣方面委員　大正十二年十一月之が設置を見 松山市十六人、今治市十五人、宇和島市八人となり右委員は地域内に於ける有志者にして社會事業に趣味を有し同情ある人を選拔し知事より囑託せり、爾來之等委員の熱心なる活動により救濟保導良好なる成績を收めつゝあるを以て今後は漸次町村に之が普及を計り其實を擧げんとす。

第二節　自治團体の救濟

松山市市民にして貧困のため醫療の途に窮する者の無料診療を目的として大正十二年六月一日の創立に係る松山市設診療所あり、仝十四年中の狀況を觀るに仝十四年度決算四千三百七十二圓（仝十五年度豫算四千四百圓）診療日數二百九十八日患者數延人員七千三百九十三人（實人員八百二十五人）にして患者一日平均約二十五人なり。

第三節　私設團体の救濟

一、久万凶荒豫備組合　明治三十一年五月の創立上浮穴郡明神村外七ヶ村を以て組織し該町村内住者にして天災地變の爲災害に罹り又は生計困難なるものを救濟する目的にして大正十四年度中に救濟せしは火災三戸五十五圓、貧困十七戸百六十五圓の狀況に在り。

二、上分町愛生慈善會　宇摩郡上分町にあり明治四十年十一月創立會員組織にて貧窮者に金品を付與して隨時救護するものにして大正十四年末現在預金七百八十二圓あり。

三、縣下普遍的に行はるゝ恩賜財團濟生會の依託診療事業あり、大正十四年に於ける救療者三百八十一人に達す。

第二款　副利事業

一、職業紹介　職業紹介事業は大正十一年一月愛國婦人會愛媛支部に於て婦人職業紹介所を開始したるを嚆矢とし大正十一年中には松山市、今治市、宇和島市、三津濱町、八幡濱町の五ヶ所又仝十三年三月大洲村に一ヶ所開設あり、大正十四年中の求人數五千二百八十六求職者數五千三百十九就職者數二千四十一にして求職者百人に付就職せし者三十九人に相當す大正十五年四月川之石町に一ヶ所職業紹介所新設ありたり。

二、公設市場　松山市に三箇所宇和島市に一箇所あり、大正十四年中賣上高十五万五千四百五十九圓に上り一ヶ月平均賣上高一万二千九百五十五圓に及ぶ。

三、公營質庫　喜多郡長濱町に大正十一年十一月長濱町營質庫の開設あり、町村中產階級

以下の窮迫者に對する小資金融通機關、現下の社會狀勢より觀て緊要なりし爲縣より金五千圓を借入資金とせるもの仝十四年中の成績は入質點數千四百五十一其の金額一万一千三十三圓にして出質點數千二百九十四其の金額一万二百六十七圓に當り流質點數七十其金額六百四十九圓を占む。入質品物一點當りは七圓七十錢なり。

四、住宅組合　住宅組合法に依り大正十一年來設立許可されたる組合數は二十にして組合員百六十六人あり低利資金貸付金額二十七万四千九百九十九圓に達す、平均一戸當該資金融通額は千六百五十七圓なり。

五、公營住宅　大正十四年度末に於ける公營住宅主体十一にして戸數四百五十八なり即ち松山市百四十九戸、宇和島市五十七戸、大洲町五十五戸、長濱町十一戸、八幡濱町三十戸、川之石町二十戸、郡中町三戸、西條町十五戸、三津濱町三十二戸、三島町三十九戸、今治市四十七戸あり而して仝十五年より使用開始のものに吉田町經營の九戸あり。

第三款　教化事業

一、感化事業　大正三年四月創立の縣立自彊學園は愛媛慈惠會の感化部を縣立に移し不良

兒童の感化教育を施すものにして、大正十四年末在園者二十四人、委托せるもの二十六人を占め仝十四年度經費八千八百二十五圓なり。

二、盲啞教育　教育の部參照

三、釋放人保護事業　財團法人愛媛保護會（大正四年四月創立）を中心として縣下に二十一ヶ所の保護教團あり、大正十四年中保護したる者九百八人仝十四年度經費五千四百八十五圓に及ぶ、而して資產は二万九千余圓あり。

四、勞働者教育　私立松山夜學校（明治二十四年一月創立）は勞働兒童並に勞働子弟の教育を目的とせるものにして近來勞働に從事する青年間に向學心勃興し逐年入學生の數を增加する傾向を示す大正十四年度經費一万一千五百八十五圓を要し資產二万九千余圓あり。

五、圖書館　社會教育の重要なる機關にして大正十五年三月末日に於ける其の數三百八十三、此の藏書冊數十四万六千三百四十八を算す、今其の內譯を見るに學校文庫百五十九、青年文庫百六十、處女文庫三十八、其の他一般圖書館二十六ありて十四年度圖書購入豫算額一万七千余圓なり、其の中稍体を具へたるものに三津濱圖書館（三津濱町に在り町立にして圖書冊數一、六九四閱覽人員七、八二〇なり）喜

佐方圖書館（喜佐方村に在り村立にして圖書冊數五七四閲覧人員一、六八〇なり）愛媛縣教育會記念圖書館（松山市に在り私立にして圖書冊數三六、九二六閲覧人員一八、五九二なり）

伊達圖書館（宇和島市に在り私立にして圖書冊數一四、五〇五閲覧人員四三、二四〇なり）明德圖書館（今治市に在り市立にして圖書冊數九、五〇五閲覧人員三四、七五なり）宇摩圖書館（三島町に在り私立にして圖書冊數四、三四四閲覧人員四七、四九一なり）伊豫圖書館（郡中町に在り私立にして圖書冊數一、一三三閲覧人員六五なり）愛媛縣教育會喜多郡部會大典記念圖書館（大洲町に在り私立にして圖書冊數三六四閲覧人員三〇〇なり）愛媛縣教育會新居郡部會圖書文庫（西條町に在り私立にして圖書冊數八七四閲覧人員四四〇なり）愛媛縣教育會南宇和郡部會南宇和圖書館（御荘町に在り私立にして圖書冊數三五四閲覧人員七三〇なり）の十ヶ所在り。

六、青年訓練所　大正十五年七月來之が設置に努め縣下に三百七十九ヶ所の開設を見たり中青年訓練所を小學校又は補習學校に併置のもの百二十八、實業補習學校を以て之に充當のもの二百四十三にして大部分を占め私立七、組合立一あるなり。

七、男女青年團少年團　社會教育の對象たる青年團處女會少年團の修養機關の狀況次の如し。

	團体數	正會員數	經費
青年團	三七	五〇、六九三	五四、九五五円
處女會	二六一	二九、三三五	二一、八八〇
少年團	一三	一九、四三一	二、六〇〇

八、民力涵養、消費節約、生活改善　大正八年以來講演會、協議會、活動寫眞等を以て趣旨の普及徹底に努め今や實行機關として戸主會、主婦會、自治會等を組織すると共に夫々適切なる實行事項を協定し以て國民精神の作興、立憲自治の思想涵養並に諧和共濟、勤儉力行の實を擧げしむるに努めつゝあり。

九、地方改善事業　社會民衆をして各其の志を遂げしめ國内諸方面に渡りて克く協調諧和の實を擧げしむることは内外國事多端なるの現時に於ては最も緊切なる事たるべし、依て社會の弊習たる因襲偏見を芟除し融和善鄰の促進を圖るため種々劃切にして有効なりと認むる計劃を以て、又同樣の目的を以て創設せる愛媛縣善鄰會の事業普及を奬勵する等地方改善の實績を擧ぐるに努力せり、愛媛縣善鄰會（大正十二年七月創立）は相互善鄰の趣旨を宣傳し因襲的偏見の除去に努め、矯風教化の振興を圖り、日常生活の改善を促し、其他必要と認めたる事項の實行機關にして又縣下に於ける該事業の統一聯絡機關にして之が事務所を本縣社會課内に置く、之が經費は國縣公共團体其の他の補助金寄付金等に依るものにして大正十五年度經費豫算左の如し。

歳入

科目	金額
總額	八、六六六円
寄附金	二、二〇〇
補助金	五、二〇〇
雜收入	四二〇
繰越金	八四六

歳出

科目	金額
總額	八、八六六円
事務費	一、一〇〇
事業費	四、五三五
會議費	一、三八一
補助費	一、〇〇〇
其の他	六五〇

十、社會事業聯絡機關　之が機關として愛媛縣社會事業協會（大正十一年三月創立）は縣下に於ける社會事業團体の聯絡を圖り且つ其の經營を幇助し、社會事業に關する行政を翼賛するの外、社會事業研究會、講習會及講演會の開催、社會事業從業員の養成等を實行する事業團体なり、之が事務所を本縣社會課内に置く其の經費は寄附金及縣補助金等に依るものにして大正十五年度經費豫算は次の如し。

歳入

科目	金額
總額	九、一七〇円
寄附金	五、〇一〇
補助金	三、四三〇
財産收入	三一〇
雜收入	一〇
繰越金	五〇〇

歳出

科目	金額
總額	九、一七〇円
事務所費	六三〇
會議費	七三〇
事業費	六、二一〇
基本財産造成費	一、〇〇〇
會員及寄附募集費	三九〇
豫備費	二〇〇

第四款　兒童保護事業

一、孤貧兒老病者保護事業　松山市に在る財團法人愛媛慈惠會は明治三十四年七月の創立にして孤貧兒の教養に着手したるものなるが大正十二年度より貧困なる老病者をも收容することとせり、之が經費は財産收入、會員の醵金、寄附金、縣市補助金、内務省助成金、宮内省奬勵金等に依るものにして大正十四年度經費は三千六百十圓なり資産總額八千圓を有す、仝十四年中收容せしものは四十一人中四人の退院あり、收容當時の狀態を年末現員に付見るに孤兒十一人、貧兒二十五人、遺子一人なり、外に委托せる者十七人あり。

二、託兒事業　其の事業團体に宇和島濟美婦人會（宇和島市に在り大正十一年より畫間幼兒保育事業をなし同十四年中入園者は八十人なり、同經費四、五〇〇圓資産一四、六八〇圓）今治託兒所（今治市に在り大正十一年設立同十四年中預入人員九十三人なり、同經費一、六四〇圓資産五〇〇圓）大洲保育園（大洲町に在り大正十四年十二月設立同年中入園人

員六同經費四八圓）八幡濱託兒所（八幡濱町に在り大正十五年八月開所同年中入園者三十三人なり同經費一、三八圓）波止濱幼稚保育園（波止濱町に在り大正十五年九月開始同年中入園者七十五人なり經費二〇〇圓）川之石愛兒園（川之石町に在り大正十四年二月創設同年八月楠町に分園を設く同年中入園は七十五人なり同經費一、〇〇〇圓）郡中託兒所（郡中町に在り大正十五年四月設立同年中入園者百二十人なり同經費一、五六圓）海禪寺託兒所（蔣淵村に在り大正十一年四月創立同十四年中入園者四十一人なり同經費六〇圓）の八ヶ所あり。此の外秋期農繁期に託兒所の開かるものありて大正十五年中の狀況を見るに一時的のもの四十六ヶ所、常設のもの七ヶ所ありたり。

三、姙産婦保護事業　縣下普遍的に行はるゝ恩賜財團濟生會の依託保護にして、日本赤十字社愛媛支部は大正十一年三市に各一ヶ所の姙産婦保護所を設け分娩前後の保護施設を備へ愛國婦人會愛媛支部に於ても姙産婦の依託保護事業の規程を設けたり。尙公設産婆は縣下に三十一ヶ町村あり、産婆一人に給する年手當平均額百五十九圓にして一分娩に對し産婆報酬の平均五圓四十錢に相當す。

第八章　財　政

本縣の地方費は大正八年度より約三倍の膨脹を來たし大正十五年度豫算額は縣六百十一万圓、市百八十二万圓（縣及市は特別會計を算入せず）町村一千三十一万圓、水利組合十七万二千圓なり、各經濟共財源は稅收入に俟つこと多く十四年度の百分比例は全國平均稅收入四十三に對し本縣六十一、稅外收入五十七に對し三十九、又全年度縣市町村稅人口一人當は全國平均十圓三十錢五厘に比し本縣十圓四十三錢にして稍重きに似たり。

地方債は大正十四年三月末現在縣三百六十九万圓、市百八十八万圓、町村二百三十九万圓水利組合八千圓ありて人口一人當七圓六十一錢三厘に及ふと雖全國平均十九圓九十九錢八厘に比すれは少額なり。

一、國　稅　大正十四年度直接國稅徵收額は四百五十万三千圓にして內地租は二割七分七厘所得稅は五割二分六厘を占む、大正十二年度に於ける擔稅力を見るに全國平均直接國稅一戶當二十七圓三十六錢二厘に比し本縣十九圓二十四錢六厘全國平均一人當五圓十六錢に比し本縣三圓七十五錢九厘にして全國平均に及はさること遠し。

間稅の內酒造稅は大正十三酒造年度五百十五万三千圓にして直稅の額を超ゆ。

直接國稅徵收額

	大正十四年度	同十三年度	同十二年度	同十一年度	同十年度
地租	一、三四七、二五三円	一、三三九、七〇三円	一、二三四、八九五円	一、二五三、四一六円	一、二五二、八一八円
所得税 第一種	七五三、〇九九	四四九、九三三	四六六、六八九	五一〇、八九一	七五三、八七四
第二種	二八七、七三六	二五一、四三二	二一四、一七〇	一六六、四〇三	一五八、六三六
第三種	一、一三〇、三三七	一、一六六、二九八	一、一六三、六九七	一、二三七、二一六	九一〇、八五九
計	二、三七一、一六二	一、八六七、六三二	一、八四五、四三六	一、九〇四、五一〇	一、八三二、三六九
營業税	七八七、七四一	七二六、四九一	六八五、八八四	八三〇、一九一	七二六、九六九
賣藥營業税	—	—	一、六九一	三、一七三	三、〇三六
取引所税	四八、三六五	六〇、五九一	七九、五三九	七三、六五一	七八、七六九
鑛業税	四八、九一三	一三九、六九七	三三一、二三八	五九、四一八	二〇一、六八五
計	四、五〇三、四三四	四、〇二四、一二四	四、〇九二、六四四	四、一二四、三六〇	四、〇八五、〇三九

廣島税務監督局税務統計書に依る

全國及隣縣との直接國税負擔額比較

（大正十二年度）

	德島縣	香川縣	高知縣	本縣	全國
一戸當	一六・八三円	一九・二五円	一五・六一円	一九・三四円	二七・三六円
一人當	三一・八〇	三・九六	二・九九	三・七五	五・一六

大藏省主税局調査に依る

二、縣費　縣經濟は中央に應し大いに縮約に努め特別會計を算入せさる大正十五年度當初豫算額六百十一万圓にして之を十年前即ち大正六年度決算額百七十三万圓に比するときは三倍五分に當り歳出一戸當二十八圓九十八錢、一人當五圓五十錢を示す。

歳入は税收入七割八分を占め而かも戸數割は其の三分の一を超ゑ一戸當七圓六十二錢三厘に達す、内務省地方局調査に據れは十四年度戸數割納税者一人當全國平均五圓四十二錢二厘、本縣は七圓三十三錢五厘にして第五位の高額なり。

歳出に於ては教育費及教育費補助總額の二割三分にして首位を占め土木費及土木費補助の二割一分警察費の一割五分之に亞く。

大出十五年度縣歳入出豫算

歳入 科目	金額	百分比
國税附加税	二、〇〇〇、〇一二円	三三
戸數割	一、六〇六、五九九	二六
營業税	一六一、六〇六	三
雜種税	一、〇四九、七四六	一七
小計	四、八一七、九七八	六八
國庫補助下渡金	二九七、六七六	五
財産收入	二六、七一二	

歳出 科目	金額	百分比
警察費	八五八、三八九円	一四
土木費	九一二、六九一	一五
勸業費	四七八、三四八	八
衛生及病院費	五八、六四四	一
教育費	一、二九六、二八八	二一
郡役所費	二五一、一七二	四
縣税取扱費	一四九、二八八	二

縣會議諸費	二七、五三〇	
縣吏員費	二三、七〇八	一
地方改良費	三四、四一八	
土木補助費	三八四、四一七	六
衛生補助費	五五、九〇〇	一
教育補助費	一一三、五七二	二
勸業補助費	三三一、一七五	四
縣債費	四六一、四八九	八
補充費	四七六、四六八	八
其の他	三〇六、二七四	五
計	六、一一〇、七七五	一〇〇

其の他	繰越金	四八、七三五
	貸付金返納	一七三、二六八
	繰入金	四〇、〇〇〇
	雜收入	六五五、四九四
	寄附金	二六、五五六
	其の他	二四、三四六
	小計	一、二九一、七九七
合計		六、一一〇、七七五

縣歲出及縣稅戶口當累年比較

	歲出總額	縣稅	一戶當 歲出	一戶當 縣稅	一人當 歲出	一人當 縣稅
	円	円	円	円	円	円
大正十五年度豫算	六、一一〇、七七五	四、八一七、九七八	二八・九八	二三・八五	五・五七	四・三九
同 十四年度決算	六、八九一、一九〇	四、七四九、五八三	二三・八六	二三・六五	六・三九	四・四一
同 十三年度決算	七、九一八、六八六	四、九二六、一六一	二七・八二	二三・五四	七・四〇	四・六〇
同 十二年度決算	六、四五三、八六一	四、九〇三、九二三	三〇・八二	二三・四二	六・〇三	四・五八
同 十一年度決算	六、五九四、七三三	四、七八〇、二六六	三一・七七	二三・〇三	六・二一	四・五〇

隣縣との縣歲出及縣稅比較

（大正十四年度豫算）

	歲出總額	縣稅	一人當 歲出	一人當 縣稅
	円	円	円	円
德島縣	四、二〇八、〇九九	三、二三、八二一	六・一〇	四・五三
香川縣	三、七〇〇、八〇〇	二、九六九、〇七六	五・二八	四・二四
高知縣	四、一八六、三六九	二、五四四、三三六	六・〇九	三・七〇
本縣	五、九八八、七二六	四、六二五、三〇二	五・四六	四・二一

歲出總額及縣稅額は地方財政概要に依り、算出に用ひたる人口は十四年國勢調査に依る

三、市費 大正十五年度に於ける市の豫算額は特別會計を除き松山市八十三万二千圓、今治市四十四万九千圓、宇和島市五十三万八千圓、合計百八十一万九千圓、人口一人當十二圓四錢にして町村費の一人當十圓九十錢に比し一圓十四錢多し、歲入中財産より生する收入は僅かに一割八分にて市稅は五割八分を占む、歲出に於ける科目別を見れば敎育費最多にして三割七分、公債費の一割八分、役所費の一割三分、土木費の八分之に亞く。

大正十四年度に於ける全國市の稅收入は人口（第一回國勢調査人口）一人當九圓五錢三厘にして松山市八圓十錢八厘、今治市八圓一錢九厘、宇和島市八圓四十五錢六厘なり。

大正十五年度市歳入出豫算

歳入

科目	金額	百分比
市税	一、〇六三、〇九八円	五八
財産收入	三二〇、四八七	一八
使用料手數料	六二、四一四	三
國縣補助下渡金	一五九、〇七五	八
國縣税等徴收交付金	五四、六六八	三
繰入金	四、一〇七	一
繰越金	六、〇四七	
寄附金	一四、一一六	一
雜收入	一四、六二五	一
市債	一二三、一〇〇	六
其の他	七、四八六	一
計	一、八一九、三三三	一〇〇

歳出

科目	金額	百分比
役所費	二四二、四五六円	一三
土木費	一五〇、〇三六	八
教育費	六七七、八六四	三七
衛生及病院費	一一〇、二七九	六
警備費	一八、八〇四	一
會議費	八、七二一	一
勸業費	八、九三七	
基本財産造成費	一九、八九一	一
社會事業費	三〇、〇三九	二
補助費	三三、八七六	二
公債費	三三三、六七六	一八
其の他	一九四、七五四	一一
計	一、八一九、三三三	一〇〇

市歳出及市税戸口當累計比較

歳出總額　市税

大正十五年度豫算　一、八一九、三三三円　一、〇六三、〇九八円

一戸當

歳出　五六・九六円
市税　三三・二八円

一人當

歳出　一二・〇四円
市税　七・〇三円

同　十四年度豫算　一、四四一、七三五　九三一、五八三　四六・七六　三〇・一二　一一・三六　七・三四

同　十三年度豫算　一、四七六、二一〇　九三三、五六二　四七・八八　二九・八六　一一・六三　七・二七

同　十二年度決算　一、六六八、三九一　九三六、八九九　五七・七一　三三・四一　一三・四八　七・五七

同　十一年度決算　一、四四一、〇五九　八九六、六四七　五四・一〇　三三・六六　一一・九六　七・四四

隣縣内の市との歳出及市税人口當比較

	徳島	高松	丸亀	高知	松山	今治	宇和島
歳出	一、九五三、八五七円	九六八、二八二円	五三八、二二五円	一、二九二、六二三円	五四五、八七一円	六二一、五〇五円	一、一〇五、四五八円
市税	四九一、五一一	四二三、五三〇	二〇二、一八三	四五一、三三五	四一五、五三三	二四二、九五六	二七三、〇九四
市税一人當	七・一八〇	六・八二六	八・二五九	八・一二三	八・一〇八	八・〇一九	八・四五六

本表は大正十四年度地方財政の概要に依る

四、町村費　町村歳出は一般の財況に伴ひ大正八年度より頓に膨脹し大正十五年度豫算額は一千三十万七千圓にして十年前即ち大正六年度決算額三百五十九万七千圓に比し二倍八分八厘に當る、歳出の主なるものは教育費にして四割一分を占め役場費の一割六分、土木費一割之に亞く。歳入中財産收入は僅かに六分に過きすして町村税は五割四分に達す。

大正十四年度に於ける税收入全國一人平均は五圓七十四錢一厘、本縣五圓七十五錢七厘内戸數割附加税は全國十九圓十七錢一厘に比し本縣十九圓七十五錢五厘にして何れより觀

るも概して負擔重きに似たり、又戸數割附加税を松山市の十三圓四十錢、今治市の十圓六十四錢四厘、宇和島市の十一圓七十錢に比するときは其の差著しきを見る、

大正十五年度町村歳入出豫算

歳入

科目	金額	百分比
町村税	五、六二一、〇一〇円	五四
財産收入	五九七、八五一	六
使用料手數料	三一一、〇一九	三
國縣補助下渡金	一、二八四、八六八	一二
國縣税等徴收交付金	二〇五、六三三	二
繰入金	二四四、九七八	二
繰越金	七三二、一九三	七
寄附金	三六五、七〇〇	三
町村債	四七六、三三三	五
其の他	五三九、六四九	六
計	一〇、三七九、二二四	一〇〇

歳出

科目	金額	百分比
役場費	一、六五二、四七五円	一六
土木費	一、〇〇三、〇五四	一〇
教育費	四、二七三、五六八	四一
衛生費	三七七、一〇九	四
勸業費	一二一、二一一	一
警備費	一二九、三四九	一
基本財産造成費	四四六、三一六	四
積立金	二一七、一〇三	二
公債費	五四四、〇六七	五
補助及寄附	四二四、八三八	四
其の他	一、一一八、一二四	一一
計	一〇、三七九、二二四	一〇〇

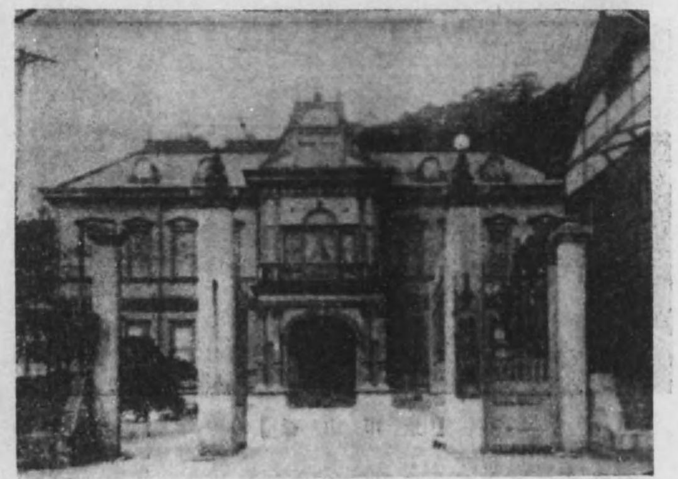
町村歳出及町村税戸口當累年比較

	歳出總額	町村税
大正十五年度豫算	一〇、三〇七、三〇四円	五、六二一、〇一〇円
同 十四年度豫算	九、五五三、二八六	五、三三三、八一〇
同 十三年度決算	一〇、八〇七、四六九	五、四六二、三一九
同 十二年度決算	一〇、四七三、九〇一	五、八〇〇、二七六
同 十一年度決算	一一、三九二、七八六	六、五一四、八二三

	歳出	町村税	一戸當 歳出	一戸當 町村税	一人當 歳出	一人當 町村税
	円	円	円	円	円	円
徳島縣	四、八七六、五四三	三、四六九、六三六	五七・六三	三一・四三	一〇・九〇	五・九〇
香川縣	四、二六八、一四三	二、八七六、八一三	五三・四一	二九・八二	九・九三	五・五五
高知縣	四、六一一、一〇三	二、八六四、八一一	六〇・四二	三〇・五四	一一・三六	五・七四
本縣	九、五五三、二八六	五、三三三、八一〇	五八・〇四	三一・一四	一〇・三五	五・七三
			六二・九六	三六・〇〇	一二・一一	六・九二

本表算出に用ひたる戸數は十三年末、人口は十四年國勢調査に依る

名所舊蹟天然記念物概覽



【愛媛縣廳】

【松山城全景】

【松山市景】

松山市勢

面積戸口—面積一方里一六九、世帯一六、八一一、人口七四、九一七
重要生産物—綿織物七、一三八、二三一圓、米六五五、六七三圓
諸官衙—愛媛縣廳、松山警察署、工業試驗場、松山測候所、穀物檢査所、同松山支所、蠶業取締所、同松山支所、松山土木出張所、松山巡査教習所、松山稅務署、松山聯隊區司令部、歩兵第二十二聯隊、松山衛戍病院、松山憲兵分隊、松山地方裁判所、同區裁判所、同供託局、松山刑務所、松山郵便局、廣島地方專賣局松山出張所、愛媛健康保險署、
諸學校—松山高等學校、愛媛縣師範學校、同附屬小學校、縣立松山中學校、松山高等女學校、松山城北高等女學校、松山商業學校、松山農業學校、市立松山工業學校、實業補習學校三、小學校九、私立松山高等商業學校、北豫中學校、濟美高等女學校、松山女學校、崇德實科高等女學校、松山技藝女學校、美善女學校、松山夜學校、愛媛盲啞學校、愛媛國學館、幼稚園四、
名所舊蹟—松山城趾、石手川公園、阿沼美神社、大寶寺、子規埋髮塔足立重信の墓、十六日櫻、南品陳列所、
鐵道—國有鐵道讃豫線終點(松山驛)、私設伊豫鐵道の高濱線、横河原線、森松線、郡中線(各線基點)、電車古町道後間、道後三津間(松山市經由)、
新聞—愛媛新報、海南新聞、伊豫新報、伊豫日々新聞、民衆新聞、
社會事業—救濟事業市設診療所、副利事業職業紹介所二、公設市場三住宅組合六、教化事業縣立自彊學園、愛媛縣保護會(釋放人保護)、私立愛媛盲啞學校(盲啞教育)、私立松山夜學校(勞働者教育)、兒童保護事業愛媛慈惠會(孤貧兒老病者保護)、

【松山公園と天主閣】

松山公園　舊松山城址にして市の中央にあり全山樹木繁茂し頂上の樓櫓疊壁今尚舊形を存し宏壯雄大にして眺望の絶佳能く筆紙の盡す所にあらず勝山と稱す、城山高さ五十二間周圍三十町十五間其の面積約五万九千坪あり。

加藤嘉明（十万石）慶長八年此地勝山に五層の城廓を築き移居寛永三年嘉明會津に移封せられ同四年蒲生中務輔忠知二十万石を以て入城同十一年忠知京師に殁し嗣子なく同十二年松平隱岐守定行十五万石を以て桑名より入城世襲して十五世定昭に至り城邑を奉還す、定行入國のさき城山は赤土山の殺風景なりしを臣下に命じ麥粟等を蒔かしめ鳥類を集めて其の散糞により草木の繁殖を計り且つ日向の松實を蒔きたるため比年ならずして鬱蒼たる林相を爲すに至る、降て寛永十九年天守閣を改築して三層となせしも天明四年の雷火に天主閣及本丸を燒失す文政三年更に工を起し三十五年の久しきに亘りて安政元年漸く竣工せしは現在の城廓之なり、建造物中加藤嘉明の築造に繫るもの僅に筒井門並乾櫓を存すのみ明治維新廢藩の際縣は之を公園とせしも同十九年陸軍省所管とし、其の後明治四十三年三月松山市貸下を受け現今市の公園として經營せり、大正十二年久松定謨伯大藏省より其拂下を受け更に松山市へ寄附する處となる。城山の東麓に縣社東雲神社あり菅原氏の祖天穗日命、菅原道眞、息長福玉命（松山城主久松家の祖定勝へ勅許の神號）を祭る、大正六年贈正四位久松定通を合祀す當神社に納められたる能裝束は天下の逸品多しと云ふ。

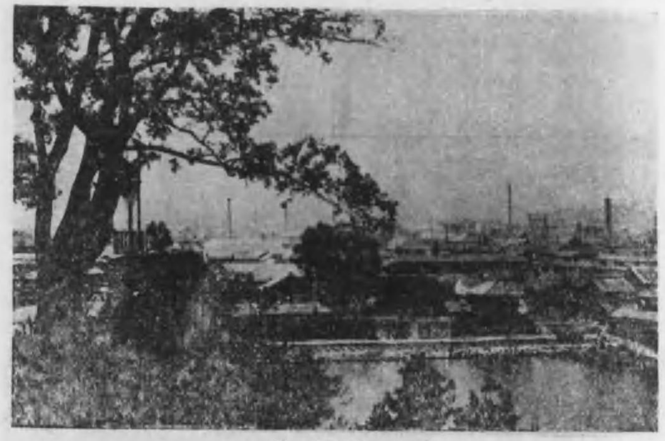
阿沼美神社　松山市宮古町に在る縣社延喜式内の大社にして最も歴史に富み大山積命を祭る境内廣く古松鬱蒼として森嚴を極む。往古勝山の嶺に在りしを慶長八年現在の地に遷座累代松山城主の尊崇篤く神田の寄進社殿の造營等屢々なり。

大寶寺　松山市南江戸に在り大寶元年の建立にして崇德院讃岐よりこの地へ行幸の時御車を返し櫻を叡覽ありて「名にしおはゞまたも來て見ん花の春夕影殘す雪の古寺」の御製あり一に古寺とも云ふ堂前の姥櫻は聞ゆる名花にして當時安置の釋迦如來、阿彌陀如來の二像は國寶なり本堂は特別保護建造物となれり。

子規埋髪塔　「瘦一斗へちまの水も間にあはず」の辭世句を殘して明治三十五年九月十九日東京上根岸の寓居に逝きし俳人正岡子規の埋髪塔は松山市末廣町一丁目正宗寺境内に在り、大正十五年本堂に接續して子規堂を建設せられ子規の青年時代の面影を偲ぶに足るものあり、子規名は常規慶應三年九月十七日松山市大字新玉町に生れし人明治文壇の異彩なり。

足立重信の墓　松山市の北方山越來迎寺境内に在り足立重信は加藤嘉明の重臣にして松山築城の際重信川石手川を改修して民生に資したり重信川の名こゝに因す又松山城廓の結構經營に力を致し以て松山市の開市を見るに至らしめたり、重信は寛永二年十一月十七日を以て逝く大正八年十一月正五位を追贈せられ大正十四年同寺境内に頌功記念碑を建設せり。

十六日櫻　松山市の北方山越龍穩寺庭前に在り毎年舊正月十六日に開花するを以て此名あり、其の由來は往昔此里に花鳥風月を友として餘生を樂しむ翁或年病床にあり正月十五日夜吾子吉平を呼びて自分はゝや齡八十黄泉に旅立つことは露程も惜しくはないがたゞ常に愛して居る庭前の櫻花の開期を待たずして逝くことが誠に口惜しい花にも靈あらば心して咲けよと嘆ず吉平其の情に堪へず終夜樹下に井水を被りて身を淨め祈願せしに十六日の拂曉美事に開花したり父子之を眺めて狂喜せんばかりに打喜び翁の病忽ち去りて更に十年の齡を保つことを得たりと傳へらる爾來毎年正月十六日には必ず花を開くな例とし觀客多數なり。



【今治市景

今治市勢

面積戸口—面積〇・四六八方里、世帶八、一五八、人口三七、七一二

重要生産物—綿織物三、六四八、〇九二圓、米二四一、〇五六圓、漁獲物二三五、八五〇圓

諸官衙—今治警察署、今治區裁判所、今治稅務署、今治郵便局、神戸稅關今治支署、今治土木出張所、穀物檢査所今治支所

諸學校—縣立今治中學校、今治高等女學校、組合立越智中學校、市立實業補習學校、小學校四、私立今治實科女學校、今治技藝女學校、今治精華女學校、幼稚園一

名所舊蹟—今治城趾、天保山、姫坂神社、東禪寺

鐵　道—國有鐵道讃豫線今治驛

社會事業—副利事業職業紹介所一、住宅組合二、兒童保護事業今治託兒所

港—今治港（大正十一年二月開港場となる）

本港は天保二年藩主定芝新地港に波除石垣を築造し翌年七月竣工せるものにして其後若干の補修を加ふる所ありたるも規模狹少にして利船の碇繫に便なるのみ汽船に至りては港外に碇泊するの止むなく不便尠からざりしが市に於て築港を計畫し大正九年より防波提の築造、港内浚渫、埋立、機橋の築造を爲し港内面積約三万六千坪浚渫總量約四万五千坪に及び面目一新したり之に要したる工費大正九年度より同十三年度迄の決算額百三十二万圓十四年度十五年度豫算額六十二万圓なり

【宇和島市景】

宇和島市勢

面積戸口—二方里一一二、世帯八、七二三、人口三八、五三四
重要生産物—醤油七二六、三〇八圓、繭三八七、九三〇圓、米八七、一六三圓
諸官衙—宇和支廳、宇和島警察署、宇和島區裁判所、宇和島税務署、宇和島營林署、宇和島郵便局、愛媛縣水産試驗場、松山刑務所宇和島支所、松山測候所宇和島支所、愛媛縣蠶業取締所宇和島支所、穀物檢査所宇和島支所、宇和島土木出張所
諸學校—縣立宇和島中學校、宇和島高等女學校、宇和島實科女學校、市立宇和島商業學校、小學校五、幼稚園二
名所舊蹟—宇和島城、和霊神社、宇和津彦神社、天教園、滑床
鐵　道—私設宇和島鐵道基點（宇和島吉野間）
港—宇和島港
新　聞—南豫時事新聞、宇和島新聞
社會事業—福利事業宇和島市職業紹介所、宇和島公設市場、住宅組合三、兒童保護事業宇和島濟美婦人會（託兒）

宇和島城

宇和島市大字丸之内にあり城郭（城山）高さ海拔三十八間餘周圍七百四十四間地積十町二反四畝二十一歩城郭内一帶に樹木數多密生林相をなし從來枯損木の外伐除をなさず大いに繁茂しつゝあり。

戰國時代板島丸串城と稱し西圓寺宣久城主（高六千六百石）たり、次に家藤監物城代として住す天正十五年戸田勝隆に屬す、文祿三年藤堂高虎（七万石）之を改修して宇和島城（一名鶴島城）と稱し此に移る、次に富田知信城主たり、元和元年伊達秀宗（十万石）居城、寛文年間伊達宗利之を改修す維新後陸軍省の所管なりしを後伊達宗德拂下を受けて所有現今に至る。

天主閣、追手門、上り口の門、城井は完全に存在す其の他の樓櫓塀檜は廢毀したるも其趾は形狀を失はず。

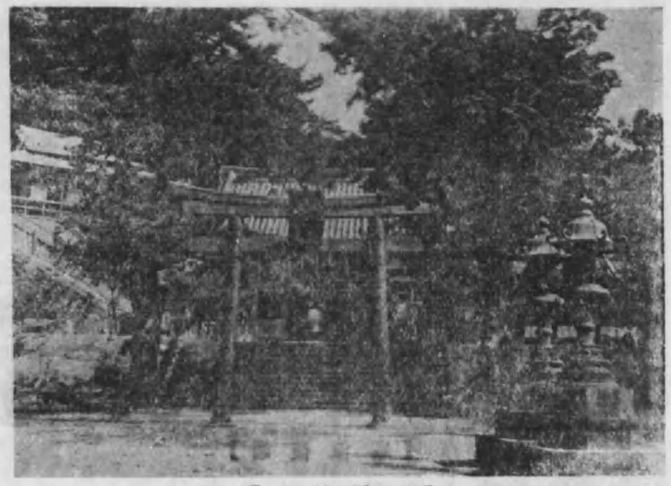
【宇和島城（天主閣）】

雪輪の瀧

宇和島市大字丸穂字野川の滑床山にあり國有林地積千百二十八町八段四畝二歩にして市を距ること三里半一日にして行遊を爲すことを得。

瀑布と云ふよりも奔湍と云ふべく、急斜の石上を奔流すること約三十間幅六七間其の流水點々渦紋を爲して下る其の狀雪爽の輪形をなして降るが如く實に奇觀美景雪輪の稱ある所以なり。其の水上に奔湍六七段あり何れも流花水紋をなし湍末の本流五六歩の右傍に接して銚子の深淵あり、圓形の淵潭にして水色紺碧其の深さ知るへからず探險家も未だ淵中に入りて其の底を極めたるものなく水勢激甚なれば其の深度測量し得ず暫く傍に彳立せんに凄愴の氣に打たる如何に剛膽の者と雖も單獨にて探訪するものなしと云ふ、此の瀑淵の邊樹林蓊鬱として繁茂し秋霜する時は紅葉峽谷を點綴し水色と相映し美觀比なし、秀麗美觀の點に於て縣下此の山水に勝るものあらざる可し。

【雪輪の瀧（下より寫したるもの約全景）】



【和霊神社】

和霊神社

宇和島市大字八幡字鎌江に在り伊達家の忠臣山家公頼を祀る神徳を渇仰する者歳と共に多く遠くは近畿、中國、九州より来りして一ヶ年賽客七十万を下らず。

公頼別の名を清兵衛と稱す伊達政宗の臣なり爲人端正篤醇廉介以て身を持す秀宗宇和島に封せらるゝに際し家老職となし又委するに秀宗の身上の事を以てす其の封土に就くや公輔万勵治を圖る秀宗平生其の膽を貫き密に屈究の思をなし心之を懌はす佞臣又從て之を飽讒し終に讒徒をして蜂幟の中に斬殺せしむ然るに忠魂左右を離れず或は時に出現し或は雖を未然に知らしめ君に奉する終始渝ることなかりしと云ふ。

【道後温泉】

温泉郡勢

面積戸口—面積三九方里八六六六、世帯二九、四〇九、人口一四二、五六六、

重要生産物—米七、五二七、六八二圓、麥二〇三、二九九圓、漁獲物六二一、六九五圓

諸官衙—三津警察署、愛媛縣農事試驗場、廣島遞信局海事部三津濱出張所、

諸學校—愛媛縣女子師範學校、同附屬小學校、同附屬幼稚園、町立北條實科女學校、町村立實業補習學校四九、小學校五二、

名所舊蹟—道後温泉、道後公園、伊佐爾波神社、湯神社、一遍上人誕生地、石手寺、太山寺、岩堰、湧ヶ淵、白猪の滝、唐岬の滝、興居島、鹿島、腰折山、星の岡、三津の朝市、荏原城趾、

鐵道—國有鐵道讃豫線淺海驛、伊豫北條驛、粟井驛、堀江驛、伊豫和氣驛、三津濱驛、私設伊豫鐵道、松山高濱間、松山横河原間、松山森松間、電車道後三津間

港—北條港、堀江港、高濱港、三津濱港

模範村—余土村、正岡村

社會事業—福利事業町立三津濱職業紹介所、住宅組合三、（事務所松山市）兒童保護事業農繁託兒所五

副業—養鶏組合（伊臺村）七島藺加工組合（川上村）竹細工組合（粟井村）麻裏整理組合（久米村）

道後温泉

温泉郡道後湯之町字湯月に在り面積一反八歩源泉は第一第二の二ヶ所より湧出し一晝夜に付約三千二十四石（一時間に付約百二十六石）各浴槽に分湯す。

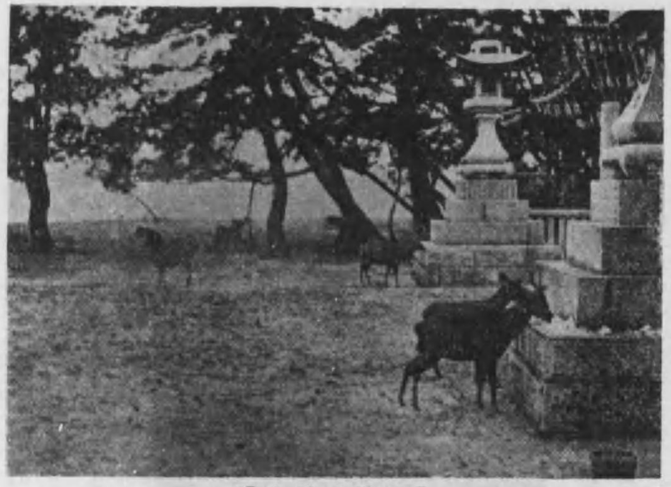
道後温泉は上古大巳貴命少彦名命の二神國土經營の爲普く秋津洲を周歴せられし際に此の地にて偶々大巳貴命病に罹らせ給ひしかば少彦名命直に温泉を汲みて浴せしめし所暫くにして蘇生し給ひ歌を詠して暫時假寢せん哉と宣ひ勢猛く側の石を蹈みて起ち給ひたりと云ふ、今尚其の石温泉の側に在り之を靈の石と稱ふ、如斯上古より靈驗著しき歴史を有し孝靈天皇后細姫、景行天皇后八坂入姫、仲哀天皇氣長足姫神功皇后、舒明天皇后天豐財重日足姫の行幸啓此地に在らせ給ふ、推古天皇の御宇聖德太子此の地に啓せられ太子命して湯の岡に碑を建て、其の事を勒せしむ其の後何時しか碑石の所在不明となりたるも碑文は釋日本紀にあり、其の後地震の變災に依りて温泉の閉塞せしこと久し或時一蠶其の脛を傷ひ朝夕來りて溪水に濯し日を累れて癒ゑ去りしかは觀る人之を奇とし其の所を掘鑿して再び泉源を探究して復舊するを得たり、其の後震災の爲一時温泉の止まりしこと屢ありき、寛永十五年松平隱岐守定行命して砌石浴池を修營し其の上に屋を架し三區域と爲し且つ士庶の分を別ち男女の混浴を禁す現在の建造物此に起源す其後明治五年改築して新に樓を架し浴客の休憩に便し之より入浴料を徵するに至る、同十一年更に浴室の增設を爲し同二十五年再び改造して大に輪奐の美を整へり、同三十六年大正天皇皇太子に在せ給ふ時此の地に行啓車駕を駐めて又新殿（皇族御專用の湯）に臨御せらる大正十一年十一月今上天皇陛下皇太子に在らせ給ふ時此の地に行啓せられたり、本温泉は泉質單純泉にして殆ど透明古より一般人口に炙膾し著名の温泉として入浴の爲此の地に來る者頗る多し。

【寶殿寺（一遍上人延生地）】

一遍上人誕生地

温泉郡道後湯之町字湯月谷寶殿寺境内に在り寶殿寺は元と天臺宗の大地なりしが源平時代衰微し其の別院が河野氏の別邸となる後天臺を改めて時宗となし一遍上人の木像（長三尺八寸國寶、上人の自作とも云ふ）を安置す、寺前の松ヶ枝町は同寺の境内にして往古塔中十二坊の在りし處なり明治九年湯街の遊廓を移して松ヶ枝町と稱へ松ヶ枝の入口に古來より「一遍上人御誕生舊跡奥谷寶殿寺」と題する石標あり。

一遍上人は伊豫の守護職贈正五位河野通信の子、別府七郎左衛門尉通廣の二男延應元年に生れ幼名松壽丸と云ひ幼にして穎悟、緣敎律師に從ひて學び十五歳祝髮して隨緣と改め知眞房と稱す、更に叡山に登り慈眼僧正に師事すること十有二年天臺の奥義を會得す、後太宰府西山派聖達に就て淨土敎を學び其蘊奥を極む、建治元年十二月紀州熊野本宮に參籠すること百日大誓願を起し奮進修行す其の誠心感通し神靈要偈を授けて曰く「六字名號一遍法、十界依正一遍体、萬行離念一遍證人中上々妙好華」と此偈を神勅又は六十万人頌と稱す、此に於て智眞豁然として大悟し名を一遍と改め神勅に從ひて本願念佛を首唱し諸國を遊行し貴賤道俗を勸化す、故に世に遊行上人と稱す正應二年兵庫に巡錫し觀音堂（眞光寺）に於て遷化す、行年五十一化導十六年。



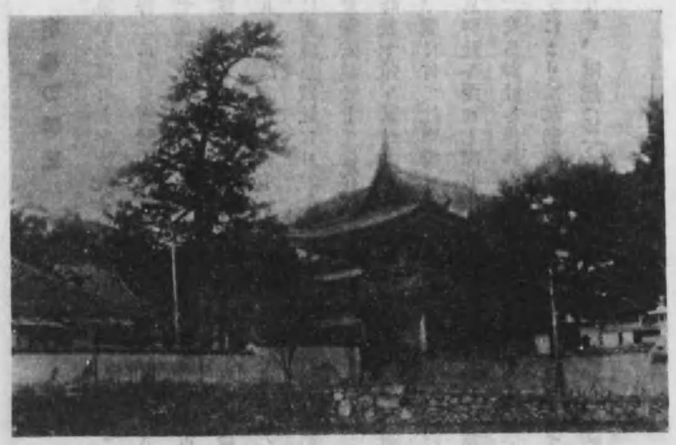
【鹿鳴の神鹿】

鹿鳴の神鹿

鹿鳴は温泉郡北條町大字辻鹿島、北條町の海岸を距ること西方四町の海上にあり面積十九町七反八畝六歩高さ三百八十尺周圍凡そ十五町にして形丸高、島の西半は花崗岩其の東半は安山岩の露出多し南北西の三面は絶壁をなし東側のみ稍々緩斜にして其の麓に鹿島神社を奉祀す島の東北山頂に近く一小平地あるは舊鹿島城趾なり、全島樹木繁茂し大木老木の密林にして魚付保安林として保存せらる。

神鹿は一時五十頭を算せしも近時著しく減少して十數頭棲息するのみ、鹿に付ては準據す可き記錄全く無きも一説に常陸國より鹿島神社を遷せし際共に鹿を放養せりと又松山藩主久松氏軍神、鹿島神社を崇拜し記念の爲に奉納せりとも云ふ、食料の缺乏により又秋期交尾期に於ける爭鬪に原因して鹿は減少せるなり、附近に二子岩の奇岩聳立し風景絶佳四時遊客絶へず。

【太山寺仁王門】



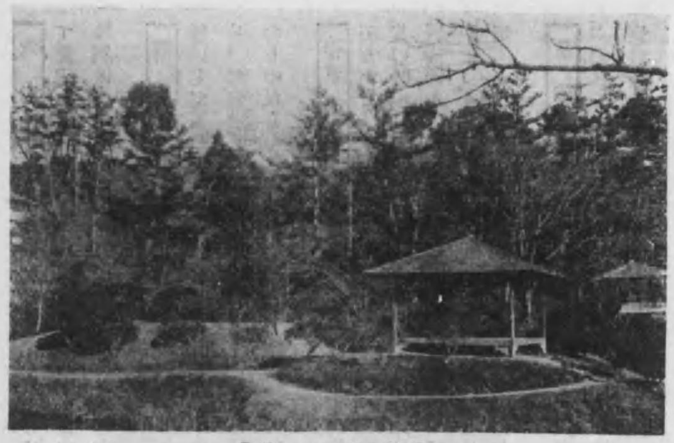
【石手寺伽藍全景】

太山寺　温泉郡和氣村大字太山寺に在り天平十一年僧行基勅を奉して創建す鳥羽天皇のさき七堂伽藍竣成して龍雲山太山寺と稱せり四國靈場五十二番の札所として寺は經ヶ森の中腹樹木鬱蒼たる別天地にあり本堂と仁王門は特別保護建造物にして歴代勅納の佛軀本尊十一面觀音立像外五軀は國寶となれり。

石手寺　温泉郡道後湯之町に在り四國巡拜第五十一番の靈場にして神亀五年聖武天皇勅願所として創營する所にして天平元年三月越智玉澄之を再建すと傳へらる昔は安養寺と稱し法相宗なりしが後石手寺と改め眞言宗に轉せり、本堂、三重塔、仁王門、鐘樓は特別保護建造物に指定せられ梵鐘は國寶に編入せられたり之等の建造物は鎌倉期のものならんと稱すれ共同寺所藏の棟札には文明十二年又鐘銘には建長三年の如くあり。

荏原城阯　温泉郡荏原村大字惠原町字堀前に在り一名平岡城又は棚居城と謂ふ古城にして面積一町四反九畝十五歩あり。伊豫の主權者河野家十八將の首位たる平岡氏の居址にして天正十三年九月豐臣氏の四國征伐の時落城す、其の時の城主を遠江寺通倚とす慶長五年九月平岡善兵衛時の領主加藤嘉明に反し一揆の首謀となりて此城に據れり。戰國時代の地城通稱土居（邸宅）の址にして完全に當時の形狀構造を存する縣下唯一の標本なり、現在は邸址たる平坦地は全部畑となり其内東北隅は杉林となり西北隅は竹藪となり入口の門址は田となれり入口の一部を除く外土封を廻らし土封上は大小樹木雜生す堀は殆ど存し其の八分の一のみ田地となれり。

星の岡　温泉郡石井村に在り松山市の南方約十町にして五つの丘陵あり之を星の岡とす又里人五つヶ森と呼ぶ元弘三年閏二月後醍醐天皇船上山に據り給ひし時南朝の忠臣河野の一族土居通增、得能通綱の兩人義兵を擧げて北條時直の大軍を破りし古戰場なり今頂上に一碑を建て星岡表忠碑と銘せり。



【道後公園】

道後公園　往古伊佐庭岡と稱し推古天皇の朝聖德太子行啓せられ道後温泉の碑を建てさせ給ひしは此丘上ならんと云ふ、建武年間伊豫の豪族河野通盛湯築城を築きてより天正十三年其の滅亡に至るまで其の居城となせり、天正十五年福島正則湯築へ入城せしも幾許もなく國府に移り湯築は永く廢墟となる、然るに慶長七年加藤嘉明勝山城を築くに際し其の礎石等を取り之を移して築城の用に供したるを以て全く廢墟となり久しく荒廢して竹藪なりしを縣が明治十九年拂下を受け之を改修して同二十一年六月本縣公園とし以て現今に至る、園の周圍八町二十間餘面積二万九千八十三坪中央に小丘あり櫻樹最も多く花季の殷賑地方に冠たり、丘頂四望廣豁遠く瀬戸内海の絶景、近く市坊悉く眼下に在り。

三津の朝市　温泉郡三津濱町の三津港頭に在り古來有名なる魚市場にして其の創業は遠く元和二年の昔にありと謂ふ毎朝生魚各地より參集し取引極めて敏活にして群集せる漁夫商人は千を以て數ふべく加ふるに近來果物蔬菜の市も同時に開設せられ其狀實に壯觀を極む。

【腰折山】

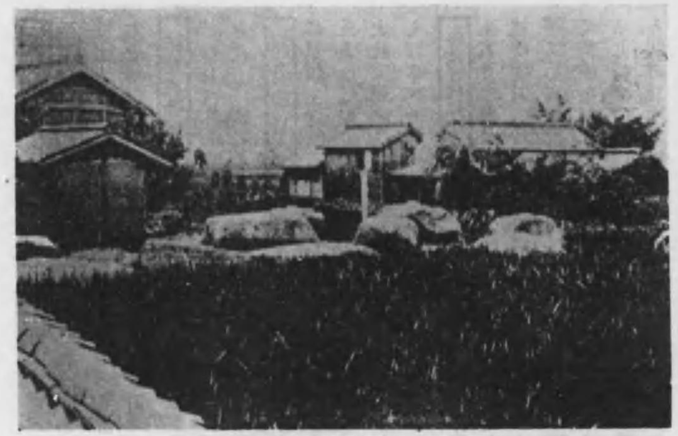
【エヒメアヤメ】

エヒメアヤメ　温泉郡難波村大字下難波字腰折山々林面積約十町歩の所に產す鳶尾科に屬する多年生草本なり、エヒメアヤメは腰折山附近に產する外に九州、支那、朝鮮、滿州にも自生す、小形にして叢生し根莖は細く稍扁平にして瘠形なり葉は線形、鋭尖頭にして其の質薄く禾本科植物の葉に類似し長さ三四寸のもの多く八九寸を越ゆるもの尠なし、されど之を培養する時は著しく伸長する場合多し、葉片には細き縱脈二三條あれ共著しからず三月中旬より蓂合せる葉を地上に出す四月中旬の花時に葉は尙長からず、三月末より四月の始に亘りて三四寸の花莖を抽出し其の頂に一花を着く一枚の苞ありて花を包み花梗は甚だ短く二三分なり花蓋の管狀部は細長にして一寸乃至一寸七八分舷部は紫色にして旗片は爽き花瓜を具ふ、雄蕋の葯は線形を爲し花絲は纖細にして葯よりも長し、雌蕋の冠狀片は薄くして直立し線狀披針形、鈍頭又は鋭頭をなし子房は長楕圓形にして三稜を有し花後圓き蒴を結ぶ、エヒメアヤメは內務大臣より天然紀念物として指定せられたり。

【石手川松並木】

石手川及重信川堤防並木

温泉郡湯山村、道後湯之町、桑原村、石井村、余土村、垣生村、伊豫郡岡田村、松山市に在り、石手川流路岩堰より出合迄と及重信川流路出合以下流末迄三里三町三十間の間保存せらる。石手川の沿革を見るに石手川は源を温泉越智二郡の境上南三方森に發し温泉郡湯の山溪間の諸流を集め道後湯之町大字石手字岩堰に至り（以下舊流路）夫より北に寄り石手寺の前を流れ湯築城の南方を過ぎ持田の中央を一貫し松山市玉川町に入り二番町及八股を通り妙清寺並松山驛邊を經過し田畦の間を西走して温泉郡生石村吉田濱に至りて海に注げり、慶長五年加藤嘉明勝山に築城せんとするに當り石手川の流路變更するこゝとなり老臣足立重信をして岩堰の岩石百三十間の開鑿を行ひ其れより西南に向ひて流路を穿ち市の坪に至り重信川に合流せしむ、依て此處を出合と訓ひ此開鑿流路二里三十間工事施行は慶長六七年の交と想はる、重信川は元浮穴村大字高井より南に偏方し丘陵に沿ふて流れ西南に向て斜走し松前の南海に注ぎしが水害絶へざるに準り慶長元年前後に之を變更筆鑿し高井以下垣生村に至て海に入る迄殆むと直線となす此流路三里なり、出合より流末迄一里二町の長さを有す、石手川流路變更により松山市は作られ松山城は築かれ多くの田園は開かれ灌漑は至便となり水害は減少す、然れ共今日蜿蜒として長龍の横たわるが如き堤塘樹林鬱蒼として繁茂し氣候を調節し風土を保ち絶好の美觀恰も繪畫の如く常に文人墨客の雅懷に觸れ或は吟詠に上り繪畫となり地方人共樂の場所として四時人の絶ゆることなきは之自然の美を物語るものなり、並木の一部は石手川公園として松山市の管理に屬す。



【國分寺塔礎石】

越智郡勢

面積戸口—二八方里六五九、世帶二六、六八〇、人口一二二、六五五

重要生産物—米四、三九五、四四〇圓、綿織物一、五五八、〇二五圓、酒八八七、四〇七圓

諸學校—縣立弓削商船學校、町立菊間實科女學校、町村立實業補習學校三一、小學校四八、私立伊豫教員養成所、越智裁縫女學校、小學校一

名所舊蹟—大山祇神社、御陵墓傳說地、綱敷天滿神社、脇屋義助の墓、國分寺の塔礎、法華尼寺塔礎、波止濱公園、阿方の貝塚、四坂島製錬所

鐵道—國有鐵道讃豫線伊豫櫻井驛、伊豫富田驛、波止濱驛、伊豫大井驛、伊豫亀岡驛、菊間驛

港—波止濱港、菊間港

社會事業—福利事業住宅組合二、兒童保護事業波止濱幼稚保育園、農繁託兒所一八

副業—薄荷組合（東伯方村）蘭栽培加工組合（岡山村）

國分寺の塔礎　越智郡櫻井町大字國分寺字殿に在り地積二十七坪國分寺の塔礎は大正十年三月史蹟として內務大臣より指定せらる。聖武天皇天平十三年各州に勅して鎭護國家道場を置き、國分寺と稱せしもの、一にして開基は本性上人なり當時は四國靈場四十九番の札所、古の七重塔は同寺より東二町許りの所に在りしものと見る田の中に大さ六七尺四方の礎石數多殘れり。國分寺創設當時の遺瓦と認むるもの其の附近に埋沒せらる。

法華尼寺塔礎　越智郡櫻井町大字櫻井字地中に在りて地積二十八坪なり。聖武天皇天平十年各州に勅して國分尼寺を建てしめたるもの法華尼寺なり、塔の礎石と認むべき加工せる花崗岩雜草繁蔓せる中に點々殘存せり、其の東南方近くに柿の木自生し其の幹根に土石を堆積する中に布目瓦の破片多數散在せるを見る。

阿方の貝塚　越智郡乃万村大字阿方字池尻に在りて其地積九反一畝二十九歩海邊を距ること約二十三四町一帶に貝殼、土器、石器を藏す、今田と畑となり其の中間に里道あり田畑表面に貝殼及貝塚土器破片一帶に散布せるにより此地を從來貝殼田と稱す之を發掘すれは土器、石器、貝器、骨器、鳥獸器、魚の骨多く出づ、此の地を十餘町にして式內大社野間神社（縣社）あり近邊に古墳多々あるより察するに先史時代より有史時代にかけて文化の進歩せし地方なりしなるべし。

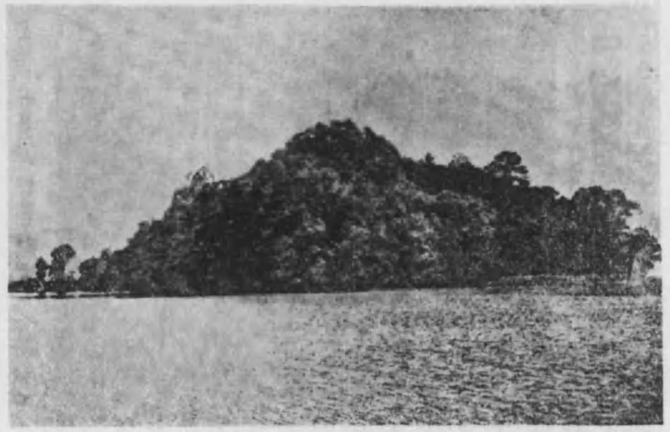
脇屋義助の墓　越智郡櫻井町大字國分寺字谷の口に在り地積四畝九歩にして元の墓石は十四個の五輪塔なり其の墓石と思考せらるる十四個の五輪塔は破壞して僅に面影を止むるのみ寛文九年再建のものは碑高三尺二寸周圍五尺圓柱狀礎石二尺五寸臺石垣方一丈高さ二尺五寸なり、義助は通稱次郎新田義貞の弟なり、義貞と共に北條高時を亡ぼし尋て足利尊氏と戰ひ功に依りて右衛門佐を拜し昇殿を聽さる湊川の敗戰後官軍振はず義助惡戰苦鬪生死の間を出沒して著節を守る、其の後功によりて刑部卿を拜す、興國三年四月伊豫の人兵を起し統帥を奏請するや義助四國の總大將として今治浦に抵り國府に居る之より官軍威大に振ひしが五月十一日病みて卒す諸軍沮喪し四國相尋て沒落するに至る明治三十六年八月特旨を以て從三位を贈らる。

【大山祇神社々頭】

【大山祇神社國寶館】

【脇屋義助之墓】

大山祇神社　越智郡宮浦村に在り國幣大社にして大山津見命を鎭齊す延喜式內名神大社にして日本總鎭守と唱へ上皇室の御尊崇篤く下武門武將の崇敬極めて深厚なるものあり境內の森嚴莊重なる他に多くの例を見ず元享二年兵燹に罹り天授四年造營せられ現今の本殿卽ち是にして特別保護建造物なり、本社は縣內第一位の神社にして所藏の寶物夥からず特に國寶に指定せられたるもの百十一點內兵器類八十七點其の甲冑は全國に於ける總點數の約七割を占む大正十五年六月國寶館新設せらる。



【福岡八幡の社叢】

面積戸口—面積一九方里二九五、世帯九、六八八、人口四八、六八五

重要生産物—米三、二二〇、八〇九四、麥二三、一一〇四、

諸官衙—壬生川警察署、穀物檢査所丹原支所、種畜場

諸學校—縣立周桑高等女學校、組合立小松實科女學校、町村立實業補習學一七、小學校二二

名所舊蹟—大舘氏明の墓、興隆寺

鐵道—國有鐵道讃豫線伊豫小松驛、壬生川驛、伊豫三芳驛

港—壬生川港

社會事業—兒童保護事業農繁託兒所三

副業—稻藁加工組合（德田村）同（周布村）繩再製組合（吉井村）疊表出荷組合（吉井村）

福岡八幡神社の社叢

周桑郡丹原町大字今井字池ヶ脇にあり神社境内及山林合して面積八段八畝六歩を占め社叢は海拔約六十米の丘陵にして全く平野中に聳蒼として孤在す頂上に小平地あり社殿を構へて福岡八幡大神を奉祀し其の西北麓には生木地藏尊を奉安す、本社叢は森林學上暖帶の固有要素を有し暖帶森林の代表として學術上の考證を得ること多大なり又大に交通の便を得たるを以て學徒研究者の徒勞を省くこと多し。

大舘氏明之墓

周桑郡楠河村大字永納山の内世田山城墟栴檀寺の境内に在り地積四反二畝二十八歩にして五輪塔一基花崗岩高さ二尺一寸幅六寸厚五寸天保八年再建大舘氏明之墓碑一基殉死者十七人の墓碑銘一基あり、墓碑銘に大舘伊豫守源氏明朝臣之墓背側に墓誌を刻するは天保八年三月氏明十七代孫大舘謙堂氏晴識誌殉死者の碑に大舘氏明に殉死せし諸士十七士の名と銘を刻するは天保八年三月四條臣馬彦銘併錄せるなり五輪塔は國分寺の脇屋義助の墓のものと同形同時代なり、大舘左馬之助氏明は建武年間朝命を以て伊豫守に任じ當國に下り世田山城に據り勤王の兵を催ふし阿讃を徇へんとす興國三年脇屋義助病歿するや足利の將細川頼春來り攻む八月二十四日より包圍せられ城中糧竭き力耗ゐ能く拒く能はず九月三日拂曉氏明手兵十七騎を提げ城を出て、突擊し大に賊兵を郤け還て一同割腹して死す大正四年十一月十日特旨を以て正四位を追贈せらる。

【大舘氏明之塔】

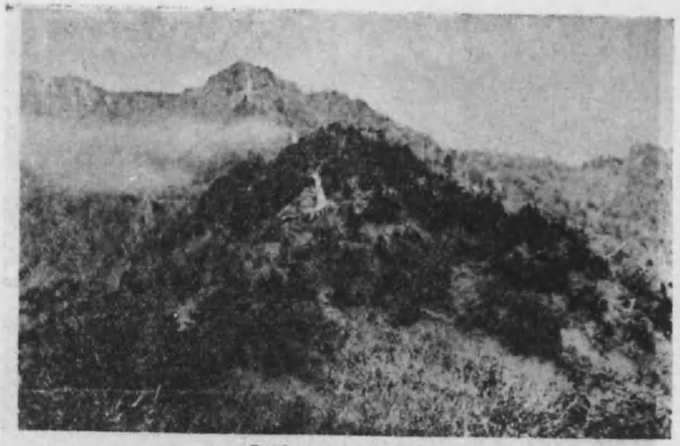
【興隆寺三重之塔】

興隆寺

周桑郡德田村大字古田の西山に在り佛法山興隆寺と稱し眞言宗醍醐派に屬す空鉢上人の開基にして本尊は行基菩薩の作と傳ふ延曆年間報恩大師伽藍を造營し後文治三年源賴朝本堂を建造せり現在の本堂之にして特別保護建造物たり鐘樓の銅鐘は弘安九年の鑄造にして國寶たり境內幽邃にして境地を流るゝ西山川の溪谷に架せる御由流宜橋は昔弘法大師來錫し

御佛の法の御山の法の水
流れも清き御由流宜の橋

と詠せりと傳へ其の名あり地方の古刹として四時賽者絶にず。



【石槌山全景】

新居郡勢

面積戸口—面積二五方里〇〇六、世帶一八、一九三、人口八七、八二三

重要生產物—米三、四四四、八六一圓、捺染物四七五、三〇〇圓、漁獲物三二六、四一九圓

諸官衙—西條警察署、角野警察署、新居稅務署、西條營林署、西條區裁判所、松山刑務所西條支所、西條土木出張所、鹽業取締所西條支所、穀物檢査所西條支所

諸學校—縣立西條中學校、西條高等女學校、西條農業學校、新居農學校、町立新居濱實科高等女學校、町村立實業補習學校一八小學校三〇、私立小學校二

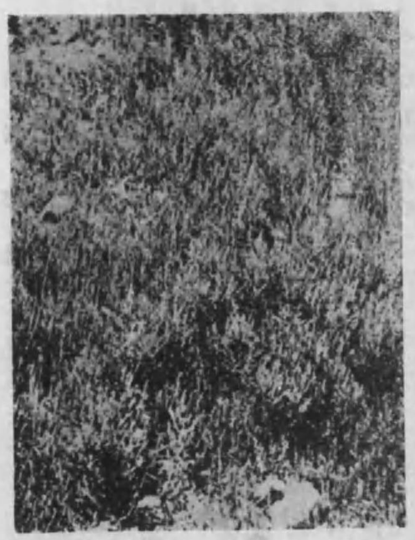
名所舊蹟—石槌神社、伊曾乃神社、武丈の櫻、別子銅山

鐵　道—國有鐵道讃豫線多喜濱驛、新居濱驛、中萩驛、伊豫西條驛

港—御代島港、西條港

社會事業—福利事業住宅組合一、兒童保護事業農繁託兒所五

【伊曾乃神社】



【あつけしさう】

【石槌善者ヶ森】

石槌神社　新居郡大保木村に在り、海拔六千五百三十七尺四國最高の石槌山の絶頂に祭る、祭神は石土毘古命にして役行者小角始めて瓶ヶ森の山頂に神佛混淆の一社を建て石槌藏王權現と號せしが維新の後神とし祭り石槌神社と改稱す明治五年縣社に列す毎年七八月の交白衣の行者貝の音を立て金剛杖を携へて登山す其の數毎年數万に及び一大偉觀を呈す。

伊曾乃神社　新居郡神戸村大字中野に在り天照大神を祭る延喜式内名神大社にして成務天皇の御鎭齊に係り御由緒最も正しく天平神護二年以來屢々御神位を進められ現今正一位なり崇德天皇讃岐より伊豫の湯に潛幸の時天王に行宮を作り一七日御參拜あり其の時宸筆の額を二の鳥居に掛げさせ給ひしが今も尙ほ存せり天正の亂に社殿兵火にかゝりしを元錄年間再建す境内は幽邃森嚴にして神威赫灼地方民の崇敬極めて厚し。

あつけしさう　新居郡多喜濱村大字黑島字三喜澤の堤塘約二百間池沼約十歩の處に生育す三喜濱鹽田の一部を舊西條藩主松平家が竣成せしは慶應三年十二月三日なり「あつけしさう」の生せしは素より其後に屬すべし大正元年八月岡本道良氏初て之を發見す、黍料に屬する一年生草本にして高さ數寸乃至一尺許葉なし綠色の莖は節多く多肉質にして棒狀をなし多くの枝梗を生ず鹽地にのみ蔟生するものなり、あつけしさう屬の植物は其の形態の奇拔なるのみならず形態學解剖學上種々面白き點あるにより植物學實驗室内には殆むと缺ぐべからざるもの、一にして歐洲に留學するものは實驗用とするのみにても毎年之を手にせざるものなしと云ふ、世界に於ける此屬の植物には數種あり其の產地は亞細亞の北部西部印度、歐州、亞弗利加の北部、北米等なり我國に於て最初發見されたるは北海道釧路國厚岸(アツケシ)の牡蠣島にして明治二十四年のことなり發見者は槌山淸利氏とす、理學博士宮部金吾氏其の產地に因みて和名を「あつけしさう」と附せり我國の分布は二箇所にして相距つること甚だ遠し。

きんもくせい

新居郡飯岡村字野口面積一畝歩の所に在り樹高四十八尺周圍十一尺（地上五尺にて以下同）根際より四枝を生ず其の中央に位するもの最小にして周圍三尺五寸之を圍む三枝は周圍五尺、四尺五寸、四尺二寸に達す實に稀有の老樹と云ふべし數年前外圍の一枝風害を被りしより上枝を切斷し僅に幹部の舊態を枯存す他の三枝何れも樹勢旺盛にして枝葉よく繁茂せり就中二枝は老樹の常として雨露の侵害を受け空洞を内部に生するも發育を損するものにあらず花時の佳香は馥郁として遠く四圍に薫す、王至森寺は豫讃國道を南に入ること約四町丘陵の麓にあり後に樹林を有し眺望頗る佳なり、きんもくせいは境内の正門を入らすして右に折るる道路中に生せり其の南側は新に改築せられたる高き石垣に接近す、元來此の樹木原産地は支那にして我國に野生するものにあらず此の樹に付年代等未だ詳ならず。

【きんもくせい】

御塔石（オトウフイシ）天柱石（ヌ）

新居郡大保木村大字西野川山地積二百坪に在り、周桑郡方面より石槌登山道を踏破し一の鎖附近（海拔千七百米）より東側の谿谷を窺へば擂鉢狀をなせる谷底近くに一大岩石の屹立せるを見る其の傍には別に岩石を伴はす之御塔石にして其の周圍に數坪の平地を設け茲に小屋を構へ道者所謂山伏の居住せしことありと云ふ、此の石、寺塔の天空に聳ゆるが如きを以て古來此名あり、此の岩石は石槌山と同一なる粒狀安山岩にて一側面より見れば二三間の石柱を横へつゝ累々と積みたるが如し之安山岩等に於て常に見る所謂柱狀の節理なり更に廻りて其の他側に出づれば石柱の端面（小口）あらはれ凹凸極めて著し古來傳ふ處の高さ二十五丈八尺周圍二十二間は決して誇大にあらざるなり實に鬼工神造と云ふ可く天柱石、天の御柱と美名を貪るは文士の小技なり。

【御塔石】

【仙龍寺全景】

宇摩郡勢

面積戸口—面積三二方里二九三、世帶一四、七三二、人口七〇、二五三

重要生産物—米二、一七七、八九三圓、紙三、〇七〇、七二二圓

諸官衙—三島警察署、穀物檢査所三島支所

諸學校—縣立三島中學校、宇摩高等女學校、宇摩實業學校、町村立實業補習學校二五、小學校三七、私立幼稚園一

名所舊蹟—御陵墓參考地、仙龍寺、大柏

鐵　道—國有鐵道讃豫線川之江驛、伊豫三島驛、伊豫土居驛

港—川之江港、三島港

社會事業—救濟事業、上分町愛生慈善會

副　業—稻藁加工組合三、（關川村、川滝村、妻鳥村）疊表製織組合（中曾根村）

【ビヤクシン】

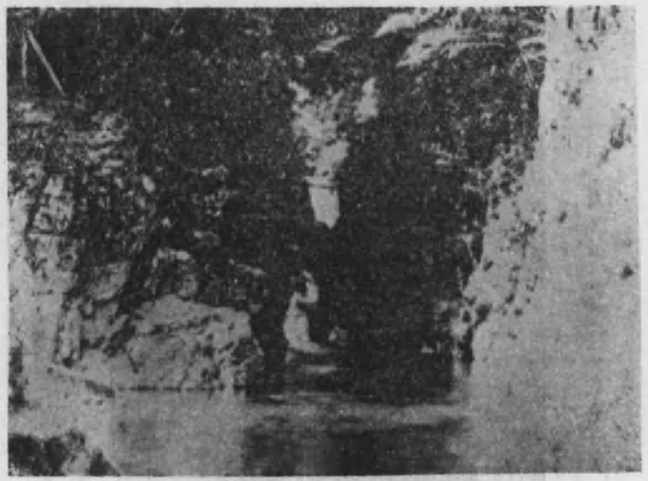
仙龍寺　宇摩郡新立村銅山川の左岸に沿ひ東西北の三面山を以て圍まれ、老杉、古木蒼鬱として晝尚暗く奇巖、怪石屹立重疊せる一大岩壁の下に在りて飛瀑輕々四時ともに滿山の風光最も秀麗にして幽邃閑雅の仙境なり弘法大師前後二同登錫修法後弘仁五年大師四十二歳の時自ら其の像を刻して此の地に安置したりと、現今安置する本尊是なり寺の西北約四丁にして清瀧あり懸涯百餘尺四時水の絶ゆることなく壯觀を極む。

ビヤクシン　宇摩郡松柏村大字下柏字柏槙に在り本樹の覆へる面積二畝十五歩實に巨大なる老樹にして沃野を通ずる道路の突叉點に獨在す而して樹幹は縱裂せる赤褐色の樹皮にて被はれ殆むど圓柱狀をなし多少の傾斜を有しつゝ直立す地上十三尺に至りて漸く枝を分つを以て主幹は頗る明瞭に暴露せらる其の周圍（地上より五尺にて）を計るに二十四尺七寸、高さ四十五尺樹冠粗半球狀を呈し枝葉克く繁茂せる本邦稀有の大樹なり元來本樹の成長は極めて遲緩なるより觀て其の樹齡の多きこと驚くへし本樹の東北の一側に小空洞あり茲に小き地藏尊像を安置せしは天明三年の頃にして巨樹に佛像を安置奉祀するは樹齡を今日にあらしめん爲なり、大正十三年十二月天然記念物として内務大臣より指定せらる。

【大杉】

大杉　宇摩郡寒川村郷社石戸八幡神社の境内に在り樹高約三十間初枝迄高さ一丈七尺目通廻り參丈根元廻り三丈三尺にして枝張周圍各一丈八尺に及ぶ樹勢尚旺盛なるも明治三十五年頃は梢端四五の枝枯損せるのみなりしに最近には煙害の爲なるや其の枯損を增せり、通俗に高野杉と稱し上古氏神寒川神社鎭座當時のものたるや由緒年代より考察するに一千百餘年を經過せる老樹なり。

御陵墓參考地　宇摩郡妻鳥村に在り允恭天皇第一皇子木梨輕太子南國御下降の際當地の海岸に漂着し給ひ後此地に幾去遊ばされたる爲同村東宮山に葬り奉りたりと傳ふ明治二十九年七月三十日御陵墓參考地となる。



【關　門】

上浮穴郡勢

面積戸口—面積五一方里八四〇、世帯八、五七四、人口三八、二三七

重要生産物—米九四四、九七一圓、木材一八六、三二九圓

諸官衙—久万警察署、久万營林署、穀物檢査所久万支所、蠶業取締所久万支所

諸學校—町村立實業補習學校二六、小學校二七

名所舊蹟—面河溪、岩屋寺、御三戸

社會事業—救濟事業、久万内荒孫備組合

副　業—椎茸栽培組合（柳谷村）共同製茶組合二（柳谷村弘形村）山茶栽培組合（柳谷村）

【虎ヶ瀧】

面　河

上浮穴郡柚川村大字大味川に在り面積四千三百町歩に及ぶ源を四國背嶺山脈の盟主石槌山（海拔六千五百餘尺）より發する面河川（仁淀の上流）の上流にして延長約三里に渉る地域を總稱して面河と呼ぶ、四周は山を以て圍まれ僅に面河の清流あるのみ両岸には幾千尺の斷崖絶壁隨所に屹立し直下幾百尺の瀑布は其の間に懸る其の全溪谷には千古未だ曾て斧鉞の入らざる老樹鬱蒼として天に聳ゑ晝猶闇し清冽凍るか如き面河の清流は淙々として其の間を流れ淀みては底の知れぬ碧潭となり激しては白瀨と化し轟々雷の如し、溪中勝ならざるはなけれ共其の代表的のものに關門、亀腹、錦木瀧、鉢卷淵、櫃の底の深谷、布引瀧、蓬萊谷、熊淵、虎ヶ瀧、虎ヶ淵、霧迫瀧、烏帽子岳、曲れ瀧、御來光瀧、天狗ヶ嶽、才頂上、等有名なり、勝地は松山を距る十五里餘海拔は關門にて千五百尺に餘る高地深山にして之に通ずる道路なく一般に知られざりしを明治三十八年始めて柚川村小學校長たりし石丸富太郎始めて社會的に發表紹介せしにより今日にては一ヶ年探勝者二万を算するに至る、勝地は久万町より仕七川村大字東川迄約四里半は道路の改修成りて自動車通し柚川村内約半里の車道は竣工せしも他は漸次改修中に屬し關門迄自動車の通ずるも亦遠からざるべし。

【岩屋寺全景】

【大公孫樹】

岩屋寺

仕七川村大字七島に在り延仁六年空海の開基と稱せらる、海岸山岩屋寺と號す此地深山幽谷にして岩石突兀たる巖峰雲表に聳ゆ斷崖絶壁の間處々に岩洞を作り奇岩怪石多し、巖壁の特に大なるものを蘆原岳、不捨嶽、白山、鈴嶽、高祖岳、古岩・龍女峰等と稱す此の外尚奇巖多く胎内潛りには十六階、二十一階の梯子を架す、又奥の院は洞窟深く觀音像を藏むるも窟中暗黑にして之を拜するもの松明を照す、古岩屋亦奇勝の地にして岩柱二三雲を凌ぎて聳立するなど實に蜂下の名勝地たり、四國靈場四十五番の札所なり。

中川の大公孫樹

上浮穴郡參川村大字中川字鎌土の村社三島神社境内入口西南隅に在り樹木保護區域は三十坪にして樹幹根廻四十五尺第一分枝點南側地上五尺北側四尺此の分枝點の廻四十二尺高さ百八尺枝張周圍各三十五尺のもの一本なり樹齡約千年と傳へ樹勢尚旺盛にして樹幹所々に乳枝を生し奇形を爲す、地方遠近の者此の乳枝を迷信し其の神社を乳の神として信仰するもの北海道、九州、中國、四國に亘り賽客頗る多し。

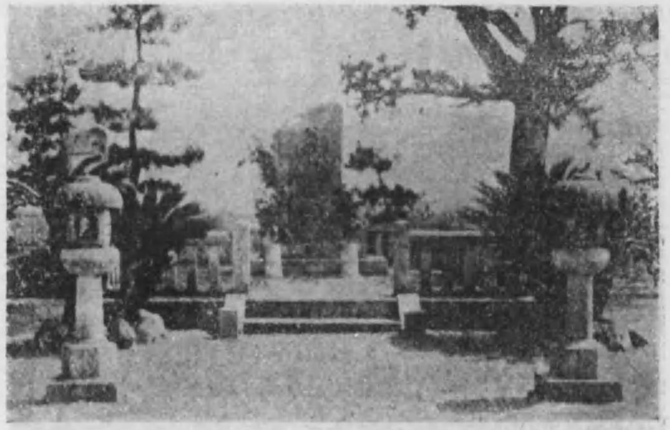
羅漢窟

岩洞は浮穴村小屋の南方山腹にありて深さ四町四十八間支洞一丁三十間あり、洞内鐘乳森然として倒に垂る。

【いはやしだ】

いはやしだ

上浮穴郡仕七川村大字七鳥字岩屋山に在り面積約三十七町八反に生育する、羊齒植物水龍骨科さらのをしだ亞科へらしだ屬にして根は鬚根にして其の數多し短かき根莖を有し直立又は斜立す葉は一尺五寸乃至二尺二三寸にして葉柄は圓く其の前面に溝を有し長さ一尺許なり一回羽狀に分裂し小葉片は對生又は互生す質軟かく尖端鋭く鎌狀を呈す下部は截形又は截狀鈍形にして微小なる波狀の邊緣なり幅五分乃至一寸長さ一寸乃至五寸子囊群は八月頃より小葉片の中央主脉より邊緣に向て羽狀に多數並列し圓筒形にして少しく彎曲し兩端は鈍圓なり初めは帶黃色を呈すれども後には褐色に變ず包被は薄く背部に於て不正破綻をなす、本種は廣く熱帶地方に分布し印度、支那、南支、太平洋諸島、馬來群島に產す本邦にては岩屋寺の外上浮穴郡小田深山、肥後、近畿に產し岩屋寺にありては「セリ割谷」の下部平水谷と呼ぶ谷の下方に生ず故奧平幹一の發見にかゝるものなり、この地方にはいはやしだの珍種の外にいよくじやく、いはたばこ、いはぎり草等あり。



【義農作兵衛記念碑】

伊豫郡勢

面積戸口—面積二一方里七七一、世帶一三、八〇〇、人口六四、七〇七

重要生產物—米三、一二六、五〇二圓、陶磁器五七〇、六〇六圓

諸官衙—郡中警察署、穀物檢查所郡中支所

諸學校—縣立伊豫實業學校、村立祇部工業學校、町村立實業補習學校二二、小學校二四

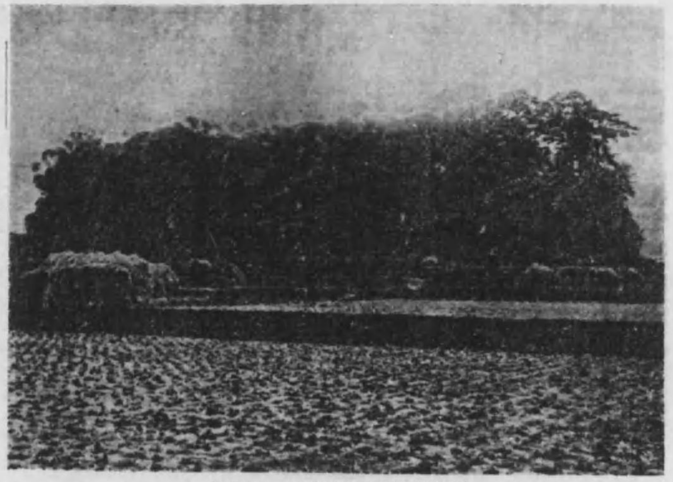
名所舊蹟—義農作兵衛の墓、大森彥七の史蹟、八幡の森

鐵　道—私設伊豫鐵道、松山郡中間

港—郡中港

社會事業—兒童保護事業郡中託兒所

副　業—養鷄組合（祇部村）疊表製織組合（南伊豫村）



【伊豫岡八幡神社全景】

義農作兵衛之墓

伊豫郡松前町大字筒井字義農に在り墓碑は安永五年六月藩廳之を建てしものなり、記念碑二基の中一は大正元年十二月郡村有志の寄附により建設し他の一は平田子爵碑文入のものにして大正四年十二月建設す又明治十四年七月義農神社を勸成す同十八年海嘯のため破壞す同四十年五月村社八幡神社に合祀す。

享保十七年大饑饉に際し農夫作兵衛は一苞の麥稈を存し敢て之を食せず其の父及子二人を餓死せしめ已も麥苞を枕して餓死（四十六歳）し農の大義を明かにせり。

八幡の森

伊豫郡々中村大字上吾川字宮の前に在る古墳面積は一町七反七畝歩にして伊豫岡八幡神社の境内なり社地内に社殿、本殿、幣殿、神門什器納所及末社小祠等十二あり古墳は社殿の周圍に七個あり内一個半壞す而して古墳七個の内二個は完全に保存せられ原形を變せず一個半壞のもの、外何れも發掘の跡なし境内は樹木繁茂して美觀を呈す、境内末社五穀神社の中に嚴靈八森神社と稱するものあり古墳を祭りたるものなるべし八幡神社は後世之に遷祀したるなり。

豫章記に伊豫皇子御來處を伊豫郡神崎庄と號し今鑒宮と申し親王宮と崇奉す卽當家鑒祖の宗廟神也件の宮の南十八町の山腰に皇子御陵あり臣下多く死して隨へり寶玉を陵とす天子の廟に似たり仍て今岡又は今岡王子と號す云々とあり伊豫皇子は速後上命なるべし伊豫岡と今岡又は今鑒宮と嚴靈と相似たり、神崎の南十七八町の山腹南伊豫村大字上野字今岡に今岡宮あり形勝の地にして頂上に一大古墳の趾あり山腹より山麓にも多數の古墳の跡あり發掘破壞せられれども今尙土器の破片を出し又今岡の少しく西に上野字鬼渡護の古墳あり數多の金銀環切子玉劍及鞆及の祝部玉類を出せり故に伊豫皇子の御陵と云ふもの何れか速斷すべからず。

喜多郡勢

面積戸口—面積三五方里〇三四、　世帶一八、三七八、　人口八三、二五八

重要生産物—繭二、五八一、三四九圓　米一、七九六、一六七圓　漁獲物二九三、四三八圓

諸官衙—大洲警察署、内子警察署、大洲稅務署、大洲區裁判所、大洲土木出張所、蠶業取締所大洲支所、穀物檢査所大洲支所、蠶業試驗場

諸學校—縣立大洲中學校、大洲高等女學校、町立内子實科女學校、組合立高等實業補習學校一、町村立實業補習學校四六小學校四四、幼稚園一

名所舊蹟—大洲城趾、臥龍、中江藤樹邸趾、出石寺

鐵　道—私設愛媛鐵道長濱、内子間

港—長濱港

社會事業—福利事業、大洲村職業紹介所、長濱町營質庫、住宅組合二、兒童保護事業大洲保育園、農繁託兒所四、

副　業—養鷄組合市場設置（大洲村）藁繩加工組合（白瀧村）杞柳加工組合（大洲村）農民美術生産組合（大川村）

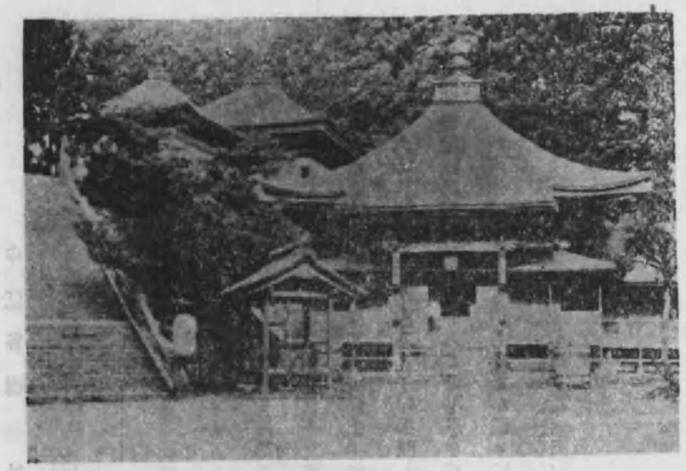
【中江藤樹邸】

中江藤樹邸趾

喜多郡大洲町大字大洲面積二百九十八坪縣立大洲中學校の敷地内にあり邸趾の一部を庭園となし明治四十三年十二月同校々有會は其の中央に記念碑を建て大正十一年十二月先生愛用の井戸を整理して「中江の水」と稱し亦記念碑を建つ、斯くして其の遺風を偲び且該校訓育の資料とせり。

藤樹先生大洲藩主加藤公に奉仕すること十五ヶ年（十三歲より二十七歲迄）大洲に住し此地に居住せられ其の堀井戸の水は飲用に供せられしと云ふ、當時大洲の俗戰國の氣風を承け武を尙び文を卑みければ先生晝は武を講し夜は書を讀み文武共に造指する處多し齡十四歲にして祖母を喪ひ十五にして祖父を喪ふ祖父吉長に先生九歲の時養はれて嗣子となりし爲食祿百石を繼ぎて泰興侯に奉仕す年十八の時父の訃を得て慟哭すること甚し近江に歸へりて葬らんとせしも果さず尙大洲に留りて學を勵み朱子の學派を奉し二十歲以後は四書を愛讀講究し聖人の格式態度盡く實踐躬行す二十五歲の時近江に歸へりしことあり母を思ひて已まず致仕を請ふこと數回なるも許されず遂に意を決して官を棄て去る其の現在の俸米は藏めて封印し食祿を濫りにせざるの意を致し現金を擧けて諸の負債を償ひ終に錢三百を餘せしも其二百は家僕に付與し錢一百文を携へて近江に歸へる實に寛永十一年先生二十七歲の時なり、後世其の德を仰ぐもの今に至りて尙生に事ふる如きものあり。

【あこう】



【出石寺護摩堂】

出石寺

喜多郡大和村矢野の金山の絶頂に在り人皇四十四代元正天皇の御宇養老二年六月十七日の曉より此山震動すること數日村民其の由を量り知ることなく只異香暗に薫し光明耀灼たり時に一人の獵師鹿を追て此山に入る然るに地裂け巖開けて千手觀音、地藏尊の二菩薩の靈像自然に湧出し給ふを拜し身心恍惚として爲す所を知らず忽ち發心して弓矢を捨て妻子を離れ剃髮染衣して名を道敎と改め本尊の禮拜供養怠ることなく遂に草堂を建て雲峯山出石寺と號すこれ世に「ハエヌケ」の尊像と稱する所以なり、其の後大同二年弘法大師四國巡錫の砌此山に登り山號を金山と改め自ら本尊並不動、愛染、日光、月光の脇立を彫刻して修行せらしと謂ふ當寺の銅鐘は國寶なり或は藤堂高虎の朝鮮役分捕品の奉納とも或は八幡船の奉納とも云ふ。

西宇和郡勢

面積戸口—面積一六方里四三三、世帶二一、二八七、人口九七、四四八

重要生產物—繭二、七五八、三二三圓、米七七一、〇四四圓、漁獲物七二六、七三九圓

諸官衙—八幡濱警察署、八幡濱稅務署、八幡濱區裁判所、鹽業取締所八幡濱支所、穀物檢査所八幡濱支所

諸學校—縣立八幡濱南業學校、八幡濱高等女學校、町村立實業補習學校三五、小學校四七、私立山下高等女學校、實踐農業學校小學校一

名所舊蹟—佐田岬

港—八幡濱港、川之石港、三瓶港

新聞—八幡濱新聞

社會事業—福利事業八幡濱町職業紹介所、川之石職業紹介所、住宅組合一、兒童保護事業八幡濱託兒所、川之石愛兒園、農繁託兒所一

副業—屑繭加工組合（伊方村）養鶏組合（宮內村）

赤榕樹（あこうじゅ）

西宇和郡三崎村大字三崎字かわのもと及シミズに在り面積二畝二十三歩の所に生育旺なり、赤榕樹は大正十年三月天然記念物として内務大臣より指定されたり。

樹高六間廻一丈一本、樹高五間廻九尺一本、樹高八間廻一丈二尺一本、樹高四間廻五尺一本、樹高八間廻一丈五尺一本、樹高三間廻八尺一本、樹高二間三尺廻八尺五寸一本なり。

佐田岬

佐田岬は本縣に於ける岬角中最も長く、西宇和郡三崎村外五ヶ村を包擁し蜿蜒として海面に突出すること實に十二里に及び豐後海峽を距て、大分縣佐賀關と相對す海上僅に七里に過ぎず、三机村壊成と三机とに跨り三崎半島を横斷せんとする壊成の堀切あり慶長年間板島城主富田信濃守之が攻擊を企てたれども事志と違ひて成らす却て國除の一因となれりと云ひ傳ふ、佐田岬の端部に近く三崎村あり天然記念物として内務大臣指定の赤榕樹あり。

【松葉城趾】

東宇和郡勢

面積戸口—面積二九方里六〇〇、世帯一三、一四五、人口五六、八六八

産業生産物—繭三、六一一、一八五圓、米二、三一八、三三七圓

諸官衙—卯之町警察署、野村警察署、卯之町税務署、盤業取締所宇和支所、穀物檢査所卯之町支所

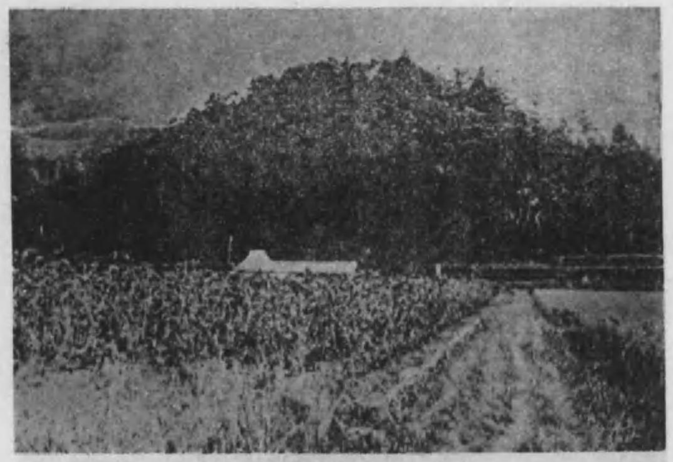
諸學校—縣立宇和農業學校、東宇和高等女學校、組合立實業補習學校一、町村立實業補習學校一九、町村立小衛校三五、幼稚園三

名所舊蹟—小森の甕塚、松葉城趾

港—俵津港

社會事業—福利事業住宅組合二、兒童保護事業農繁託兒所六

副業—共同製茶組合（高川村）



【小森の甕塚近望の景】

松葉城址

東宇和郡宇和町大字下松葉に在り海拔四百四十七米往古岩瀬城と稱し四圍寺累代盌に居り威を南海に振ひし處山頂平垣にして數千を容るべく又前面に宇和盆地を瞰下し頗る形勝に富み行遊地として四時節を曳く者多し。

小森の甕塚

東宇和郡山田村大字山田字粟尻に在り三段三畝十二歩の地積を占め前方後圓式古墳にして外圓長五十四間幅二十間內圓長四十八間幅十三間高さ後圓十二尺前方十尺の一大古墳なり。（陪塚四個內前方の左右にあるもの圓墳二個經六尺高さ三尺、後圓に屬する二個は半は除去したるもの、如く形狀定かならず）此墳は戰國時代臨時防衛地と爲したるものと思ほしく墳上削平せられ、其後數次墳上を耕して畑作をなしたるものなり又墳の周圍を切り取りたるものと見ゆ然れ共大体に於て完全なり、今や墳域草木雜生せり。宇和の主權者宇和津彦命を葬りたる所と云ふ、又一說には國木長者の墳塋なりと云ふ。國木長者は山田村字國木に住したる大富豪にして上宇和村大字小野田の極樂寺を創立したる人なりと傳ふ。

【二重柿】

北宇和郡勢

面積戶口—面積五〇方里〇六四、世帶二〇、二六四、
人口一〇〇、三〇六
重要生產物—繭五、七三三、四五九圓、米二、七一三、五八一圓、柑橘二七四、七六九圓
諸官衙—松丸警察署
諸學校—町立吉田中學校、町村立實業補助學校三〇、小學校五八、幼稚園一
名所舊蹟—藤原純友の古蹟
鐵　道—私設宇和島鐵道宇和島吉野間
港—宇和島港、吉田港
社會事業—福利事業住宅組合一、兒童保護事業海禪寺託兒所、農繁託兒所四、
副　業—椎茸組合（日吉村）、屑繭加工組合（三浦村）

二重柿

北宇和郡清滿村大字岩淵字風呂の奥口滿願寺境内に在り柿の木の覆へる面積十坪にして樹の周圍凡三尺樹高五間の一本樹にて餘り果實を多産せざるもの、如し果實の形狀は稍々扁平澁柿に屬す種子極めて少く形不正なり、本株に成育せる果實は概れ果實内中軸をなせる球座の上端より更に小果實（此れを第一内果實と稱す）を生するを普通とし或る場合には第一内果實の中軸をなせる球座の先端に更に小果實（此れを第二内果實と稱す）を生し時として尙第三第四を生することあり、種子は不正形にして縱に數個の稜角を有し發芽力充分なり第一内果實も原始的種子を生する事あれ共概れ不完全なり。本種に相當すと認むるものを産する本邦分布を見るに靜岡縣、島根縣、石川縣、廣島縣等あり多少似たれ共全然一致すと認むこと能さるものなり。

藤原純友の古蹟

天慶中伊豫橘藤原純友が不軌を謀り遙かに平將門と通じて反旗を飜へせしは北宇和郡日振島なり純友こゝを根據地として南海、山陰の諸國を掠め海陸の行路を絶ちて遂に太宰府を陷れ勢焰最も猖獗なりしが官軍の爲に破られ古三津に戰死せりと云ふ。

南宇和郡勢

面積戸口—一五方里八九、世帶六、八三六、人口三二、三九六
重要生産物—漁獲物八九二、七七四圓、米五二三、五五三圓
諸官衙—御荘警察署
諸學校—縣立南宇和實業學校、町村立實業補習學校二三、小學校二一
名所舊蹟—觀自在寺
港—深浦港、平城港

昭和二年三月廿五日印刷
昭和二年三月卅一日發行

愛媛縣知事官房

印刷者　愛媛縣温泉郡久寶古三津三六六番地
高橋健市

印刷所　愛媛縣松山市一番町七番地ノ七
愛媛縣印刷所

313
349

終